非常に浅い。主軸方位はN－15°－Wを示す。

床面はほぼ平坦である。覆土はロームと焼土混じりの暗褐色土を基調とするが、堆積環境等の詳細は明らかにできなかった。

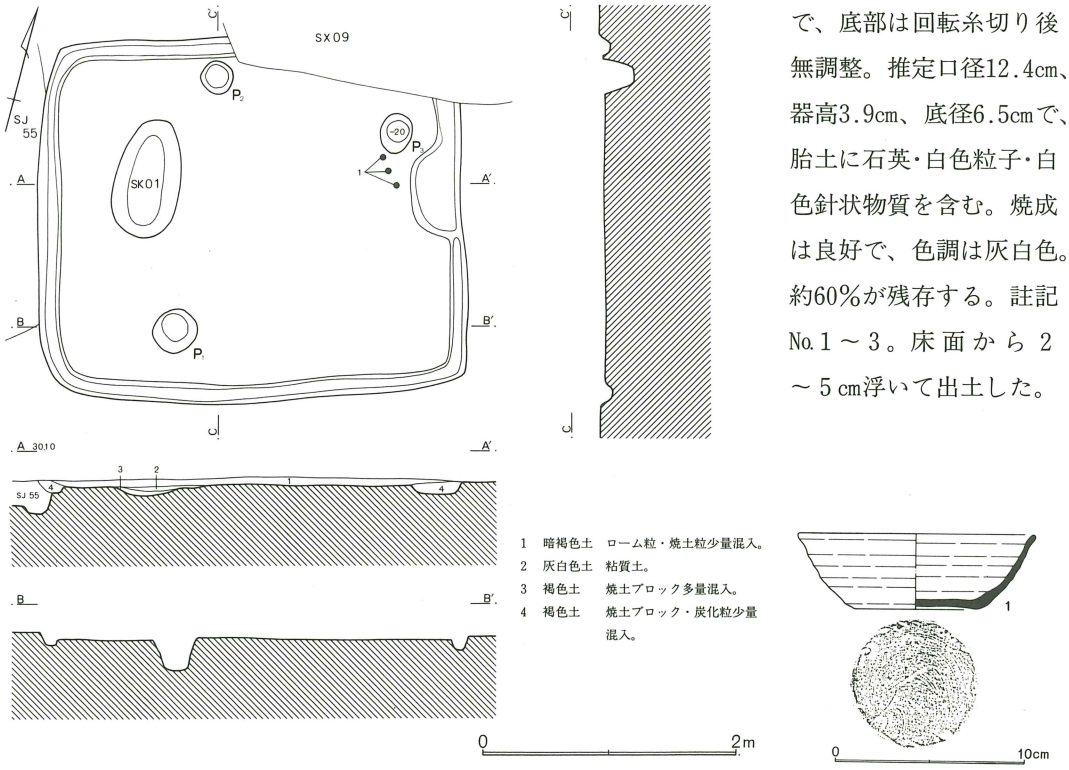
カマドは検出されなかった。本来、北壁に設置されていたものが竪穴状遺構構築時に破壊されたと考えることもできる。

ピットは３本検出されたが、中世以降の所産と考えられる。また、住居中央から西に寄った位置に土壙が１基検出された。上面に灰白色粘土による貼床が認められたことから、住居に伴う床下土壙の可能性がある。

壁溝は深さ５cm程で全周するが、東壁部では幅広となり一段深く掘り込まれていた。

出土遺物は少ない。土師器甕が１点と須恵器坏が２点、須恵器甕胴部片が検出されたに留まる。時期決定するには資料不足ではあるが、第435図に示した坏から一応稲荷前XII期と考えておきたい。

第435図１は須恵器坏で、底部は回転糸切り後無調整。推定口径12.4cm、器高3.9cm、底径6.5cmで、胎土に石英・白色粒子・白色針状物質を含む。焼成は良好で、色調は灰白色。約60％が残存する。註記No.１～３。床面から２～５cm浮いて出土した。

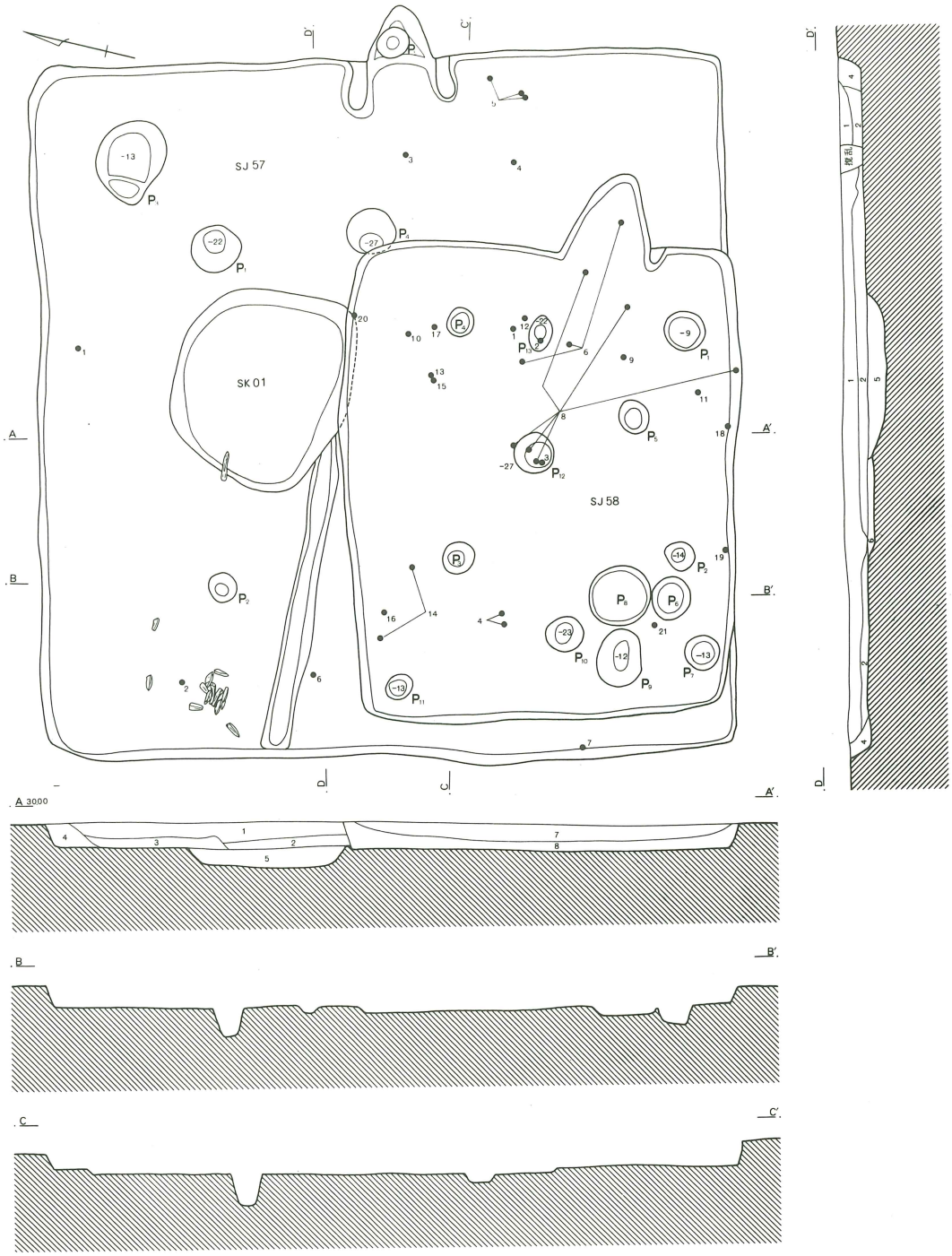



**第435図　C区第56号住居跡・出土遺物**

**C区第57号住居跡**（第436・437図）

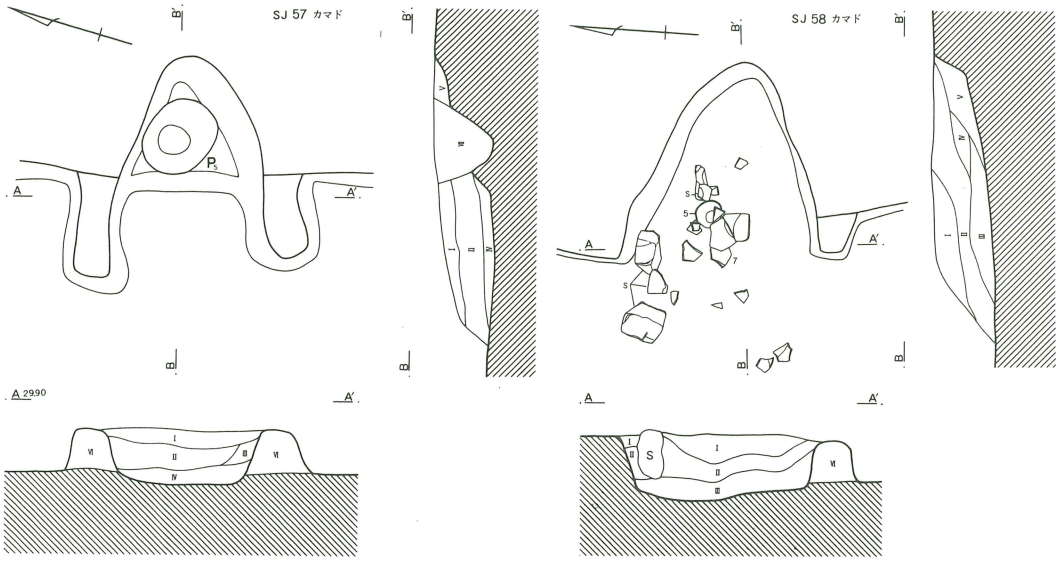
F・G-24・25区に位置し、重複する第58号住居跡に住居南半を破壊されていた。整った方形を呈する大形住居跡で、規模は長軸6.16m、短軸6.10m、深さ15～20cmを測る。主軸方位はN－74°－Eを示す。

床面は概ね平坦である。覆土は４層に分かれるが、焼土とロームブロックを多量に含む黒褐色土




1　黒褐色土　焼土・ロームブロック混入。しまり強。シルト質。
2　黒褐色土　焼土・ロームブロック多量混入。シルト質。
3　黒褐色土　ロームブロック多量に混入。
4　黒褐色土　ロームブロック・ソフトローム・焼土多量混入。
5　黒褐色土　ロームブロックと黒色土が縞状に堆積。
6　暗褐色土　ローム粒子混入。
7　黒褐色土　ソフトロームブロック少量混入。シルト質。
8　黒褐色土　ロームブロック少量混入。シルト質。

**第436図　C区第57・58号住居跡**




ＳＪ57カマド
Ⅰ　黒褐色土　ロームブロック多量混入。
Ⅱ　黒褐色土　ローム・焼土・炭化物と砂質粘土混入。
Ⅲ　黄褐色土　多量の砂質粘土と焼土粒子・ロームブロック混入。
Ⅳ　褐色土　焼土ブロックとローム多量混入。
Ⅴ　赤褐色土　焼土主体でブロック状を為す。
Ⅵ　黄灰色土　砂質粘土を主体とし、暗褐色土と黒褐色土混入。
Ⅶ　暗褐色土　ローム粒子少量混入。

ＳＪ58カマド
Ⅰ　黒褐色土　焼土ブロック・ローム多量混入。シルト質。
Ⅱ　黒褐色土　焼土ブロック・ローム多量混入。シルト質。
Ⅲ　黒褐色土　焼土・ソフトローム多量混入。シルト質。
Ⅳ　黒褐色土　焼土ブロック・炭化物多量混入。シルト質。
Ⅴ　黒褐色土　ロームブロック多量混入。シルト質。
Ⅵ　黒褐色土　焼土少量、砂質粘土・ローム多量混入。シルト質。

0　1m

**第437図　Ｃ区第57・58号住居跡カマド**

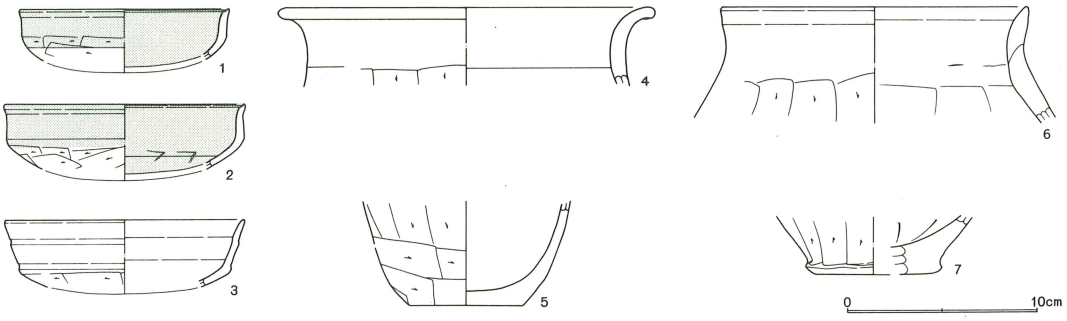
で構成され、あまり大きな土層変化は観察されなかった。

カマドは東壁に位置する。全長約90cm、焚口部幅60cmで、煙道部は壁を45cm切り込んで構築されている。また、煙道部に検出されたピットは土層観察からカマドを切っていることが判明した。燃焼部はほぼ壁内に納まり、底面は平坦で床面下の掘り込みは認められない。カマド覆土は６層に分かれ、第Ⅱ～Ⅴ層が天井部及び袖部の崩落土に相当しよう。第Ⅶ層はピット埋土。袖は黄灰色の砂質粘土を主体に構築され、遺存状態は比較的良好であった。

ピットは５本検出された。$P_1$・$P_2$は主柱穴となる可能性もあるが対応する柱穴が見出せず、配置は不明とせざるを得ない。$P_5$は楕円形プランで長径72cm、短径62cm、深さ13cmを測る。位置から見ると貯蔵穴となるかもしれないい。その他、径1.75ｍを測る大形土壙が１基（ＳＫ01）検出された。断面観察から本住居跡に伴うものと判断された。埋土はロームブロックと黒色土が互層となり、明らかに人為的な埋め戻しと考えられる。

ＳＫ01から西壁に向かって延びる幅20cm、深さ５cm程の小溝が１条検出された。住居に伴う施設と推定され、間仕切り溝となるかもしれない。

出土遺物には土師器と須恵器があり、後者は混入である（第438図）。土師器は坏が16点、椀が１点、甕が６点、小形甕が１点、壺が１点検出された（何れも口縁部破片数）。坏は有段口縁坏が１点（第438図３）、模倣坏系の比企型坏１点、比企型坏14点という割合となり比企型坏の構成比が高い。良好な資料はないが、土器様相から７世紀前半代、稲荷前Ⅱ期～Ⅲ期頃と考えている。




**第438図　C区第57号住居跡出土遺物**

**C区第57号住居跡出土遺物観察表**(第438図)

| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器高 | 底　径 | 胎　土 | 焼成 | 色　調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | (11.0) | 2.7 | | ABC | A | 浅黄橙 | 20% | No.19　覆土(+11cm)　赤彩 |
| 2 | 坏 | (12.6) | 3.4 | | ABC | B | にぶい橙 | 30% | No.61　床面　赤彩 |
| 3 | 坏 | (12.6) | 3.5 | | ABC | B | にぶい黄橙 | 15% | No.23　覆土(+22cm)　無彩 |
| 4 | 甕 | (19.0) | 4.1 | | ABC | A | にぶい橙 | 15% | No.32　覆土(+6cm) |
| 5 | 甕 | | 5.5 | 6.0 | ABC | B | にぶい褐 | 70% | No.77～79　床面 |
| 6 | 甕 | (16.0) | 6.1 | | ABC | A | 淡黄 | 10% | No.67　覆土(+4cm) |
| 7 | 甕 | | 3.1 | (7.2) | ABC | B | 橙 | 30% | No.73　覆土(+4cm) |

**C区第58号住居跡**(第436・437図)

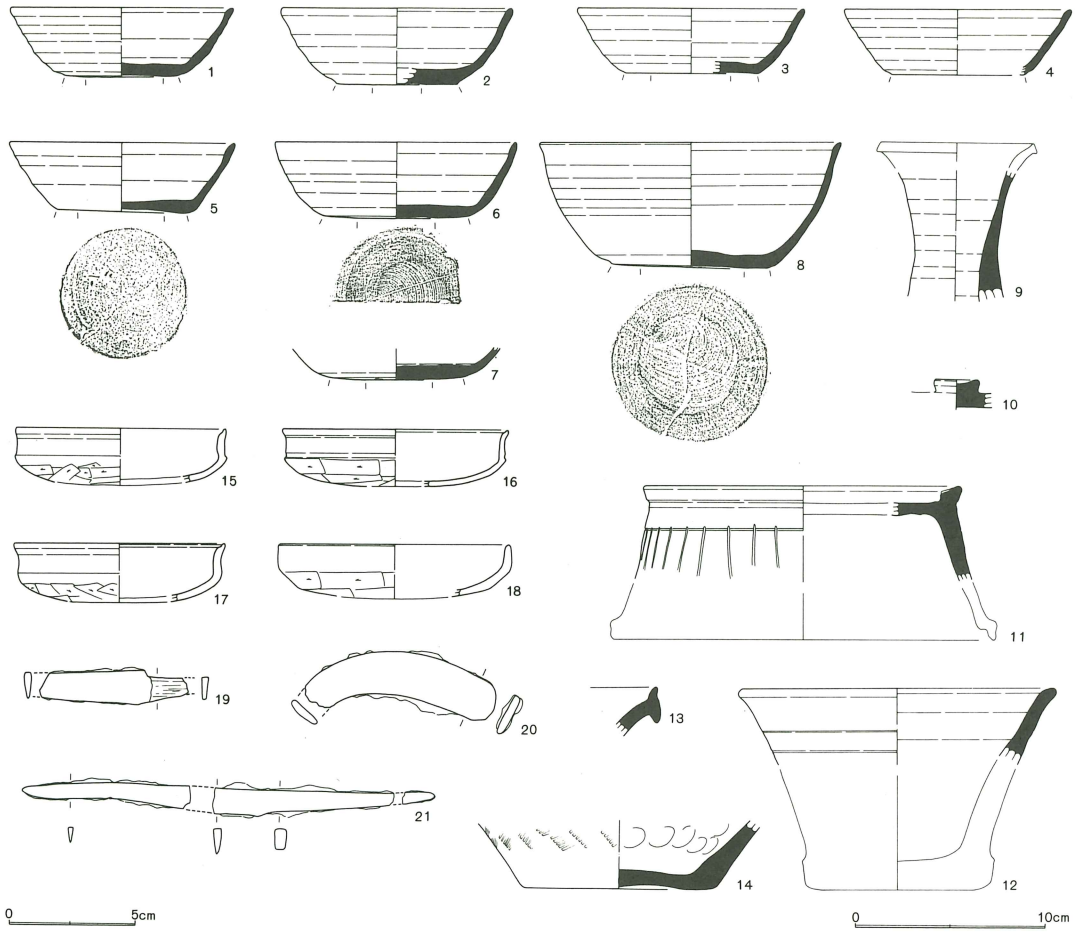
G-24・25区に位置し、第57号住居跡を切って構築されていた。形態は長方形を呈し、規模は長軸4.20m、短軸3.32m、深さ20cmを測る。主軸方位はN－78°－Eを示す。

床面は概ね平坦である。覆土は大きく上下2層に分かれ、ロームブロックを少量含む黒褐色土で構成されていた。

カマドは東壁に位置し、壁を70cm程切り込んで構築されている。最大幅は76cm、底面はフラットで床面下の掘り込みは認められない。燃焼部と煙道の区別は不明瞭であるが、燃焼部の主体は壁外にあるものと推定される。カマド覆土は5層に分かれ、第Ⅰ～Ⅳ層は天井部崩落土、第Ⅴ層は流入土に相当しようか。袖は右袖部が僅かに検出されたが、遺存状態は悪い。砂質粘土とロームを含む黒褐色土で構成されていた。カマド内からは礫が数点検出されたがカマドに使用されたものか否かは明確にはできなかった。

ピットは住居内から13本検出された。その大半は中世の所産と推定され、住居に伴う柱穴は確定できなかった。壁溝及び貯蔵穴は存在しない。

出土遺物には土師器と須恵器がある。土師器は坏と甕が検出されたが前者は混入である。須恵器は坏類が51点、蓋5点、甕2点、長頸瓶1点、磨鉢1点と円面硯が1点ある。須恵器坏は口径11cm代が中心となり(第439図1～5)、最大でも12.7cmである(6)。何れも底部は再調整されている。円面硯は内堤がなく、脚部の装飾は沈線による刻みが施されるのみとなっている。その他鉄器が3点検出された。19・21は刀子、20は鉄鎌状に湾曲するが、側面には刃が付されていない。須恵器坏類の様相から稲荷前Ⅸ期～Ⅹ期、主体はⅩ期にあるものと考えられる。




**第439図　C区第58号住居跡出土遺物**

**C区第58号住居跡出土遺物観察表**(第439図)

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | (11.6) | 3.7 | 6.0 | ABC | B | 灰黄 | 60% | No.116　覆土(+10cm) |
| 2 | 坏 | (12.0) | 4.0 | 6.4 | ABC | C | 灰白 | 45% | No.154　床面 |
| 3 | 坏 | (11.8) | 3.4 | (7.0) | ABC | B | 灰白 | 25% | No.103　覆土(+12cm) |
| 4 | 坏 | (11.8) | 3.4 | (7.0) | ABC | A | 緑灰 | 15% | No.58,60　覆土(+2～14cm) |
| 5 | 坏 | 11.8 | 3.7 | 6.8 | ABC | B | 灰黄 | 95% | No.175　カマド内 |
| 6 | 坏 | 12.7 | 4.0 | (7.6) | ABC | A | 灰 | 45% | No.176,他　カマド内　112,他　覆土 |
| 7 | 坏 | | 1.6 | 7.0 | ABC | A | オリーブ灰 | 70% | No.166　カマド内 |
| 8 | 椀 | 15.8 | 6.6 | 8.2 | ABC | A | 灰 | 80% | No.162,他　カマド内　101,他　覆土 |
| 9 | 長頸壷 | | 6.8 | | ABC | B | 灰黄 | 30% | No.119　覆土(+21cm) |
| 10 | 蓋 | | | | BC | A | 明緑灰 | | No.77　覆土(+4cm) |
| 11 | 円面硯 | (16.5) | 5.0 | | ABJ | D | 灰白 | 15% | No.155　覆土(+5cm) |
| 12 | 磨鉢 | (16.3) | 4.0 | | ABC | A | 緑灰 | 10% | No.117　覆土(+17cm) |
| 13 | 甕 | | 2.6 | | ABC | A | 灰 | | No.75　覆土(+21cm) |
| 14 | 壺 | | 3.6 | (9.8) | ABC | A | 灰白 | 35% | No.6,13　覆土(+6～14cm) |
| 15 | 坏 | (11.0) | 2.8 | | ABC | B | にぶい橙 | 20% | No.76　覆土(+18cm)　赤彩　混入 |
| 16 | 坏 | (11.8) | 3.0 | | ABC | C | 橙 | 15% | No.7　床面　赤彩　混入 |

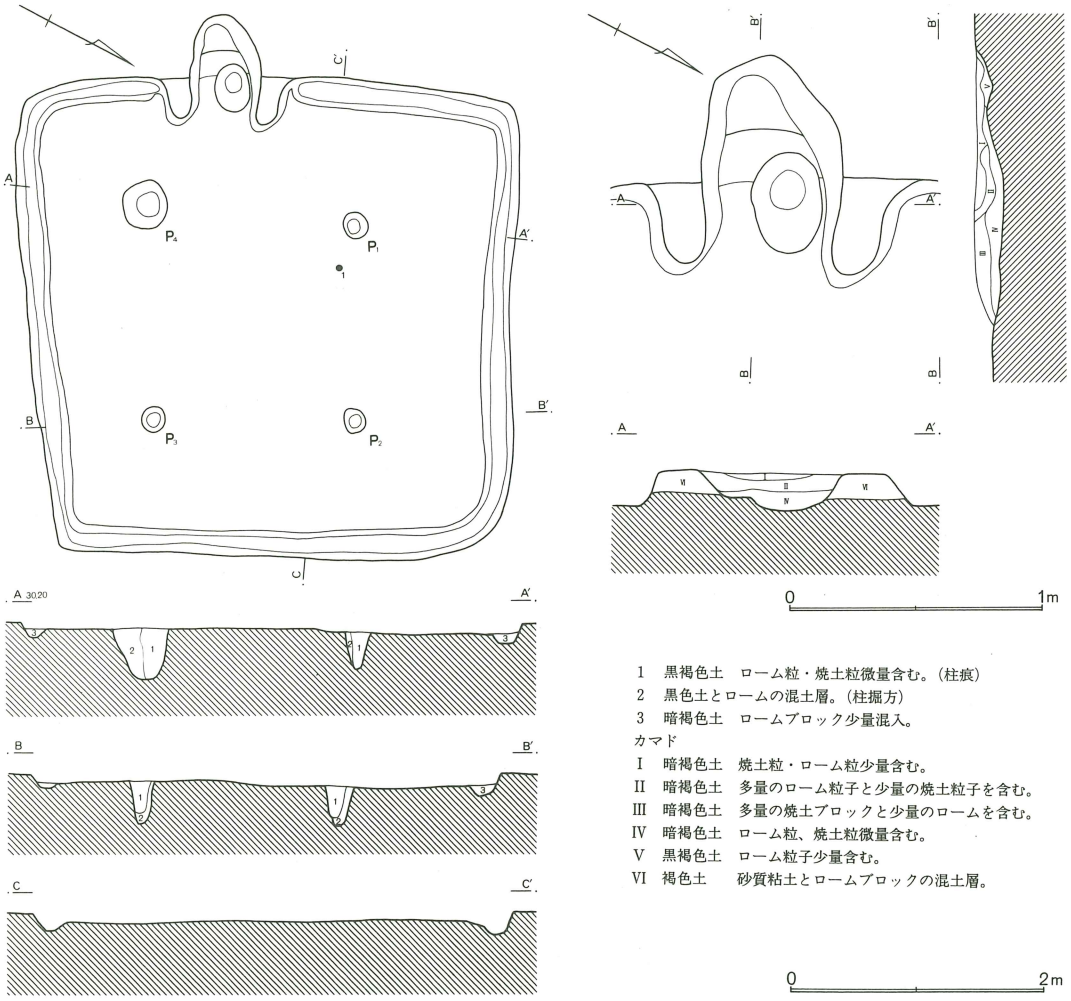
| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器高 | 底　径 | 胎　　土 | 焼成 | 色　調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 17 | 坏 | (11.0) | 3.1 | | ＡＢ | Ａ | にぶい橙 | 20% | No.80　床面　赤彩　混入 |
| 18 | 坏 | (12.0) | 2.7 | | ＡＢ | Ｂ | 橙 | 20% | No.142　覆土(＋4cm)　北武蔵系 |
| 19 | 刀　子 | | | | | | | | No.156　床面　残長6.0cm　最大幅1.4cm |
| 20 | 鉄製品 | | | | | | | | No.152　覆土(＋9cm)　残長7.6cm |
| 21 | 刀　子 | | | | | | | | No.157　床面　推定長約16.3cm |

**Ｃ区第59号住居跡**(第440図)

調査区南端のＪ・Ｋ-23区に位置する。形態は方形を呈し、規模は長軸3.80ｍ、短軸3.74ｍ、深さ10cmを測る。主軸方位はＳ－65°－Ｗを示す。

床面は平坦である。覆土は暗褐色土単層で土層変化は観察されなかった。

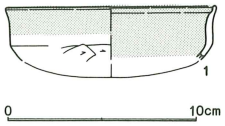
カマドは西壁に位置し、壁を50cm切り込んで構築されていた。袖部から先端までの長さは90cm、燃焼部幅55cmを測る。燃焼部底面にはピット状の掘り込みが検出された。煙道部は緩やかに立上がる。覆土は５層に分かれる。第Ⅰ～Ⅲ層が天井部崩落土に相当しよう。袖は砂質粘土とロームブロ




**第440図　Ｃ区第59号住居跡・カマド**

ックの混土で構築されていた。

ピットは４本検出され、何れも住居に伴う主柱穴と考えられる。壁溝は深さ10cm程でカマドを除いて全周する。




第441図　Ｃ区第59号住居跡出土遺物

出土遺物は極めて少なく、土師器坏と甕がそれぞれ１点(口縁部破片)出土したに過ぎない。第441図１は比企型坏で赤彩されている。小片のため口径は不安定であるが比較的小振りとなろう。時期の限定は困難であるが、おそらく７世紀中葉前後となろう。

第441図１は土師器坏で推定口径11.0cm。胎土に石英と白色針状物質を含み焼成は良好である。色調はにぶい橙色。残存率は10%に満たない。註記No.３。覆土上面(床面上９cm)出土。

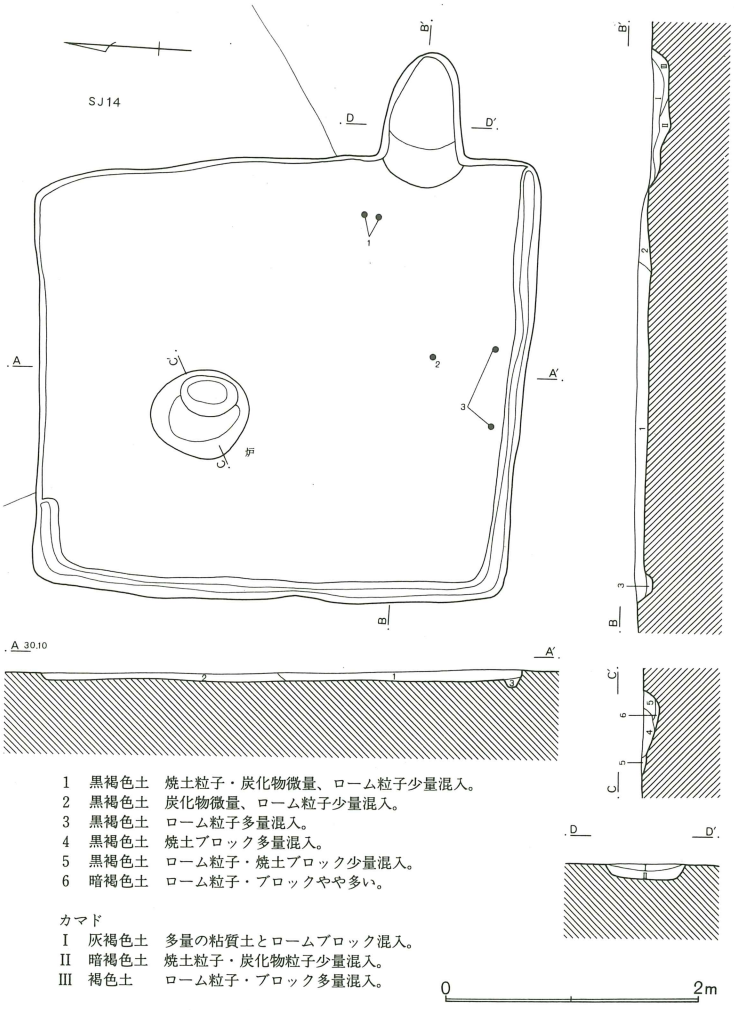
**Ｃ区第60号住居跡**(第442図)

Ｋ-24区に位置し、五領期の第14号住居跡を切って構築されていた。形態は方形を呈し、規模は長軸3.84ｍ、短軸3.46ｍ、深さは５～10cmを測る。主軸方位はＳ－88°－Ｅを示す。

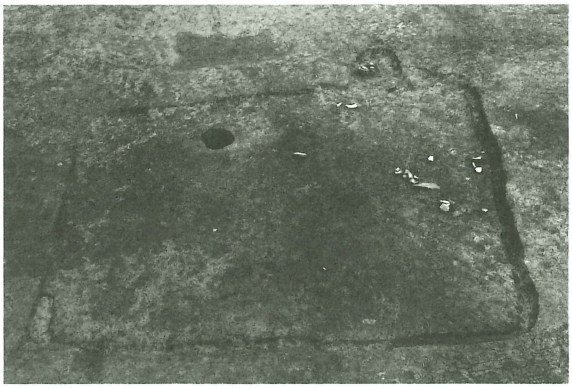
床面は概ね平坦ではあるが、全体に軟弱だった。覆土は２層に分かれるが、両層ともに黒褐色土を基調とし、大きな差異はない。

カマドは東壁の南に偏した位置に設置される。壁を80cm程切り込み、袖は検出されなかった。全長は105cm、幅65cmで底面は床面から15cm程掘り込まれている。覆土は３層に分かれ第Ⅰ・Ⅲ層は天井部崩落土と思われる。

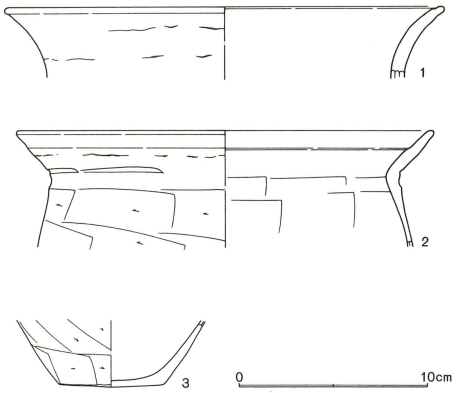
貯蔵穴、ピットは検出されなかったが、住居中央からやや北によった位置に直径80cm程の円形プランをもつ炉跡が検出された。住居に伴うもの




第442図　Ｃ区第60号住居跡



遺物出土状況




第443図　C区第49号住居跡出土遺物

と考えられるが、鉄滓等の出土もなく性格は不明である。

壁溝は深さ５～10cm程で南壁から西壁を中心に巡っていた。

出土遺物は少なく、土師器甕・壺と須恵器甕が検出されたに過ぎない。第443図１は壺、２・３は土師器甕である。甕は武蔵型甕の系譜に連なるもので口縁部は「く」の字に屈曲する。８世紀前半代、稲荷前Ⅶ期頃に位置付けられるものであろう。

**C区第60号住居跡出土遺物観察表**(第443図)

| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器高 | 底　径 | 胎　土 | 焼成 | 色　調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 壺 | (23.0) | 3.8 | | ＡＢＥ | Ａ | 橙 | 15% | №2,3　床面 |
| 2 | 甕 | 20.8 | 6.1 | | ＡＢＣＪ | Ａ | にぶい橙 | 35% | №5　床面 |
| 3 | 甕 | | 3.5 | 5.6 | ＡＢＥ | Ａ | にぶい橙 | 35% | №7,9　床面 |

**C区第61号住居跡**(第444図)

E・F-25区に位置する。五領期の第12号住居跡を切って構築され、第62号住居跡とは壁を接する位置にある。形態は方形を呈し、規模は長軸3.84ｍ、短軸3.20ｍ、深さ20cmを測る。主軸方位はＮ－３°－Ｗを示す。

床面は西半が比較的堅く、第12号住居跡上面に当たる東半では軟弱であった。覆土は４層に分かれる。ロームと焼土を含む黒褐色土を基調としていた。

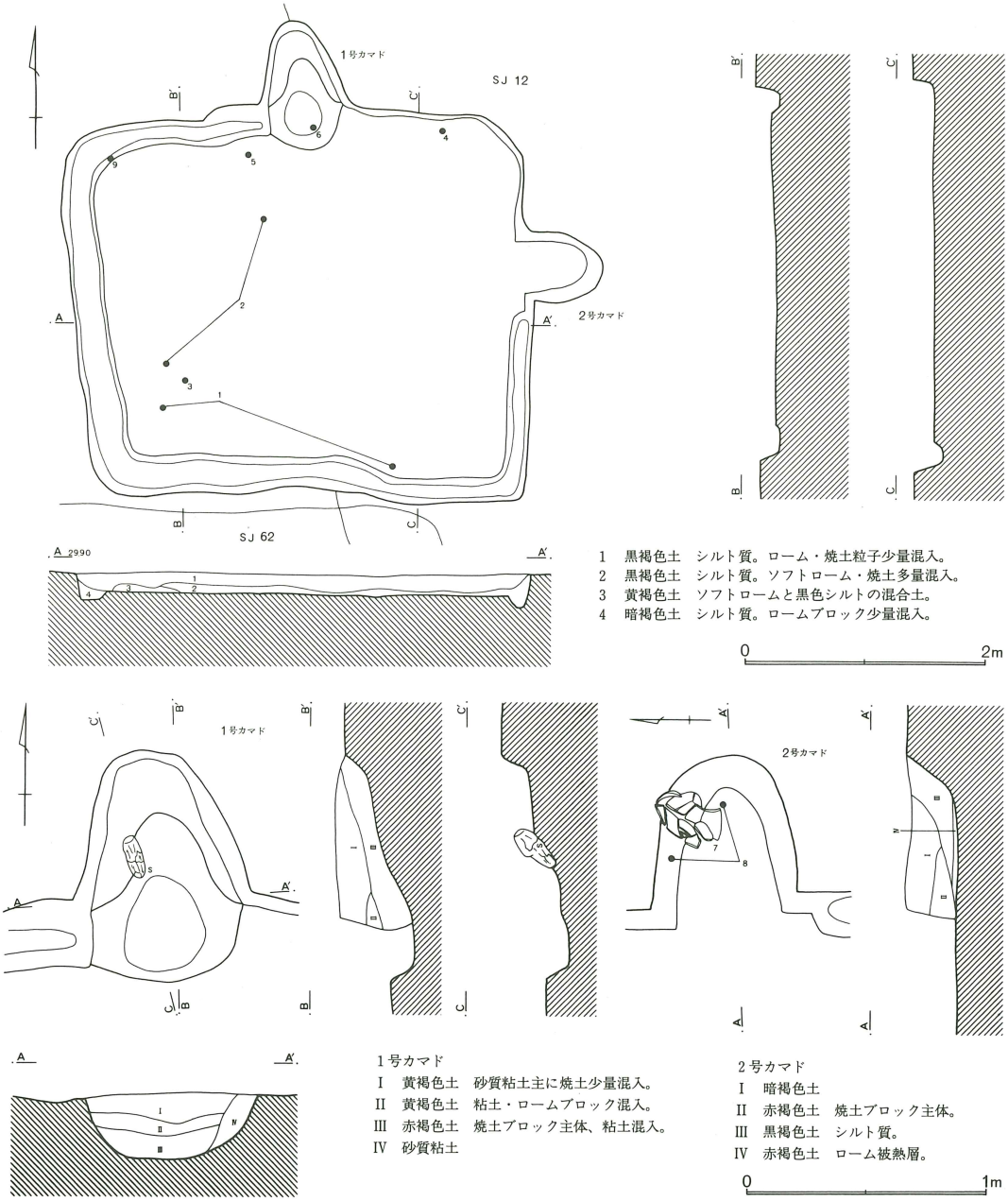
カマドは北壁と東壁の２か所に設けられていた。第１号カマドは北壁に設置され、規模は焚口から先端までの長さ90cm、上幅70cmを測る。燃焼部底面には石製支脚が遺存していた。

第２号カマドは東壁にあり、壁を55cm切り込んで構築されていた。底面はほぼフラットで床面下の掘り込みはほとんど見られない。覆土上面からは土師器甕が横倒しの状態で出土した。何れのカマドにも壁内の袖部は検出されず新旧関係は確定できないが、土器の遺存状態から見て２号カマドが新しいものと判断された。

貯蔵穴、及びピットは検出されなかった。

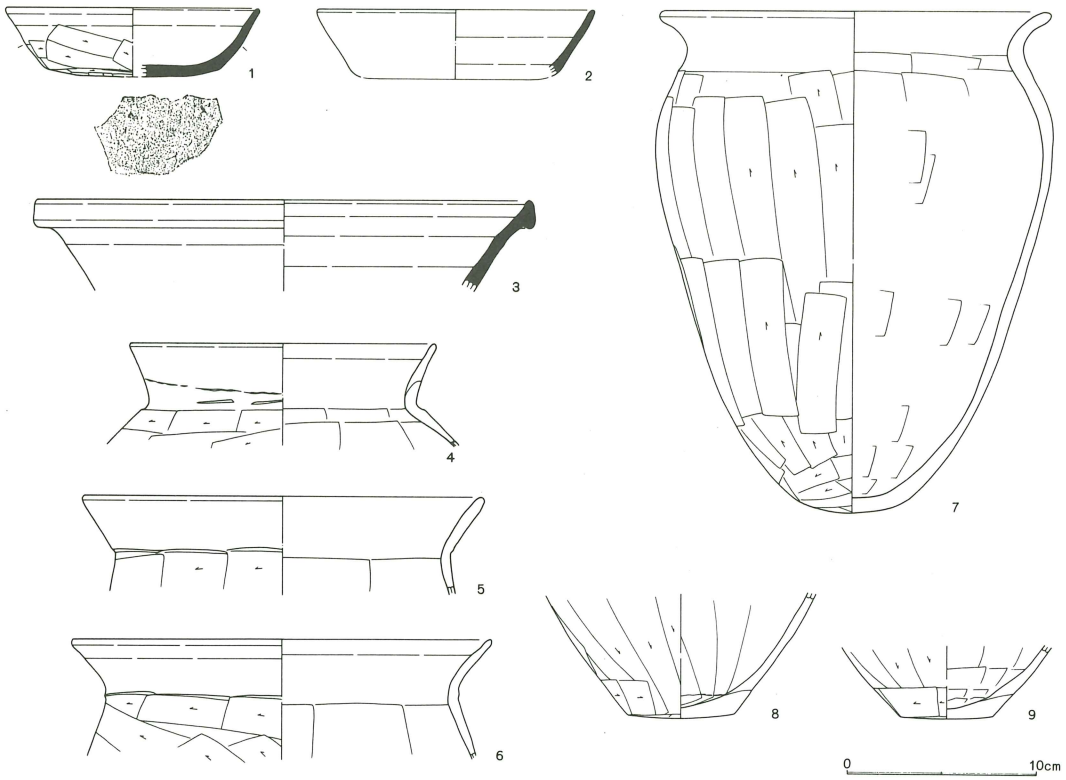
壁溝は深さ５～10cmで、両カマド間の北東コーナーを除いて巡っていた。

出土遺物には土師器と須恵器がある。土師器は甕が16点、小形甕１点、壺１点、須恵器は坏が９点、蓋５点、甕１点、長頸瓶１点が検出された(口縁部破片数)。




**第444図　C区第61号住居跡・カマド**

第445図1・2は須恵器坏で、前者は底部から体部にかけて手持ちヘラケズリが施されている。土師器甕はいわゆる「く」の字状口縁甕(5・6)と胴部縦方向のヘラケズリが施される在地系の甕(7)がある。6は胴部の張りが大きく壺(丸甕)かもしれない。7は第2号カマド上面から出土した。技法的には古い様相をもつが形態的には7世紀代の甕の典型例とは大きく異なる。遺構に伴うとすれば古墳時代の系譜を引く在地産の甕では最新のものとなろう。須恵器坏と土師器甕の様相から稲荷前Ⅶ期を中心とした時期に比定されよう。




**第445図　C区第61号住居跡出土遺物**

**C区第61号住居跡出土遺物観察表**(第445図)

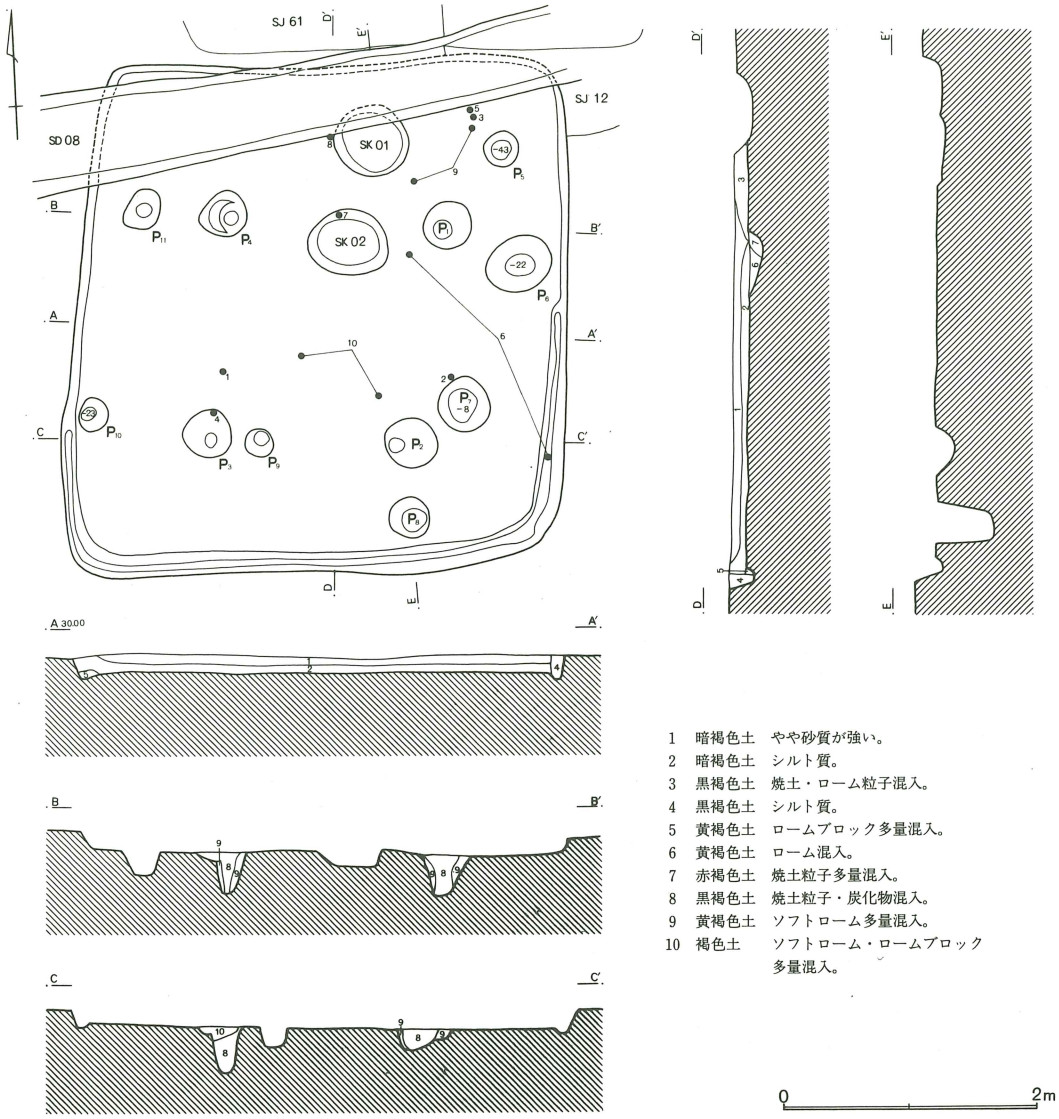
| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器高 | 底　径 | 胎　　土 | 焼成 | 色　調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | (13.2) | 3.6 | (9.0) | BC | A | 灰 | 25% | No.69,97　覆土(+12～13cm) |
| 2 | 坏 | (14.4) | 3.5 | | ABC | A | 緑灰 | 30% | No.33,68　覆土(+13～16cm) |
| 3 | 甕 | (26.0) | 4.8 | | ABC | A | オリーブ灰 | 5% | No.70　覆土(+16cm) |
| 4 | 甕 | (16.0) | 5.4 | | ABE | B | 橙 | 25% | No.139　床面 |
| 5 | 甕 | (21.0) | 5.1 | | ABEJ | B | 橙 | 15% | No.4　覆土(+4cm) |
| 6 | 甕 | (22.0) | 6.3 | | ABEJ | B | 橙 | 20% | No.123　覆土(+7cm) |
| 7 | 甕 | (20.0) | 26.3 | | ABC | B | にぶい黄橙 | 40% | カマド　胴下半煤付着　底部丸底 |
| 8 | 甕 | | 6.5 | (5.6) | ABE | A | にぶい黄橙 | 30% | No.158,159　カマド内 |
| 9 | 甕 | | 3.8 | 4.8 | ABE | B | にぶい褐 | 40% | No.2　覆土(+14cm) |

**C区第62号住居跡**(第446図)

F-25区に位置する。重複関係は五領期の第12号住居跡を切り、第8号溝跡に北壁部を攪乱されていた。また、北側には第61号住居跡が隣接する。形態は方形を呈するものと推定され、規模は長軸4.04m、短軸3.90m、深さ15cmを測る。主軸方位はN－3°－Eを示す。

床面はほぼ平坦で、全体に堅く締まっていた。覆土は暗褐色土を基調とし、SK01付近には焼土粒子の含有が目立った。

カマドは検出されなかった。覆土中の焼土の散布状態から見て北壁に設置された可能性が高いが、第61号住居跡と第8号溝跡に破壊されたものと推定される。

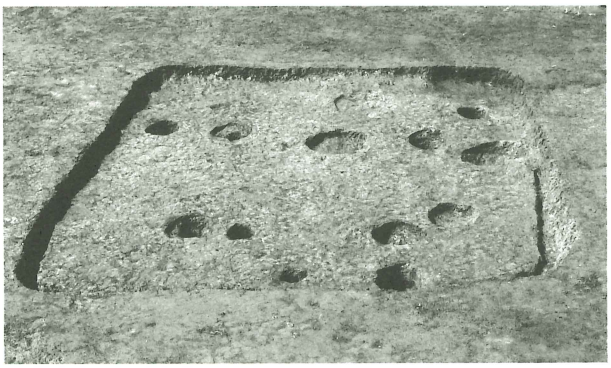



**第446図　C区第62号住居跡**

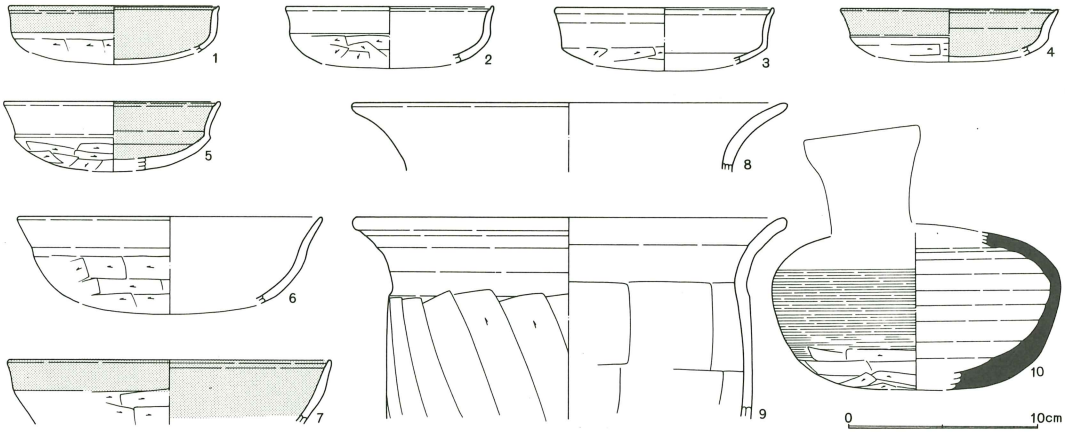
ピットは11本検出され、$P_1$～$P_4$が主柱穴に相当しよう。他のピットの大半は中世の所産と推定される。土壙は2基あり、SK01はカマドに伴う掘り込みかもしれない。SK02は埋土中に焼土が多量に認められたが、性格は明らかにできなかった。

壁溝は深さ10cm程で、住居南半を中心に巡っていた。

出土遺物は須恵器平瓶片を除くと全て



**全　景**




**第447図　C区第62号住居跡出土遺物**

土師器で占められ、坏が10点、椀が２点、甕が８点検出された。第447図１～５は口縁部内面に沈線をもつ比企型坏系統のもので、４・５は模倣坏の影響が強い。５の内面は黒色処理されている。10は須恵器平瓶と思われる。胴部はカキ目、底部は手持ちヘラケズリ調整されている。焼成は甘く、胎土に白色針状物質が少量含まれ在地産と推定される。土器様相から稲荷前Ⅳ期に比定されよう。

**C区第62号住居跡出土遺物観察表**(第447図)

| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器高 | 底　径 | 胎　土 | 焼成 | 色　調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | 11.0 | 2.5 | | ＡＢ | Ａ | 灰褐 | 5% | No.62　覆土(＋6cm)　赤彩 |
| 2 | 坏 | (10.8) | 3.0 | | ＡＢ | Ａ | にぶい褐 | 10% | No.32覆土(＋9cm)　無彩 |
| 3 | 坏 | (11.5) | 3.0 | | ＡＢＣ | Ａ | 浅黄橙 | 10% | No.9　床面　無彩 |
| 4 | 坏 | (11.4) | 2.5 | | ＡＢＣ | Ａ | にぶい橙 | 10% | No.65　覆土(＋6cm)　赤彩 |
| 5 | 坏 | (11.4) | 3.6 | | ＡＢＣ | Ｂ | にぶい褐 | 40% | No.6　床面　内面黒色処理　赤彩 |
| 6 | 椀 | (16.0) | 4.5 | | ＡＢＣ | Ｂ | にぶい黄橙 | 15% | No.18,41　覆土(＋2～14cm) |
| 7 | 椀 | (17.0) | 3.3 | | ＡＢ | Ａ | にぶい橙 | 5% | No.51　覆土(＋4cm)　赤彩 |
| 8 | 甕 | (22.6) | 3.7 | | ＡＢＣ | Ａ | 浅黄橙 | 20% | No.47　床面 |
| 9 | 甕 | (22.4) | 10.5 | | ＡＢＣ | Ａ | にぶい黄橙 | 20% | No.13,40　覆土(＋5～6cm) |
| 10 | 平　瓶 | | 8.2 | | ＡＢＣ | Ｄ | 灰黄 | 30% | No.35,55　床面　在地(南比企産) |

**C区第63号住居跡**(第448・450図)

住居密集区の一角、Ｆ-24・25区に位置し、第64号住居跡と第５号竪穴状遺構(ＳＸ09)に切られている。形態は横長の長方形を呈し、規模は長軸4.68ｍ、短軸3.74ｍ、深さ10～15cmを測る。主軸方位はＮ－22°－Ｗを示す。

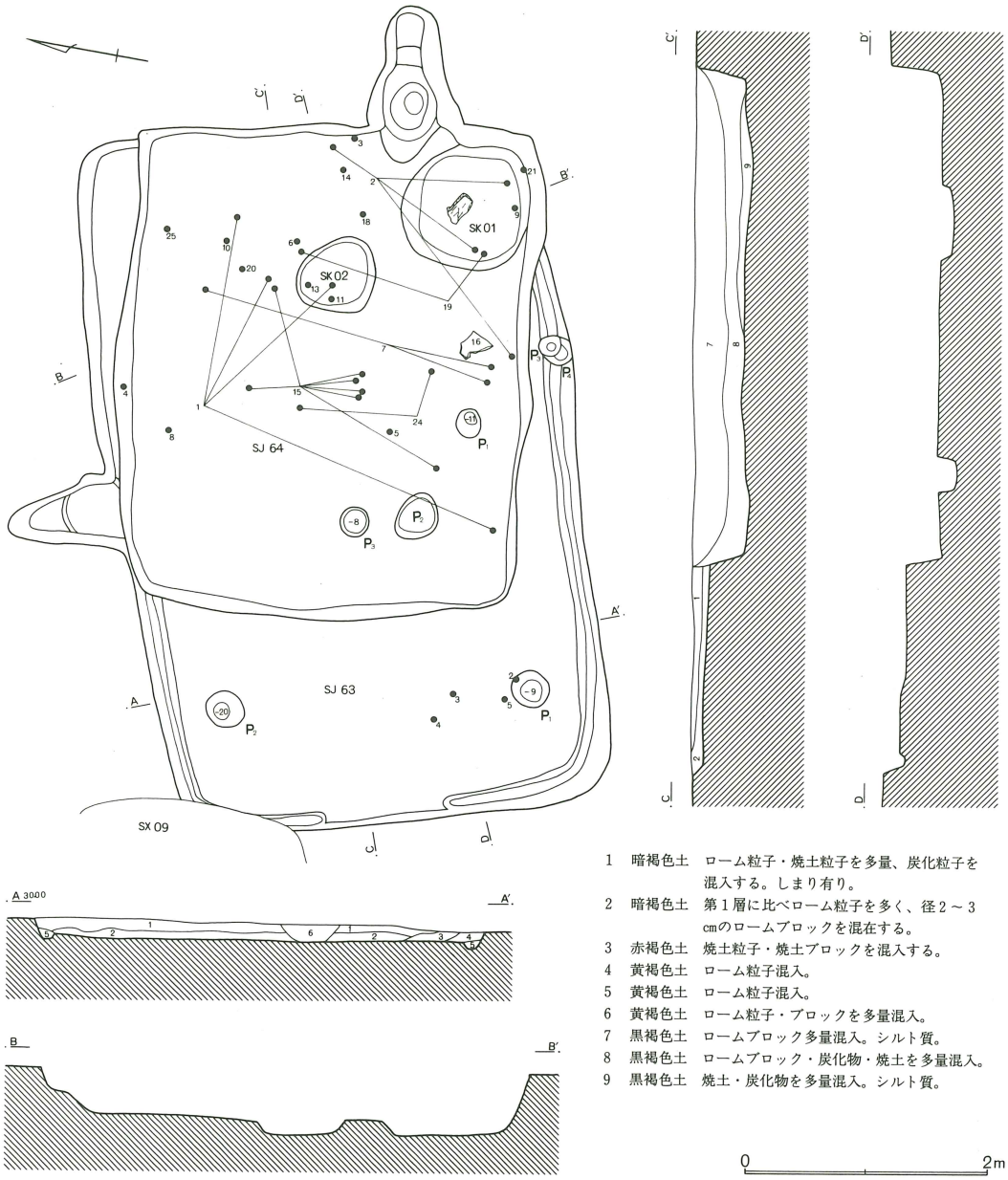
床面は堅く踏み固められているが凹凸が顕著である。覆土にはローム粒子と焼土粒子が多量に含まれ、自然堆積とは思われない。

カマドは北壁に設置されるが、袖部は第64号住居跡に破壊され詳細は不明。壁外に90cm程延び、最大幅は65cmを測る。覆土は５層に分かれ、第Ⅱ層～Ⅳ層は天井部崩落土と考えられる。

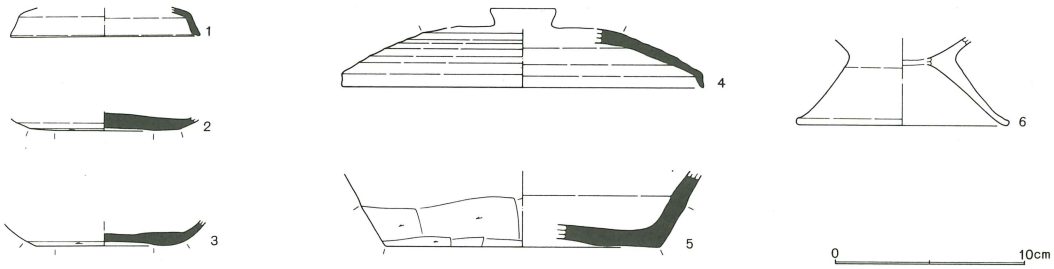
ピットは４本検出されたが、主柱穴となるかどうかは明確ではない。

壁溝は深さ５cm程と浅く部分的に途切れていた。

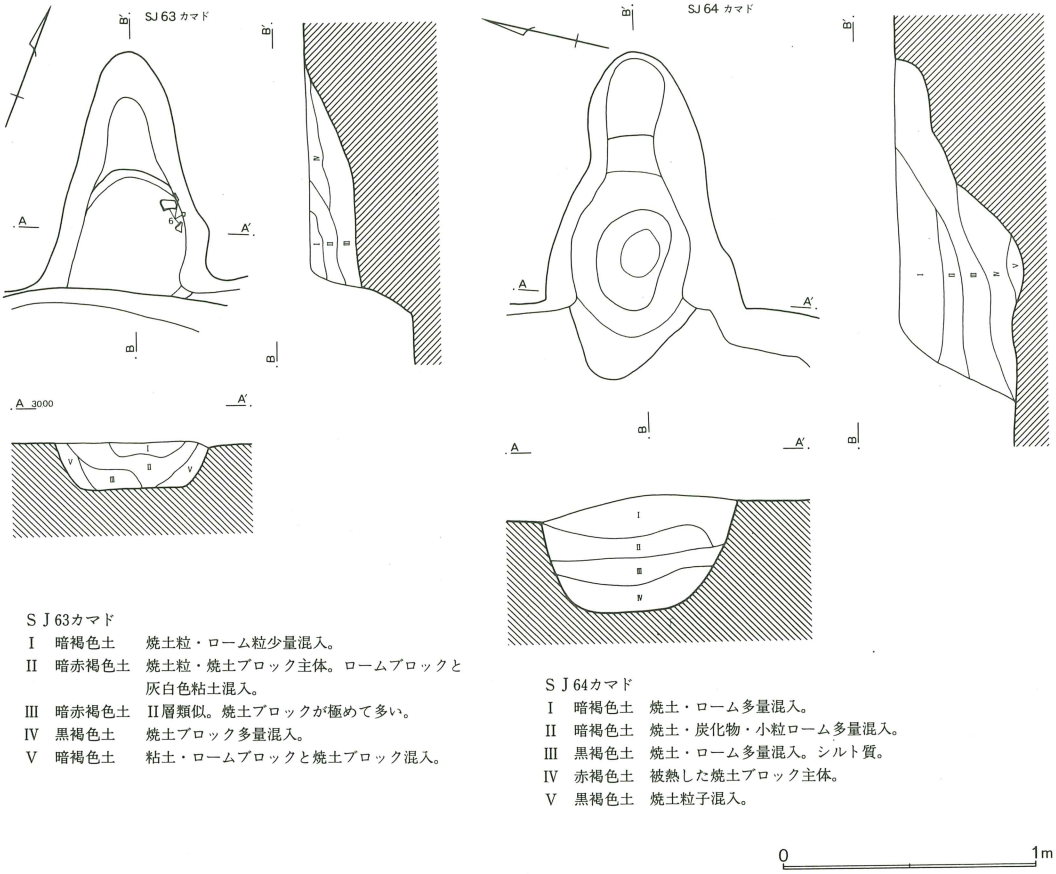
遺物は土師器と須恵器が検出された。土師器は甕が４点、台付甕１点、須恵器は坏が７点、蓋１




第448図　C区第63・64号住居跡




第449図　C区第63号住居跡出土遺物




ＳＪ63カマド
Ⅰ　暗褐色土　焼土粒・ローム粒少量混入。
Ⅱ　暗赤褐色土　焼土粒・焼土ブロック主体。ロームブロックと灰白色粘土混入。
Ⅲ　暗赤褐色土　Ⅱ層類似。焼土ブロックが極めて多い。
Ⅳ　黒褐色土　焼土ブロック多量混入。
Ⅴ　暗褐色土　粘土・ロームブロックと焼土ブロック混入。

ＳＪ64カマド
Ⅰ　暗褐色土　焼土・ローム多量混入。
Ⅱ　暗褐色土　焼土・炭化物・小粒ローム多量混入。
Ⅲ　黒褐色土　焼土・ローム多量混入。シルト質。
Ⅳ　赤褐色土　被熱した焼土ブロック主体。
Ⅴ　黒褐色土　焼土粒子混入。

**第450図　Ｃ区第63・64号住居跡カマド**

点と甕底部、器種不明品がある。

第449図１は一応小形の壺蓋としたが器種が良くわからない。端面に沈線が巡る小形製品である。２・３は坏で底部は再調整されている。良好な資料に欠け時期は不明確であるが、８世紀後半代(稲荷前Ⅷ期～Ⅸ期)頃と推定される。

**Ｃ区第63号住居跡出土遺物観察表**(第449図)

| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器高 | 底　径 | 胎　土 | 焼成 | 色　調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 壺蓋？ | (10.0) | 1.5 | | ＢＣ | Ａ | 灰 | 5% | 覆土　器種不明確　小形製品 |
| 2 | 坏 | | 1.0 | 8.0 | ＡＢＣ | Ｂ | 灰白 | 80% | No.7　床面 |
| 3 | 坏 | | 1.4 | (7.2) | ＡＢＣ | Ａ | 灰白 | 30% | No.4　覆土(＋6cm) |
| 4 | 蓋 | (19.0) | 3.1 | | ＡＢＣ | Ａ | 灰白 | 25% | No.2　覆土(＋5cm) |
| 5 | 甕 | | 4.0 | (14.5) | ＡＢＣ | Ａ | 灰 | 40% | No.6　覆土(＋6cm) |
| 6 | 台付甕 | | 4.6 | (11.0) | ＡＢＥ | Ｂ | にぶい橙 | 35% | 覆土 |

**Ｃ区第64号住居跡**(第448・450図)

Ｆ-25区に位置し、第63・65号住居跡を切って構築される。形態は長方形を呈し、規模は長軸4.02ｍ、短軸3.36ｍ、深さは40cmを測る。主軸方位はＮ－86°－Ｅを示す。

床面は凹凸が比較的顕著である。覆土は３層に分かれ、ロームブロックを多量に含む黒褐色土を

基調とする。

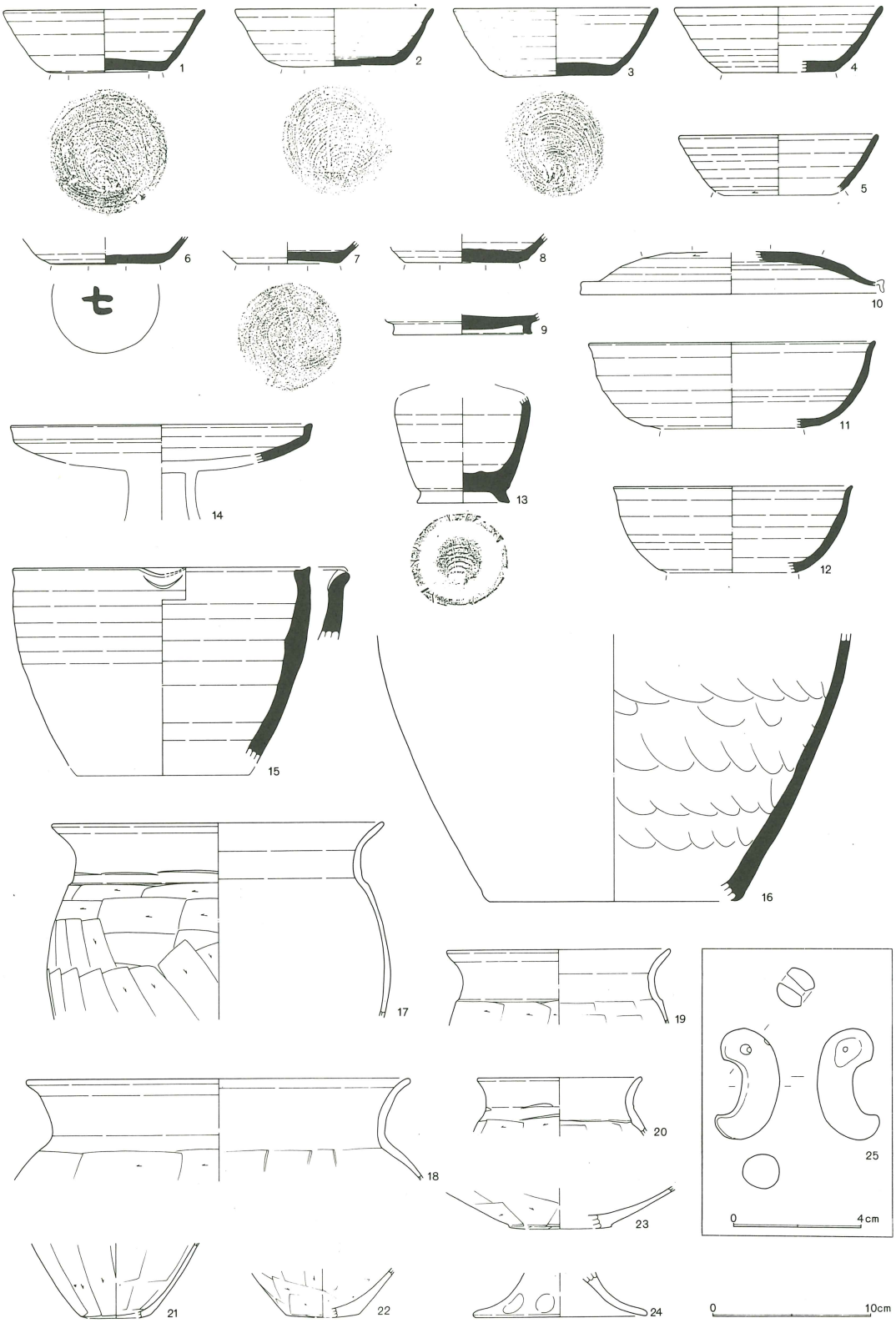
カマドは東壁に設置され、壁外に90cm突出する。燃焼部自体が壁外にあり、煙道部とは明確な段差をもって移行する。袖は検出されなかった。覆土は５層に分かれる。第Ⅱ～Ⅳ層が天井部崩落土に相当しよう。第Ⅴ層は灰層か。

ピットは３本検出されたが、主柱穴とはならないであろう。土壙は２基あり、ＳＫ01は南東コーナーに位置する。埋土にはロームブロックが多量に含まれ、掘り方と推定される。ＳＫ02埋土は焼土混じりの黒褐色土で、性格は不明。

出土遺物は比較的多く、土師器と須恵器がある。土師器は甕が13点、小形甕が４点、壺１点、須恵器は坏が37点、椀が３点、蓋が６点、と甕、鉢、高盤、長頸瓶が各１点出土した。第451図１～８は須恵器坏。底部調整は糸切りのままのもの(３)と周辺へラケズリを施すもの(１・２・４～８)があり、５は体部下端にもへラケズリが及ぶ。口径は12cm代で、体部が直線的、及至やや丸みをもって立上がる深身のものが中心となる。６には底部に「七」の墨書が残されていた。13は、底部に高台が付される。小形の長頸瓶とすべきか。15は片口鉢。類例は比較的少ない。土師器甕は口縁部が「コ」の字状を呈する(17)。25の勾玉は混入と考えられる。瑪瑙製で、頭部は片面から穿孔される。長さ3.5cm、厚さ1.1cm。須恵器坏類と土師器甕の様相から稲荷前XI期に比定される。

**Ｃ区第64号住居跡出土遺物観察表**(第451図)

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | 12.6 | 3.9 | 7.0 | ＡＢＣ | A | 灰 | 60% | No.194,225　覆土(0～＋20cm) |
| 2 | 坏 | 12.4 | 3.6 | 7.1 | ＡＢＣ | A | 灰 | 65% | 底部「－」のへラ記号 |
| 3 | 坏 | 12.8 | 4.3 | 6.8 | ＡＢＣ | A | 灰オリーブ | 90% | No.11　カマド内 |
| 4 | 坏 | (13.0) | 4.1 | (7.2) | ＡＢＣ | A | オリーブ灰 | 40% | No.118覆土(＋10cm) |
| 5 | 坏 | (12.4) | 3.6 | | ＡＢＣ | A | 灰 | 30% | No.92　覆土(＋30cm) |
| 6 | 坏 | | 1.7 | 6.8 | ＡＢＣ | B | 灰白 | 80% | No.211　床面 |
| 7 | 坏 | | 1.4 | 6.5 | ＡＢＣ | A | 灰 | 80% | No.233,267,275　覆土(＋2～6cm) |
| 8 | 坏 | | 1.8 | 7.2 | ＡＢＣ | A | 灰 | 90% | No.116　床面 |
| 9 | 高台坏 | | 1.3 | (8.6) | ＡＢＣ | A | 明緑灰 | 45% | No.251　覆土(＋7cm) |
| 10 | 椀 | (15.0) | 5.4 | (8.3) | ＡＢＣ | B | 灰白 | 15% | No.4　覆土(＋45cm) |
| 11 | 椀 | (18.0) | 5.4 | (9.0) | ＡＢＣ | A | 灰 | 15% | No.272,$P_4$　覆土(＋4cm) |
| 12 | 椀 | (15.0) | 5.4 | (8.3) | ＡＢＣ | A | 灰白 | 20% | SK01内覆土 |
| 13 | 小形壺 | | 6.6 | 5.8 | ＡＢＣ | A | 灰 | 65% | No.212　覆土(＋21cm) |
| 14 | 高盤 | (19.0) | 2.4 | | ＢＣ | A | 灰 | 15% | No.13　覆土(＋7cm) |
| 15 | 片口鉢 | 18.7 | 12.3 | | ＡＢＣ | B | 灰 | 50% | No.158,172他　覆土(0～＋36cm) |
| 16 | 甕 | | 15.8 | 15.6 | ＡＢ | A | 灰白 | 25% | No.289　覆土(＋9cm) |
| 17 | 甕 | (20.8) | 12.2 | | ＡＢＥＪ | A | 浅黄橙 | 40% | カマド内 |
| 18 | 壺 | (24.0) | 6.4 | | ＡＢＥＪ | A | 橙 | 15% | No.26　覆土(＋15cm) |
| 19 | 小形甕 | (14.0) | 4.7 | | ＡＢＥＪ | B | にぶい橙 | 15% | No.221,281　覆土(0～＋26cm) |
| 20 | 小形甕 | 10.4 | 3.7 | | ＡＢＥ | B | にぶい橙 | 50% | No.6　カマド内 |
| 21 | 甕 | | 4.7 | (4.3) | ＡＢＥ | A | 浅黄橙 | 15% | No.294　覆土(＋4cm) |
| 22 | 甕 | | 3.0 | (4.6) | ＡＢＣ | B | にぶい橙 | 35% | 覆土 |
| 23 | 壺 | | 2.6 | (6.6) | ＡＢＥ | A | にぶい橙 | 15% | カマド内 |
| 24 | 台付甕 | | 2.8 | 10.8 | ＡＢＥ | B | 浅黄橙 | 50% | No.62,121　覆土(＋20～22cm) |
| 25 | 勾玉 | | | | | | | | No.1　覆土(＋15cm)全長3.5,最大厚1.1cm |




第451図　C区第64号住居跡出土遺物

**C区第65号住居跡**（第453図）

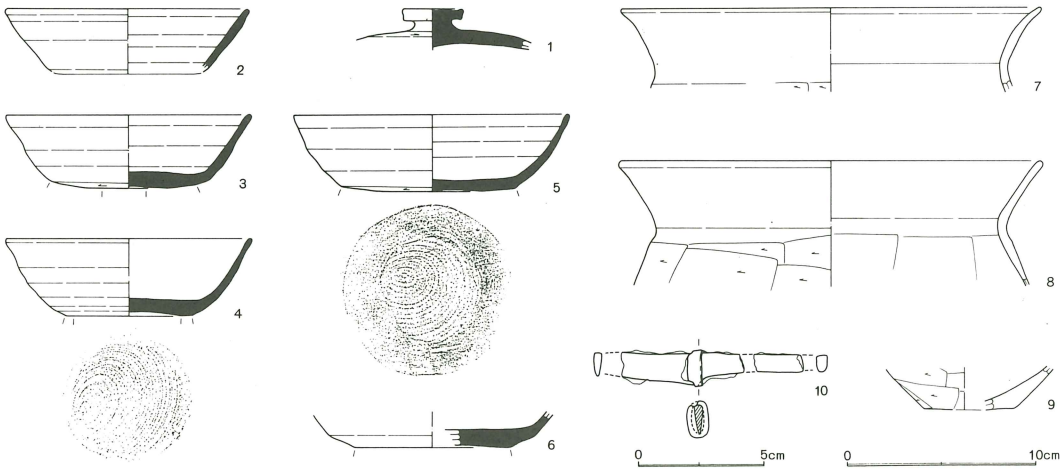
F・G-25区に位置する。第64号住居跡及び第66号住居跡と重複し、前者よりも古く、後者よりも新しい。形態は方形を呈し、規模は長軸4.58m、短軸4.18m、深さは5～10cm程と非常に浅い。主軸方位はN－7°－Wを示す。

床面は一定せず、全体に東側がやや深い傾向にある。覆土は3層に分かれ、焼土とローム混じりの暗褐色土を基調に構成されていた。

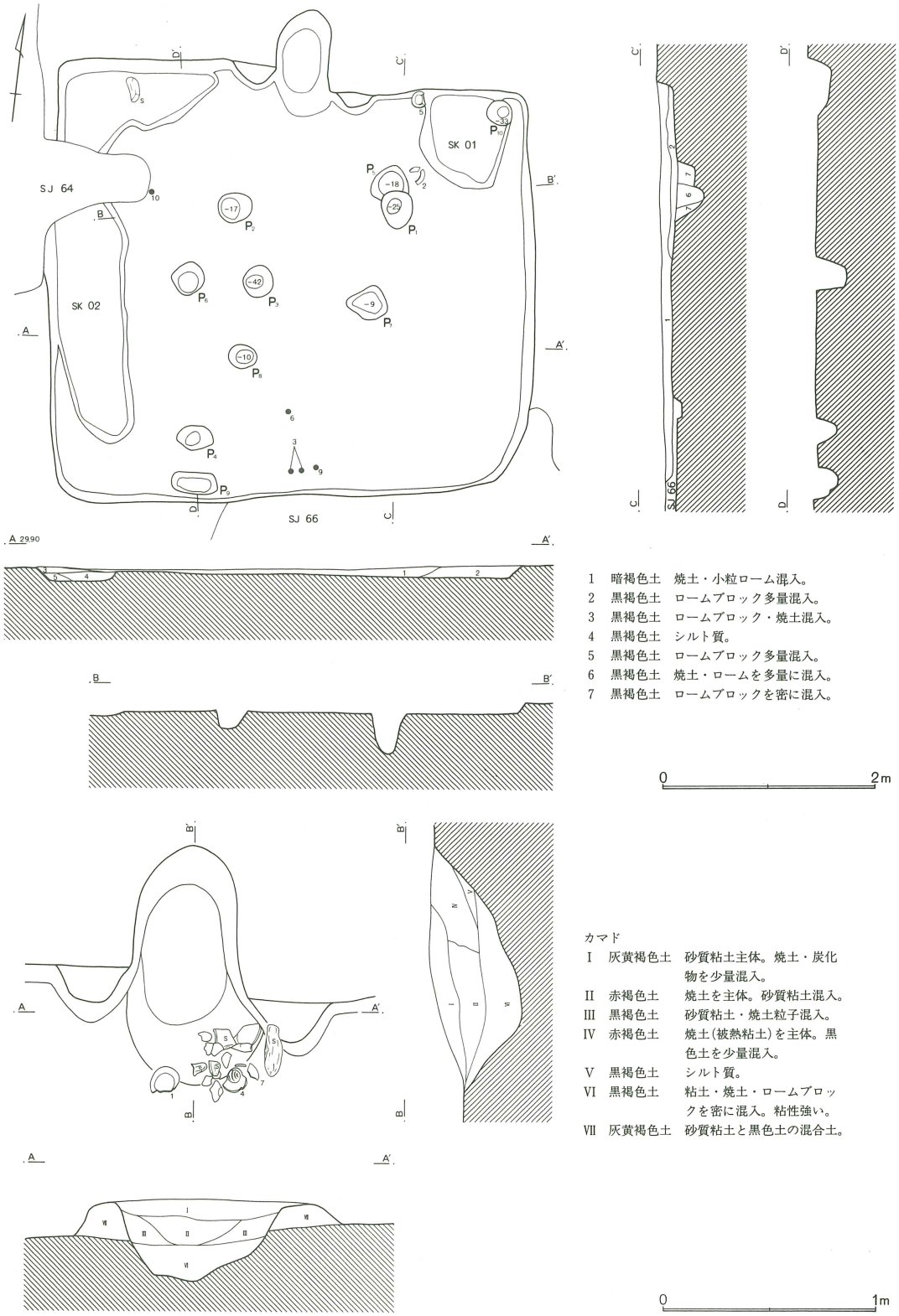
カマドは北壁中央に位置する。規模は長さ1.10m、燃焼部幅50cmを測り、底面は床面から25cm掘り凹められている。覆土は6層に分かれ、第Ⅰ～Ⅳ層は天井部及び袖の崩落土、第Ⅵ層は掘り方埋土と思われる。火床面は第Ⅵ層上面と推定される。袖は砂質粘土と黒色土が混在する土で構築されるが、壁内に長く延びるものではない。

ピットは10本検出された。主柱穴は明確にできないが、$P_3$・$P_6$が相当する可能性がある。土壙は2基あり、何れも掘り方と考えられる。

遺物は土師器と須恵器、鉄器が検出された。土師器は坏が3点、甕が17点あり、前者は混入である。須恵器は坏が22点、蓋が1点、甕胴部片が5点ある。第452図1は蓋。鈕は釘頭状を呈する。2～6は坏で、底部は回転糸切り後ヘラケズリ調整されている。2～4は口径12.8cm、5は口径14.5cmを測り一回り大きい。土師器甕は口縁部が「く」の字に折れるもの（8）と弓状に外反するもの（7）がある。10は刀子で関部に鏃が遺存する。出土土器にはやや時期差が認められ、須恵器坏では5が古くⅦ期、2～4が新しくⅧ期新段階～Ⅸ期前半頃となろう。カマド前面から出土した土器を含む後者で代表させておきたい。




**第452図　C区第65号住居跡出土遺物**

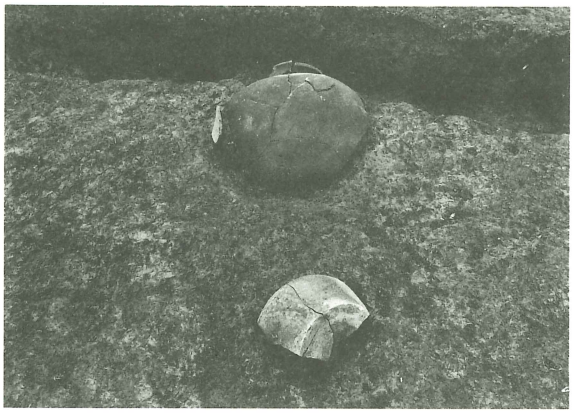



**第453図　C区第65号住居跡・カマド**

**C区第65号住居跡出土遺物観察表**(第452図)

| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器高 | 底　径 | 胎　　土 | 焼成 | 色　調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 蓋 | | 2.1 | | ＡＢＣ | Ａ | 灰 | 70% | No.122,カマド内　鈕径3.0cm |
| 2 | 坏 | 12.7 | 3.3 | | ＡＢＣ | Ａ | 灰白 | 70% | No.99　覆土(＋8cm) |
| 3 | 坏 | (12.8) | 3.8 | 8.2 | ＡＢＣ | Ａ | ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 25% | No.70,71　床面 |
| 4 | 坏 | 12.8 | 4.1 | 6.6 | ＡＢＣ | Ａ | 灰 | 60% | No.115,116　覆土 |
| 5 | 坏 | 14.5 | 4.0 | 9.2 | ＡＢＣ | Ａ | 灰黄 | 80% | No.98　覆土(＋4cm) |
| 6 | 椀 | | 1.9 | (8.2) | ＡＢＣ | Ａ | 青灰 | 25% | No.75　床面 |
| 7 | 甕 | (22.0) | 4.4 | | ＡＢＥ | Ａ | にぶい黄橙 | 10% | No.117カマド内 |
| 8 | 甕 | (22.0) | 6.5 | | ＡＢＥＪ | Ａ | にぶい橙 | 25% | カマド内一括 |
| 9 | 甕 | | 2.3 | (5.2) | ＡＢＥ | Ａ | 灰褐 | 25% | No.69　床面 |
| 10 | 刀　子 | | | | | | | | No.101　床面　残長7.2cm |

**C区第66号住居跡**(第454図)



Ｆ・Ｇ-25区に位置する。新旧関係は第67号住居跡を切り、第65・75号住居跡に切られていた。形態は方形を呈し、規模は長軸4.74ｍ、短軸4.66ｍ、深さ10～15cmを測る。主軸方位はＮ－８°－Ｅを示す。

床面は概ね平坦であるが、南東部が僅かに深い傾向にある。覆土は基本的に上下２層に分かれ、黒褐色土を基調に構成されていた。

カマドは北壁に設置されているが、第65号住居跡に一部破壊されるなど遺存状態はあまり良くない。規模は長さ1.20ｍ、最大幅1.10ｍを測り、壁外に50cm程突出している。壁内の袖は崩壊しておりその痕跡を留めていなかった。覆土は４層に分かれ、第Ⅰ・Ⅲ層が天井部崩落土、第Ⅱ層が灰層に相当するものと推定される。

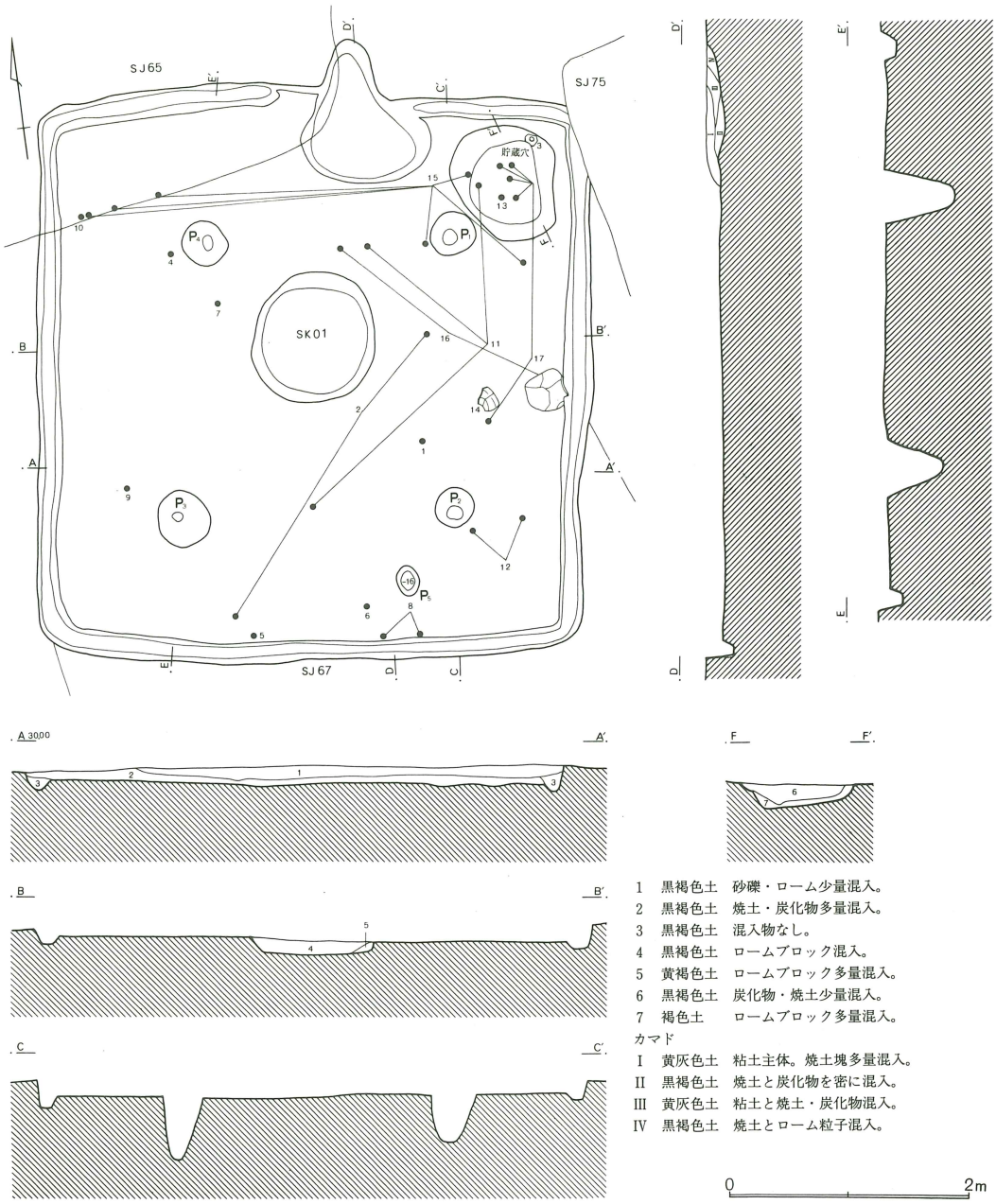
貯蔵穴はカマド脇の北東コーナーに設置されている。直径約90cmの不整円形プランを呈し、深さは20cmを測る。そのほか、住居中央部から土壙が１基検出された(ＳＫ01)。上面は貼床され、埋土はロームブロックと黒色土の混土層で構成されている。いわゆる床下土壙と推定される。

ピットは５本検出された。$P_1$～$P_4$は深さ40～60cmと非常に深く、配置も規則的であることから住居の主柱穴と考えられる。

壁溝は深さ10cm前後でカマドを除き全周する。

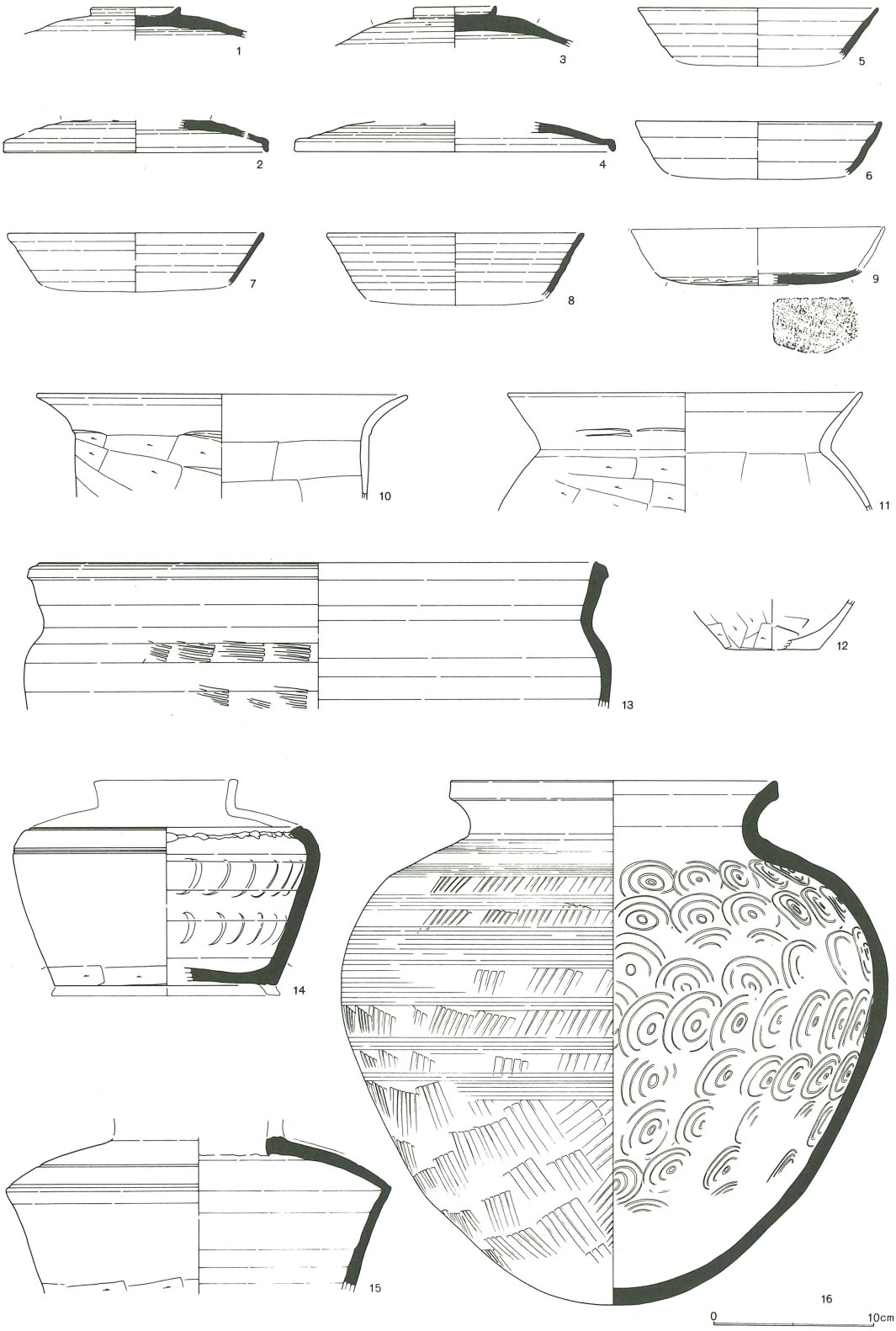
出土遺物は土師器と須恵器がある。土師器は坏が口縁部破片数で４点、甕７点、壺１点、須恵器は坏が13点、椀１点、蓋３点、甕１点、短頸壺(胴部)１点、広口壺(胴部)１点、鉢２点が検出された。土師器坏は比企型坏の細片で混入かもしれない。

第455図１～４は須恵器蓋。何れも天井部が低く、１・３は環状鈕が付される。５～９は坏。器形の判明する資料はないが、大形品で占められ、９の底部は手持ちヘラケズリが施されている。13は鉢。14は本来短頸壺と思われるが、おそらく焼成段階で口縁部が内部に落ち込んだ失敗品である。

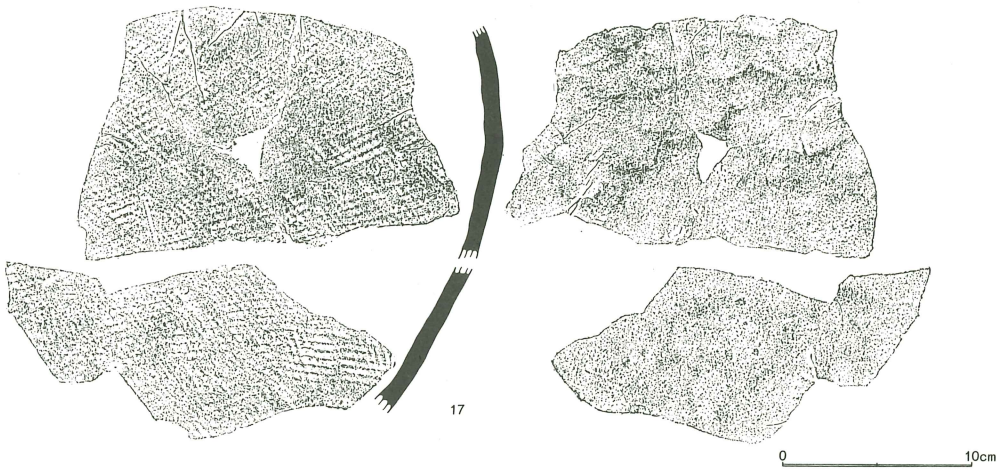



**第454図　C区第66号住居跡**

端部内面に二次的な打ち欠き痕が認められ、鉢として再利用されたものと考えられる。現状の口縁直下と肩部には沈線が巡り、底部には高台の外れた痕跡が残る。15は広口壺か。肩部の屈曲が鋭角的で、外面には沈線が2段巡っている。16は丸底甕。焼成が甘く全体に風化している。胴部外面は平行叩き後、中位以上にカキ目、内面は同心円状の当具痕が残る。底部は磨滅しており調整痕は不明瞭。形態及び技法に古墳時代的な様相が色濃く残るものである。土器様相から8世紀前半、稲荷前Ⅵ期が主体となろう。




第455図　C区第66号住居跡出土遺物(1)




**第456図　C区第66号住居跡出土遺物(2)**

**C区第66号住居跡出土遺物観察表**(第455・456図)

| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器高 | 底　径 | 胎　　土 | 焼成 | 色　調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 蓋 | | 1.9 | | ABC | A | 灰 | 30% | No.87　覆土(+5cm) |
| 2 | 蓋 | (16.4) | 2.0 | | ABC | B | 灰白 | 15% | No.82,136　覆土(+1～6cm) |
| 3 | 蓋 | | 2.6 | | ABC | B | 灰白 | 45% | No.181　覆土(+8cm) |
| 4 | 蓋 | (20.0) | 1.9 | | ABC | A | 緑灰 | 15% | No.3　覆土(+8cm) |
| 5 | 坏 | (15.0) | 3.2 | | ABC | B | 灰 | 20% | No.134　覆土(+5cm) |
| 6 | 坏 | (15.3) | 3.3 | | ABC | A | 灰 | 10% | No.144　覆土(+15cm) |
| 7 | 坏 | (16.0) | 3.2 | | BC | A | 青灰 | 20% | No.7　覆土(+5cm) |
| 8 | 坏 | (16.0) | 4.1 | | BC | B | 灰白 | 35% | No.147,149　床面 |
| 9 | 坏 | | 0.9 | (11.3) | ABC | B | 灰白 | 10% | No.10　床面　底部手持ちヘラケズリ |
| 10 | 甕 | (23.0) | 6.5 | | ABE | A | にぶい橙 | 20% | No.166　覆土(+8cm) |
| 11 | 甕 | (22.0) | 7.3 | | ABE | A | にぶい橙 | 40% | No.38　覆土(+2～5cm)　179Pit内(-17cm) |
| 12 | 甕 | | 3.2 | 5.9 | ABEJ | A | にぶい褐 | 55% | No.93,156　覆土(+4～5cm) |
| 13 | 鉢 | (35.0) | 9.1 | | AB | B | 灰白 | 15% | No.106　貯穴内(-16cm) |
| 14 | 鉢 | (17.0) | 9.8 | (14.0) | AB | A | 灰白 | 35% | No.183　覆土(+5cm) |
| 15 | 壺 | | 9.7 | | ABC | A | 灰 | 15% | No.76,79他　覆土(0～+11cm) |
| 16 | 甕 | (20.3) | 32.6 | | ABCJ | D | 褐灰 | 50% | No.33,184　覆土(0～+8cm) |
| 17 | 甕 | | | | ABC | A | 暗灰 | | No.101,104他　貯穴内(-17～19cm) |

**C区第67号住居跡**(第457図)

G-25・26区に位置する。第66・68号住居跡と重複し、前者よりも古いことは確実である。後者との切り合い関係は明確ではないが、本住居の方が新しいものと判断された。また、南西コーナーは第6号溝跡に破壊されていた。形態は方形を呈し、規模は長軸5.20m、短軸5.10m、深さ20cmを測る。主軸方位はN－78°－Eを示す。

床面は若干高低差をもち一定しない。覆土は6層に分かれる。第1層にはロームブロックが多量に含まれ人為的な埋め戻しかもしれない。第4・5層は壁体の崩壊土と思われる。

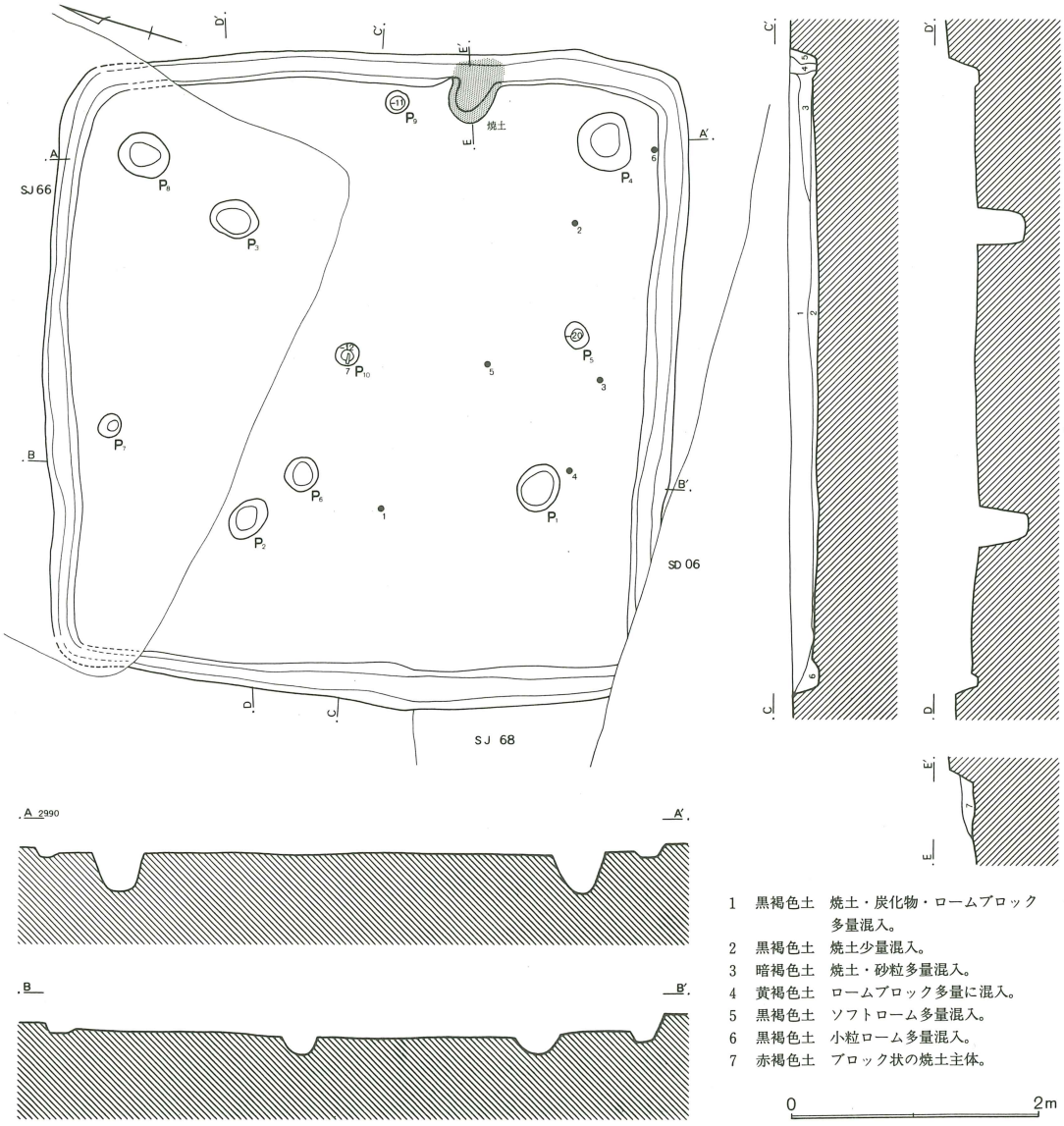
カマドは明確に検出されなかった。東壁の中央から南に寄った位置の壁際にブロック状の焼土が堆積した浅い掘り込みが検出され、おそらくこの部分にカマドが設置されたものと推定される。壁

外の掘り込みは認められなかった。

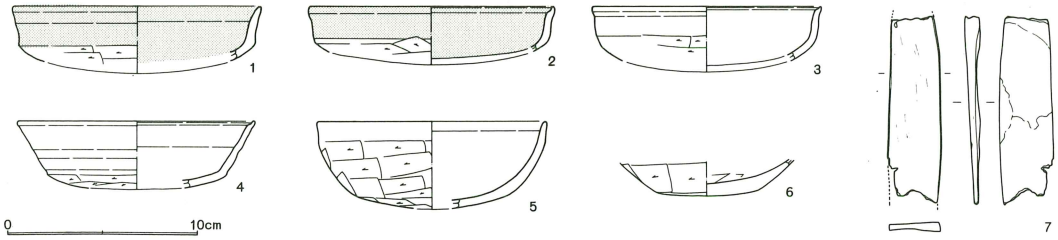
ピットは10本検出され、$P_2$・$P_3$が主柱穴となる可能性が高いが、4本主柱穴配置とすると対応する2本の柱穴は確認されなかった。

壁溝は深さ5cmで残存部は全周する。

出土遺物は土師器と砥石がある。土師器は坏が8点、椀が2点、甕が7点、台付甕が2点、鉢が3点検出された。坏は比企型坏が4点、模倣坏系比企型坏が1点、模倣坏1点、有段口縁坏2点に分かれる。第458図1・2は比企型坏、3は模倣坏か。4は有段口縁坏である。7は砥石で、極めて薄い。残長9.8cm、重量10g。土器は全て破片で良好な資料に乏しいが、土師器坏の様相から稲荷前II期を中心とした時期と思われる。




**第457図　C区第67号住居跡**




**第458図　C区第67号住居跡出土遺物**

**C区第67号住居跡出土遺物観察表**(第458図)

| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器高 | 底　径 | 胎　土 | 焼成 | 色　調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | (12.0) | 2.9 | | ABC | A | にぶい橙 | 10% | No.24　覆土(+10cm)　赤彩 |
| 2 | 坏 | (12.8) | 2.4 | | ABC | A | にぶい橙 | 10% | No.90　覆土(+9cm)　赤彩 |
| 3 | 坏 | (13.0) | 2.9 | | ABC | A | にぶい橙 | 10% | No.101　床面　無彩 |
| 4 | 坏 | (12.4) | 3.5 | | ABE | B | 橙 | 15% | No.121　覆土(+7cm)　全体に風化 |
| 5 | 坏 | (12.0) | 4.6 | | ABE | B | 橙 | 25% | No.50　覆土(+8cm) |
| 6 | 壺 | | 1.8 | 5.5 | ABEJ | A | 灰黄褐 | 5% | No.117　覆土(+5cm) |
| 7 | 砥　石 | | | | | | | | No.123　床面　残長9.8cm　重量10g |

**C区第68号住居跡**(第459・460図)

G・H-25区に位置する。第67号住居跡に北東コーナー上面を切られ、第6・16号溝跡に住居を寸断されていたほか、ピット群の攪乱を受け遺存状態は極めて悪い。形態は方形を呈し、規模は長軸6.54m、短軸5.90mと比較的大形の部類に属する。深さは10～20cmを測る。西カマドをもつ住居跡で主軸方位はS－78°－Wを示す。

床面は概ね平坦である。覆土は4層に分かれる。ロームブロックを多量に含む黒褐色土を基調としており、人為的な埋め戻しの可能性もある。

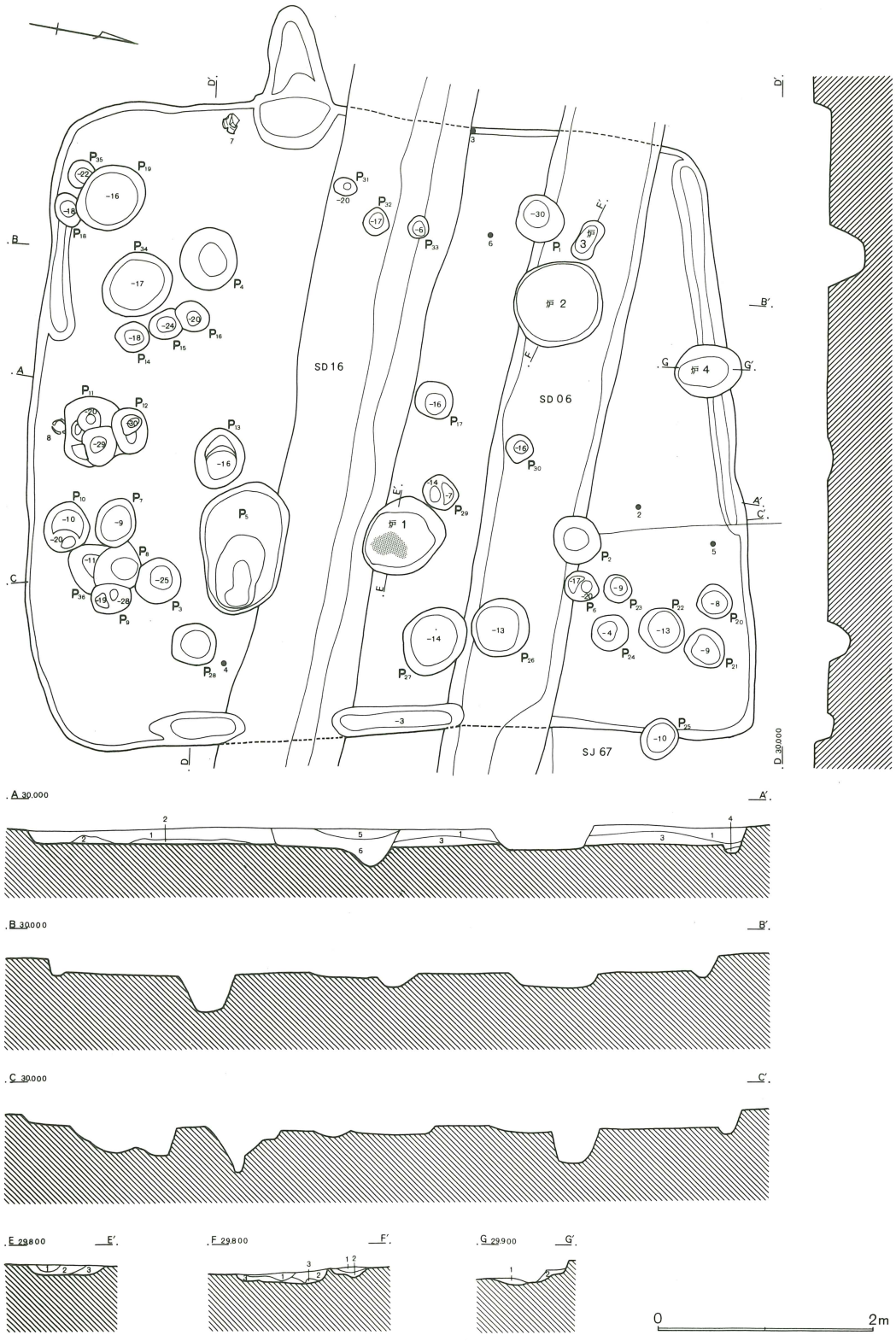
カマドは西壁に位置する。規模は全長1.30m、幅75cmを測り、燃焼部はほぼ壁内にあり、床面から10cm掘り凹められている。煙道部はフラットで壁外に約80cm延びる。袖部は検出されなかった。覆土は7層に分かれるが、全て天井部崩落土と思われ、明確な灰層は認められない。

住居内には炉跡状の浅い土壙が4基検出された。何れも住居北半にあり、第2・3号炉は第6号溝下面から検出された。第4号炉は壁に掛かって設置され、炉というよりもカマドの痕跡である可能性も否定できない。1～3号炉については上面に焼土層が形成され堆積状況も近似しているが、性格は明らかにできなかった。

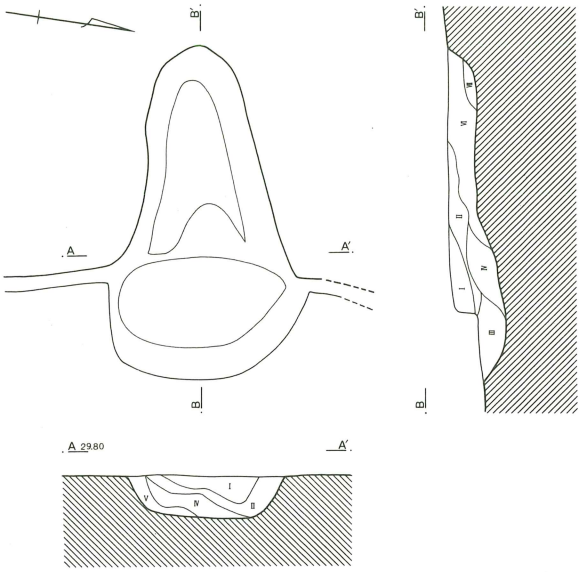
ピットは30本余り検出されている。埋土の状況から大半は中世以降の所産と推定される。$P_1$～$P_4$については比較的規則的に配置され、住居に伴う主柱穴と考えられる。

壁溝は深さ5cm程と浅く、部分的に検出された。

出土遺物は土師器と須恵器がある。土師器は坏が38点、椀2点、皿2点、甕9点、壺1点、鉢1点が検出され(口縁部破片数)、坏の構成比が高い。坏の内訳は比企型坏が24点、模倣坏系比企型坏が11点、模倣坏が1点、比企型坏か模倣坏系のそれか不明のものが2点となる。須恵器は坏が3点と甕が5点出土したが何れも混入である。




第459図　C区第68号住居跡



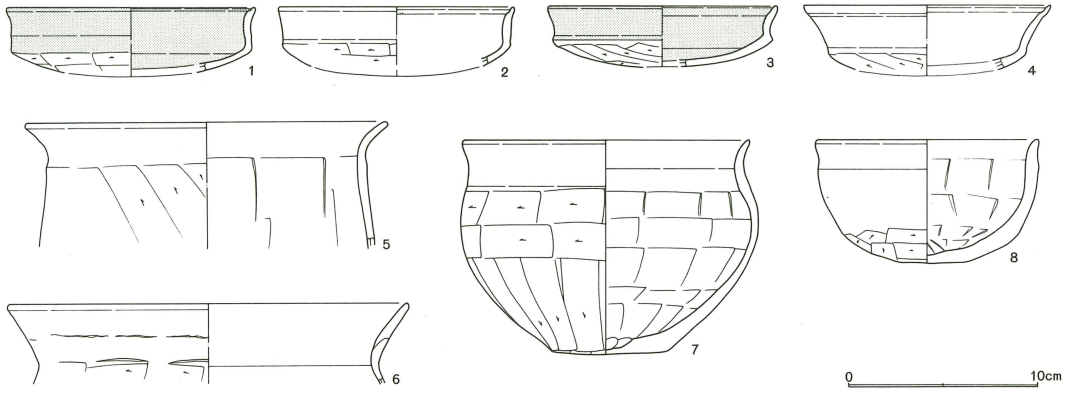

1　黒褐色土　ロームブロック多量混入。
2　黒褐色土　ロームブロック・焼土を少量混入。
3　黒褐色土　焼土・ロームブロックを密に混入。
4　褐色土　　ローム粒子混入。
5　黒褐色土　小粒ローム・砂礫少量混入。(SD16)
6　黒褐色土　砂礫多量混入。(SD16)

炉跡
1　焼土
2　暗褐色土　焼土粒子混入。
3　黒褐色土　砂質。ローム粒子混入

カマド
I　黒褐色土　砂質。焼土多量混入。
II　焼土　　被熱粘土。ブロック状を為す。
III　黒褐色土　シルト質。焼土少量混入。
IV　焼土と黒褐色シルトの混在土。
V　灰褐色土　砂質粘土主体。
VI　暗褐色土　砂質。焼土多量混入。
VII　灰褐色土　砂質粘土主体。

0　1m

**第460図　C区第68号住居跡カマド**




**第461図　C区第68号住居跡出土遺物**

第461図1～4は比企型坏。後2者は模倣坏系である。4は皿とした方がよいかもしれない。6の甕は混入と目される。7は鉢である。火にかけて使用されたものと思われ、外面は強く二次被熱を受けている。土師器坏類から見る限り、稲荷前II期頃の土器様相と推定される。

**C区第68号住居跡出土遺物観察表**(第461図)

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | (13.0) | 3.4 | | ABC | A | にぶい橙 | 40% | 覆土　赤彩 |
| 2 | 坏 | (12.4) | 3.1 | | AB | B | 灰褐 | 10% | No.61　覆土(+17cm)　無彩 |
| 3 | 坏 | (12.0) | 3.2 | | ABC | A | 橙 | 20% | No.7　覆土(+8cm)　赤彩 |
| 4 | 皿 | (13.0) | 3.4 | | ABC | B | にぶい橙 | 15% | No.164　覆土(+8cm) |
| 5 | 甕 | (19.0) | 6.6 | | ABC | C | にぶい橙 | 10% | No.50　覆土(+12cm)　やや風化 |
| 6 | 甕 | (21.0) | 3.2 | | ABE | A | にぶい黄橙 | 20% | No.11　床面　混入か |
| 7 | 鉢 | 15.0 | 11.2 | 6.1 | ABC | A | にぶい橙 | 70% | No.100　床面　外面二次被熱 |
| 8 | 鉢 | 11.6 | 6.5 | | ABC | B | 橙 | 80% | No.188　床面 |

**C区第69号住居跡**(第462図)

G・H-25・26区に位置する。第70号住居跡、第5号井戸跡及び第16号溝跡の攪乱を受け、遺存状態は良くない。また、西壁部上面には第87号住居跡カマドが乗っていた。形態は方形を呈するものと推定され、残存規模は長軸3.74m、短軸3.00m、深さ15～20cmを測る。主軸方位はN－15°－Eを示す。

床面は概ね平坦である。覆土は焼土・ロームを多量に含む黒褐色土で構成されていた。

カマドは検出されなかった。ピットは4本検出されたが、その全てが住居に伴う主柱穴とはならないであろう。壁溝は深さ5～10cm程で、北壁中央部を除き巡っていた。

出土遺物は極めて少なく土師器坏小片が2点と甕胴部片が検出されたのみで時期は確定できない。重複する第70号住居跡との切り合い関係から稲荷前II期またはそれ以前となる。古墳時代前期の住居跡ではないかという疑いもあるが、特定するだけの根拠は得られなかった。

**C区第70号住居跡**(第462図)

G・H-25・26区に位置する。第69号住居跡を切り、北壁上面には第87号住居跡カマドが掘り込まれていた。形態は縦に非常に長い長方形を呈し、規模は長軸6.14m、短軸3.66m、深さ25～30cmを測る。主軸方位はN－62°－Eを示す。

床面は概ね平坦であるが、中央に向かって僅かに深くなっている。覆土は暗褐色土を基調とし、ロームと焼土の混入が目立った。

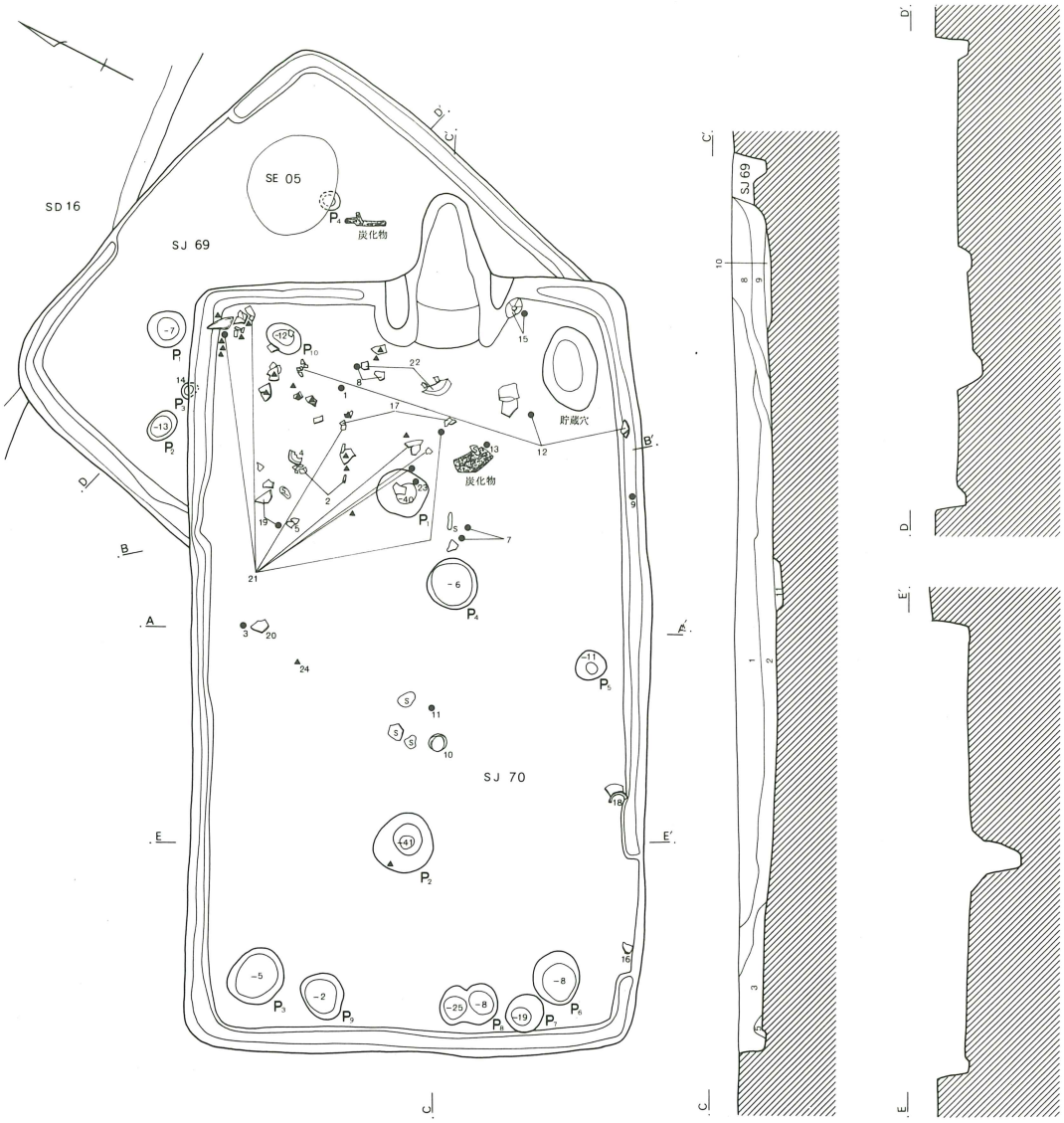
カマドは東壁に位置する。規模は長さ1.20m、幅65cmで、壁外に60cm延びている。底面はフラットで床面との段差は少ない。袖は灰褐色粘土を主に構築されていた。

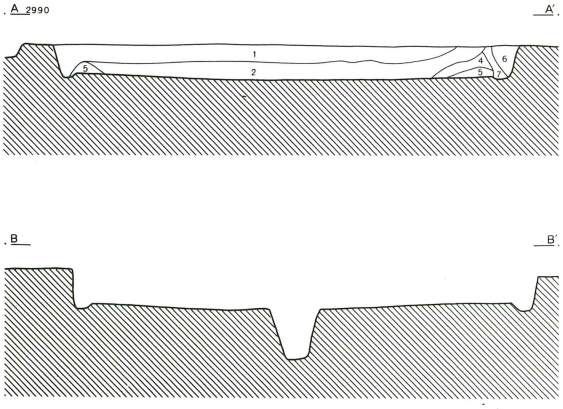
貯蔵穴はカマド脇の南東コーナーに設置されている。形態は楕円形で、規模は長径62cm、短径45cm、深さは13cmを測る。

ピットは10本検出され、$P_1$と$P_2$の2本によって主柱穴が構成されるものと考えられる。$P_4$は柱穴とはならない。その他のピットは後世の所産と推定される。

壁溝は深さ5cm程で、南壁部で一部途切れる他は全周する。

出土遺物は多く、住居東半のカマド前面付近に集中する傾向にある。土師器と須恵器が検出され、土師器は坏が26点、甕が5点、壺が2点、小形甕・鉢・高坏が各1点出土した(口縁部破片数)。土師

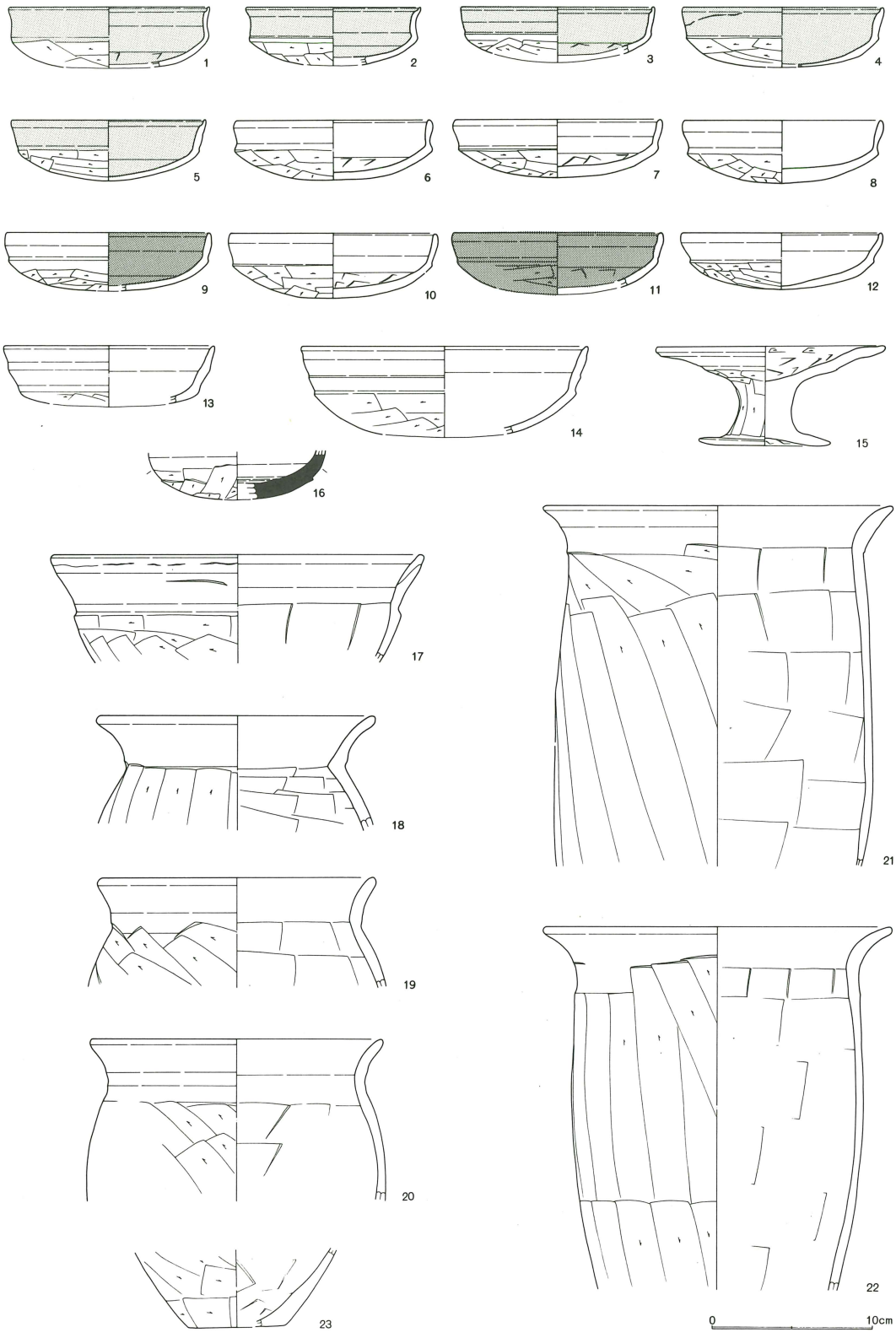



1　暗褐色土　ローム・焼土混入。砂質。
2　暗褐色土　ローム・焼土・炭化物多量混入。
3　暗褐色土　炭化物・焼土多量混入。
4　暗褐色土　焼土粒子多量混入。
5　暗褐色土　ロームブロック主体。
6　黄褐色土　ロームを多量混入。
7　褐色土　ローム小ブロック少量混入。
8　灰褐色土　砂質粘土主体。焼土混入。
9　赤褐色土　焼土主体。砂質粘土混入。
10　黒褐色土　焼土・炭化物混入。
11　黄褐色土　ロームブロック多量混入。

0　2m

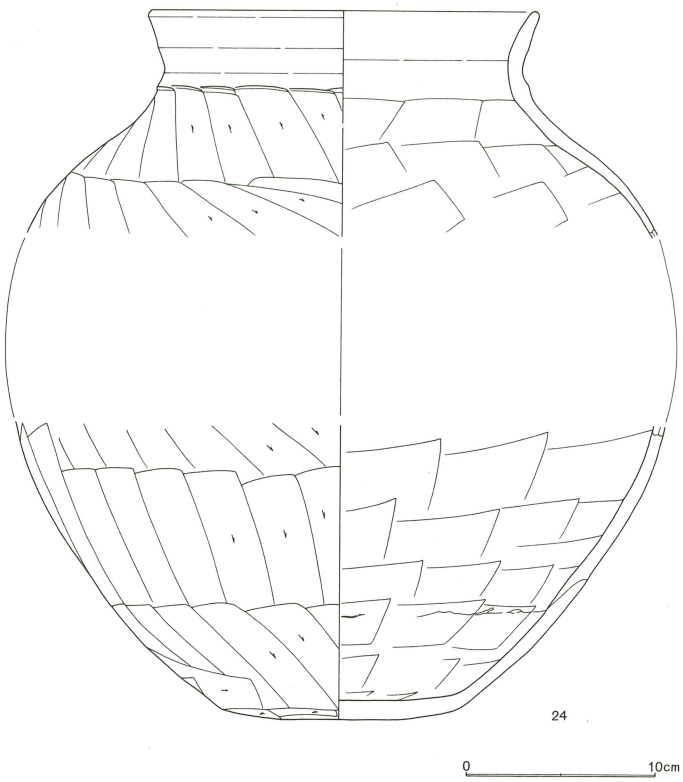
**第462図　C区第69・70号住居跡**




第463図　C区第70号住居跡出土遺物（1）

器坏は比企型坏が９点、模倣坏系比企型坏が６点、模倣坏が９点、有段口縁坏が２点という比率を示し、模倣坏の構成比が高い点は本遺跡の中でも異質である。須恵器は６点出土したが、５点は８世紀代の混入資料である。

第463図１・２は比企型坏、３～５は模倣坏系の比企型坏である。口径は２が最小で10.7cm、他は12cm代である。６～12は須恵器坏蓋模倣の坏か。全体に器肉が厚くぼってりした作りで、明らかに黒色処理されたものが認められる（９・11）。口縁部は直立するもの（６）と外傾するもの（７～12）に分かれるが、何れも端部は内湾気味におさめている。




**第464図　Ｃ区第70号住居跡出土遺物（２）**

13・14は有段口縁坏と思われ、後者は推定口径17.8cmと非常に大形である。16は須恵器壺類の底部で、粗い手持ちヘラケズリが施されている。焼成は良好で産地は不明。17は鉢か。外面は二次被熱して器壁は脆弱。18～23は甕。頸部が強く縊れ、胴部が膨らむであろう18・19は古い様相が窺われ、混入と見た方が良いかもしれない。24（第464図）は壺で胴部を欠く。土器様相から稲荷前Ⅱ期に比定しておきたい。

**Ｃ区第70号住居跡出土遺物観察表**（第463・464図）

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | (12.4) | 3.7 | | ＡＢＣ | Ａ | 浅黄橙 | 15% | No.200　覆土（＋10cm）　赤彩 |
| 2 | 坏 | (10.7) | 3.6 | | ＡＢＣ | Ａ | にぶい橙 | 45% | No.176,184　床面　赤彩 |
| 3 | 坏 | (12.0) | 2.9 | | ＡＢＣ | Ａ | 灰褐 | 15% | No.42　覆土（＋17cm）　赤彩 |
| 4 | 坏 | 12.5 | 3.7 | | ＡＢＣ | Ｂ | 橙 | 40% | No.175　覆土（＋5cm）　赤彩 |
| 5 | 坏 | (12.0) | 3.8 | | ＡＢＣ | Ａ | にぶい橙 | 25% | No.170　覆土（＋8cm）　赤彩 |
| 6 | 坏 | 12.0 | 3.7 | | ＡＢＣ | Ｂ | にぶい赤褐 | 45% | 覆土 |
| 7 | 坏 | 12.8 | 3.6 | | ＡＢＣ | Ｂ | 橙 | 75% | No.100,102,195　床面 |
| 8 | 坏 | 12.2 | 3.9 | | ＡＢＣ | Ｂ | にぶい橙 | 70% | No.201,203　覆土（＋7～20cm） |
| 9 | 坏 | 12.6 | 3.6 | | ＡＢＣ | Ａ | にぶい橙 | 25% | No.129　覆土（＋8cm）　内面黒色処理 |
| 10 | 坏 | 12.8 | 4.0 | | ＡＢＣ | Ｂ | 橙 | 10% | No.188　床面 |
| 11 | 坏 | (13.0) | 3.4 | | ＢＣ | Ｂ | 黒褐 | 10% | No.70　覆土床面　黒色処理 |
| 12 | 坏 | (12.4) | 3.5 | | ＡＢＣ | Ｂ | 橙 | 80% | No.192,211　覆土（0～＋20cm） |
| 13 | 坏 | (13.0) | 3.6 | | ＡＢＣ | Ｂ | 灰褐 | 5% | No.128　覆土（＋19cm）　風化 |

| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器高 | 底　径 | 胎　　土 | 焼成 | 色　調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 14 | 大形坏 | (17.8) | 5.4 | | ＡＢＣ | Ａ | 橙 | 15% | 覆土 |
| 15 | 高　坏 | 14.1 | 6.2 | 8.2 | ＡＢＣ | Ａ | にぶい黄橙 | 85% | No.137,212　床面　器形歪む |
| 16 | 小形壺 | | 3.0 | | ＡＢ | Ａ | 暗青灰 | 40% | No.213　覆土(＋16cm) |
| 17 | 鉢 | (18.0) | 10.0 | | ＡＢＣ | Ａ | 浅黄橙 | 25% | No.182,206　覆土(＋15～18cm) |
| 18 | 甕 | (17.0) | 7.1 | | ＡＢＣ | Ａ | にぶい黄 | 25% | No.214　覆土(＋8cm) |
| 19 | 甕 | (17.9) | 6.8 | | ＡＢＣ | Ａ | 浅黄 | 25% | No.47,171　覆土(＋12～14cm) |
| 20 | 甕 | (18.0) | 10.0 | | ＡＢＣ | Ａ | 浅黄橙 | 15% | No.169　覆土(＋16cm) |
| 21 | 甕 | 21.4 | 22.4 | | ＡＢＣＪ | Ｂ | にぶい黄橙 | 60% | No.84,127他　覆土(＋4～21cm) |
| 22 | 甕 | (21.4) | 22.5 | | ＡＢＣ | Ｂ | 浅黄 | 35% | No.201,209　覆土(＋1～7cm) |
| 23 | 甕 | | 4.8 | 6.0 | ＡＢＣ | Ａ | 浅黄橙 | 25% | No.91　覆土(＋8cm) |
| 24 | 壺 | (20.0) | 37.0 | | ＡＢＣ | Ａ | 浅黄橙 | 40% | No.77,178他　覆土(0～＋25cm) |

**Ｃ区第71号住居跡**(第465・466図)

調査区北東寄りのＥ-26・27区に位置し、第９・10号方形周溝墓の周溝を切って構築されていた。また、住居内には第７号掘立柱建物跡が重複し、出土遺物から住居の方が古いものと推定される。形態は方形を呈し、規模は長軸6.08ｍ、短軸6.06ｍ、深さ30cmと比較的大形である。主軸方位はＮ－59°－Ｅを示す。

床面は概ね平坦で全体的に堅く締まっていた。覆土はロームを極めて多量に含む黒褐色土を基調としていた。

カマドは東壁の中央に位置する。先端は第10号方形周溝墓周溝上に掛かる。覆土は７層に分かれ、第Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ～Ⅵ層が天井部崩落土に相当しよう。Ⅲ層は流入土か。袖は灰褐色粘土を主体に構築されていたが、遺存状態はあまり良くない。

貯蔵穴は南東コーナーに設置されている。楕円形プランを呈し、規模は長径100cm、短径60cm、深さ15cmを測る。埋土には焼土と炭化物が多量に含まれていた。

ピットは６本検出され、$P_1$～$P_4$が４本主柱穴に相当するものと考えられる。$P_5$の帰属は不明である。

壁溝は深さ平均10cm程度でカマドを除き全周する。

出土遺物は住居北西部から比較的まとまって検出されたが、そのほとんどは床面よりも数cm浮いた状態で、埋没過程で流入、或いは投棄されたものと推定される。

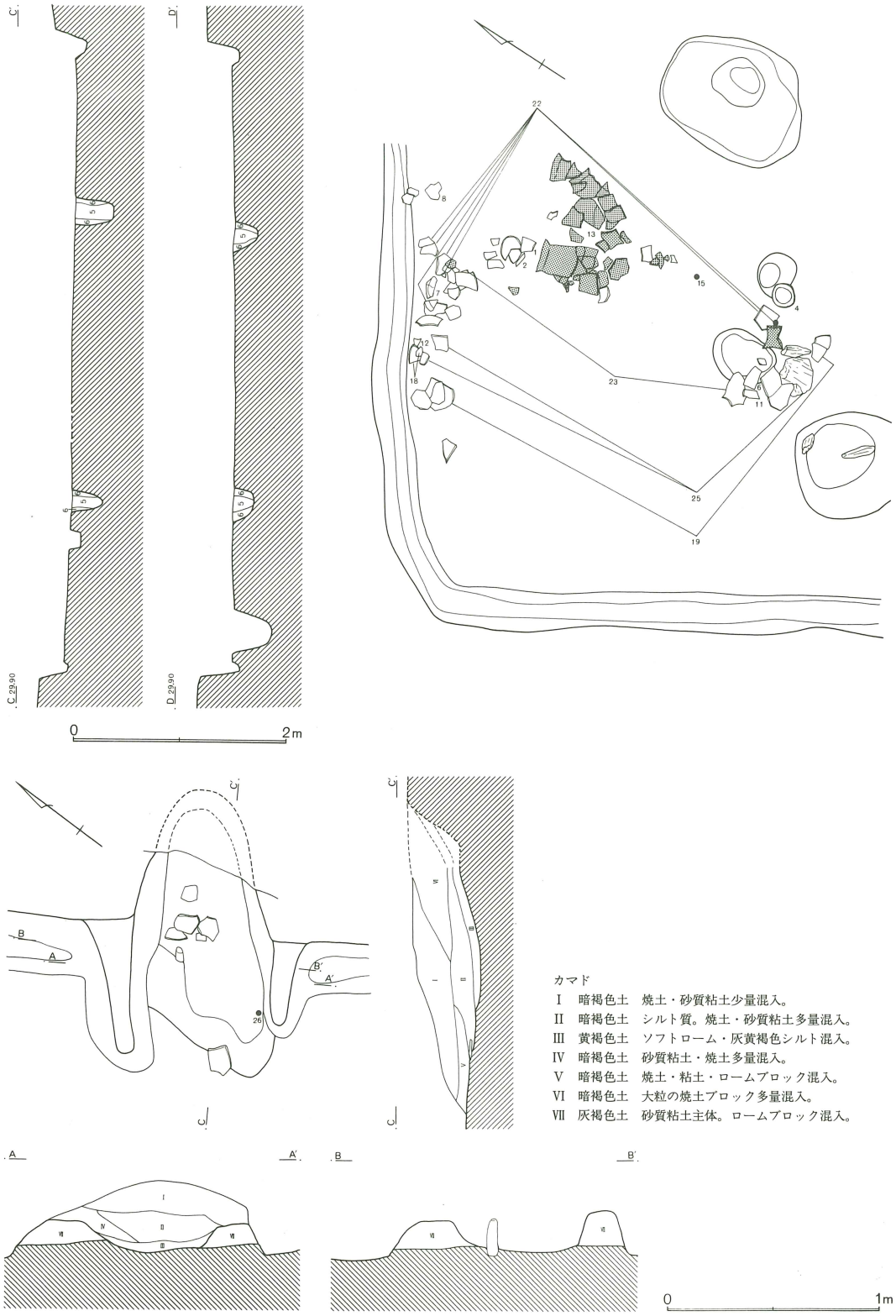
出土遺物には土師器と須恵器がある。土師器は坏が29点、甕が12点、小形甕が２点、甑が１点、壺が４点出土した(口縁部破片数)。須恵器は甕が口縁部片１点と胴部片１点、コップ形土器が１点出土したが、後者は明らかな混入である。土師器坏の中では、模倣坏系の比企型坏が13点、口縁下に腰をもつ、一応比企型坏の系譜下にあると思われるもの10点、有段口縁坏２点、模倣坏１点、その他及び不明３点という割合を示す。

1　黒褐色土　ソフトローム多量混入。シルト質。
2　黒褐色土　ローム小ブロックを多量に密に混入。
3　黒褐色土　ソフトロームを多量に混入。
4　黒褐色土　ソフトローム・ロームブロック多量混入。
5　黒褐色土　ローム少量混入。(柱痕)
6　黄褐色土　ソフトローム多量に混入。(掘方埋土)
7　黒褐色土　焼土粒子を密に多量に混入。
8　黒褐色土　焼土粒子と炭化物粒子を多量に混入。

0　2m

**第465図　C区第71号住居跡(1)**

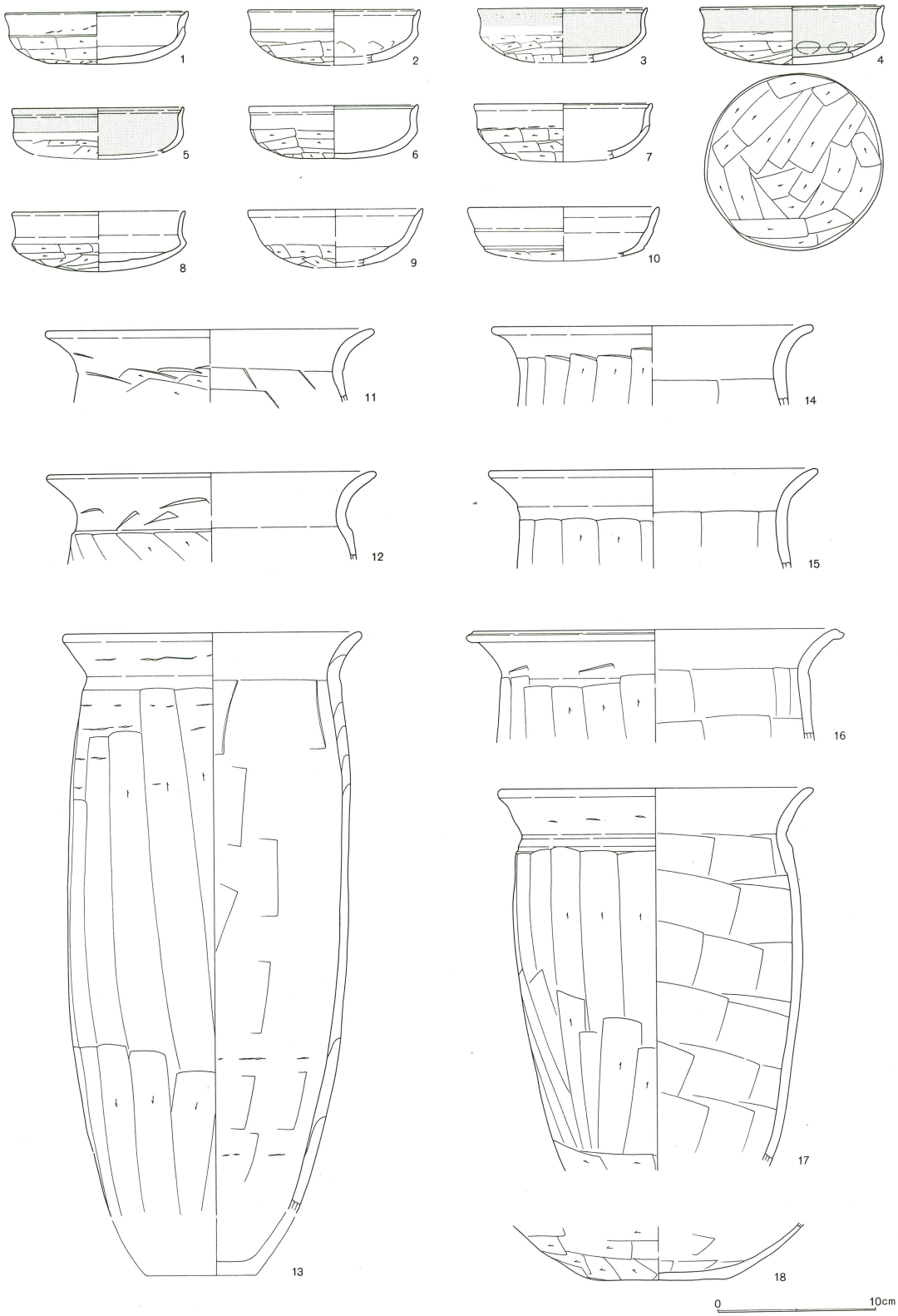
第467図1～10は土師器坏で、口径は10～11cm代の小振りの製品が主体となる。4は比企型坏本来の形状を保っている。10は有段口縁坏である。11～17は甕。13を見ると高さ40cm程の長胴の器形となろう。第468図23は須恵器甕。在地産で焼成は非常に甘い。25は須恵器甕胴部片で、破損面にも自然釉が付着していることから、窯体の焼台として使用されたものが何らかの理由でもたらされたものと推定される。26は滑石製の臼玉。直径1.2cm、厚さ0.7cmで覆土から出土した。出土土器は稲荷前III期のものを含むが、主体はIV期に位置付けられるものと考える。



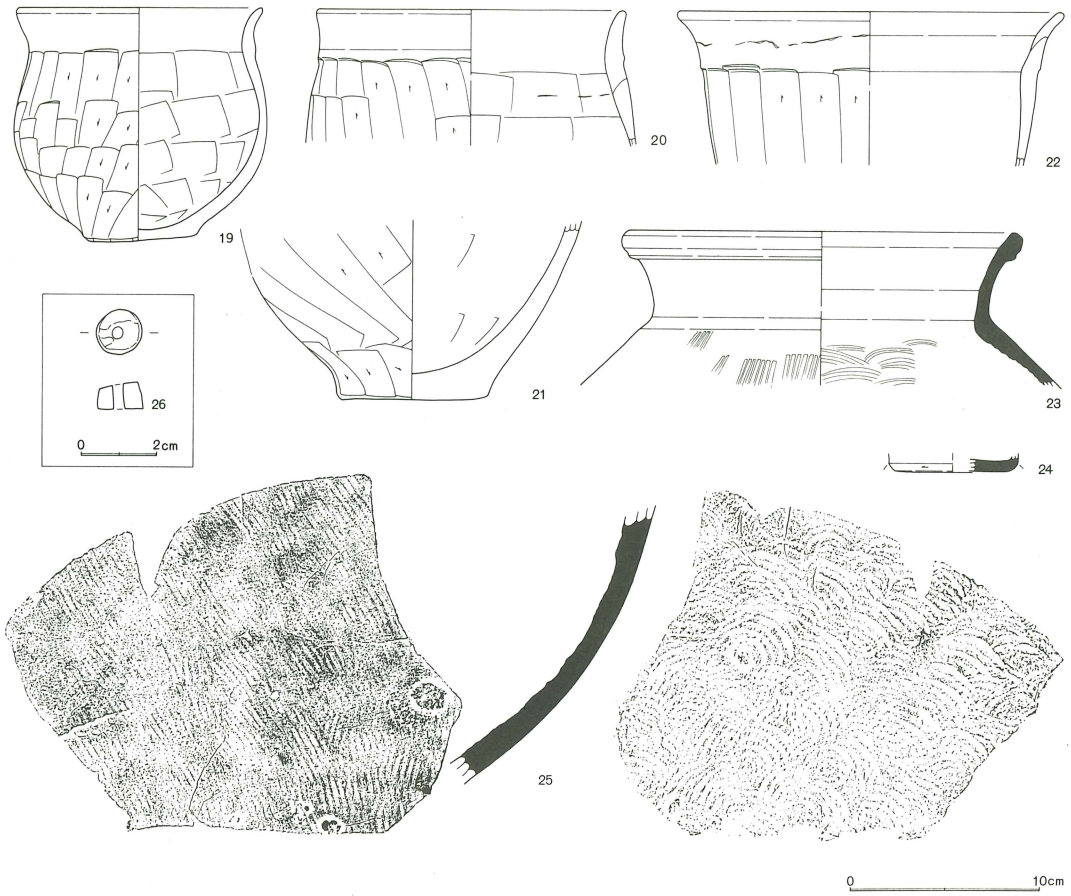

カマド

Ⅰ　暗褐色土　焼土・砂質粘土少量混入。
Ⅱ　暗褐色土　シルト質。焼土・砂質粘土多量混入。
Ⅲ　黄褐色土　ソフトローム・灰黄褐色シルト混入。
Ⅳ　暗褐色土　砂質粘土・焼土多量混入。
Ⅴ　暗褐色土　焼土・粘土・ロームブロック混入。
Ⅵ　暗褐色土　大粒の焼土ブロック多量混入。
Ⅶ　灰褐色土　砂質粘土主体。ロームブロック混入。

**第466図　C区第71号住居跡(2)・カマド**




第467図　C区第71号住居跡出土遺物（1）




**第468図　C区第71号住居跡出土遺物(2)**

**C区第71号住居跡出土遺物観察表**(第467・468図)

| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器高 | 底　径 | 胎　土 | 焼成 | 色　調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | (11.5) | 3.3 | | ABC | B | にぶい橙 | 25% | No.265　覆土(+11cm)　無彩 |
| 2 | 坏 | 10.8 | 3.5 | | ABC | B | にぶい橙 | 75% | No.267　覆土(+11cm)　無彩　内面風化 |
| 3 | 坏 | (10.7) | 3.4 | | ABC | A | にぶい橙 | 45% | No.37,204　床面　赤彩 |
| 4 | 坏 | 11.6 | 3.7 | | ABC | A | にぶい橙 | 95% | No.306　覆土(+5cm)　赤彩 |
| 5 | 坏 | (10.8) | 2.9 | | ABC | B | にぶい橙 | 20% | No.36　覆土(+7cm)　赤彩 |
| 6 | 坏 | 10.7 | 3.4 | | AB | A | にぶい橙 | 50% | No.300　覆土(+8cm)　無彩 |
| 7 | 坏 | (11.2) | 3.5 | | ABC | B | 橙 | 30% | No.251　覆土(+11cm) |
| 8 | 坏 | (10.8) | 3.8 | | ABC | A | にぶい橙 | 40% | No.296　覆土(+11cm)　無彩 |
| 9 | 坏 | (11.0) | 3.6 | | ABE | A | 橙 | 25% | No.30,31　床面　無彩 |
| 10 | 坏 | (12.0) | 3.1 | | ABE | B | にぶい橙 | 15% | No.189　覆土(+7cm)　無彩 |
| 11 | 甕 | (20.4) | 4.6 | | ABCJ | A | 灰黄 | 15% | No.302　覆土(+9cm) |
| 12 | 甕 | (20.5) | 5.6 | | ABCJ | C | 浅黄橙 | 20% | No.246　覆土(+11cm) |
| 13 | 甕 | 18.6 | 36.7 | | ABC | B | にぶい橙 | 90% | No.260,291他　覆土(+4～14cm) |
| 14 | 甕 | 20.0 | 5.0 | | ABCJ | B | 淡黄 | 25% | No.87,215　覆土(+2～9cm) |
| 15 | 甕 | (20.6) | 6.2 | | ABCJ | B | 淡黄 | 15% | 覆土(+4cm)　全体に風化 |
| 16 | 甕 | (23.0) | 7.0 | | ABCJ | A | にぶい橙 | 25% | No.93,317　覆土(+5～6cm) |
| 17 | 甕 | 19.5 | 24.0 | | ABCJ | B | 灰黄褐 | 85% | No.150,160他　覆土(+2～14cm) |

| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器高 | 底　径 | 胎　　土 | 焼成 | 色　調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 18 | 壺 | | 3.4 | 8.4 | ＡＢＣ | Ａ | 灰黄褐 | 30% | No.244,245　覆土(＋11cm) |
| 19 | 小形甕 | 12.7 | 12.3 | 5.8 | ＡＢＣ | Ａ | にぶい橙 | 75% | No.242,298　覆土(＋4～13cm) |
| 20 | 小形甕 | (16.0) | 7.1 | | ＡＢＣＪ | Ｂ | 浅黄橙 | 30% | No.180,297　覆土(＋3～5cm) |
| 21 | 甕 | | 9.4 | 8.0 | ＡＢＣ | Ａ | 淡黄 | 60% | No.176～178　覆土(＋8～20cm) |
| 22 | 甑 | 20.0 | 8.0 | | ＡＢＣＪ | Ｂ | 浅黄橙 | 50% | No.255,305他　覆土(＋3～13cm) |
| 23 | 甕 | (20.2) | 8.1 | | ＡＢＣ | Ｄ | にぶい黄橙 | 40% | No.301,309　覆土(0～＋11cm) |
| 24 | コップ形 | | 1.0 | (6.0) | ＢＣ | Ａ | 暗青灰 | 20% | 覆土 |
| 25 | 甕 | | | | ＡＢ | Ａ | 暗灰 | | No.243,247,304　覆土(＋2～14cm) |
| 26 | 臼　玉 | | | | | | | | No.322　カマド内　径1.2cm　厚さ0.7cm |

**Ｃ区第72号住居跡**(第469・470図)

Ｅ・Ｆ-26区に位置する。住居南東コーナー部は第73号住居跡を僅かに切り、西壁部は第93号土壙に切られていた。形態は方形を呈し、規模は長軸3.62ｍ、短軸3.36ｍ、深さ20cmを測る。主軸方位はＮ－2°－Ｅを示す。

床面は平坦である。覆土は４層に分かれ、ローム混じりの黒褐色土を基調とする。

カマドは北壁の中央から西に寄った位置に設けられていた。規模は長さ1.10ｍ、幅70cmで、燃焼部底面は床面から８cm程掘り凹められフラットである。燃焼部奥壁は急角度で立ち上がり短い煙道部に移行する。覆土は８層に分かれ、天井部及び袖の崩落土で構成されるようである。火床面は掘り方底面か。

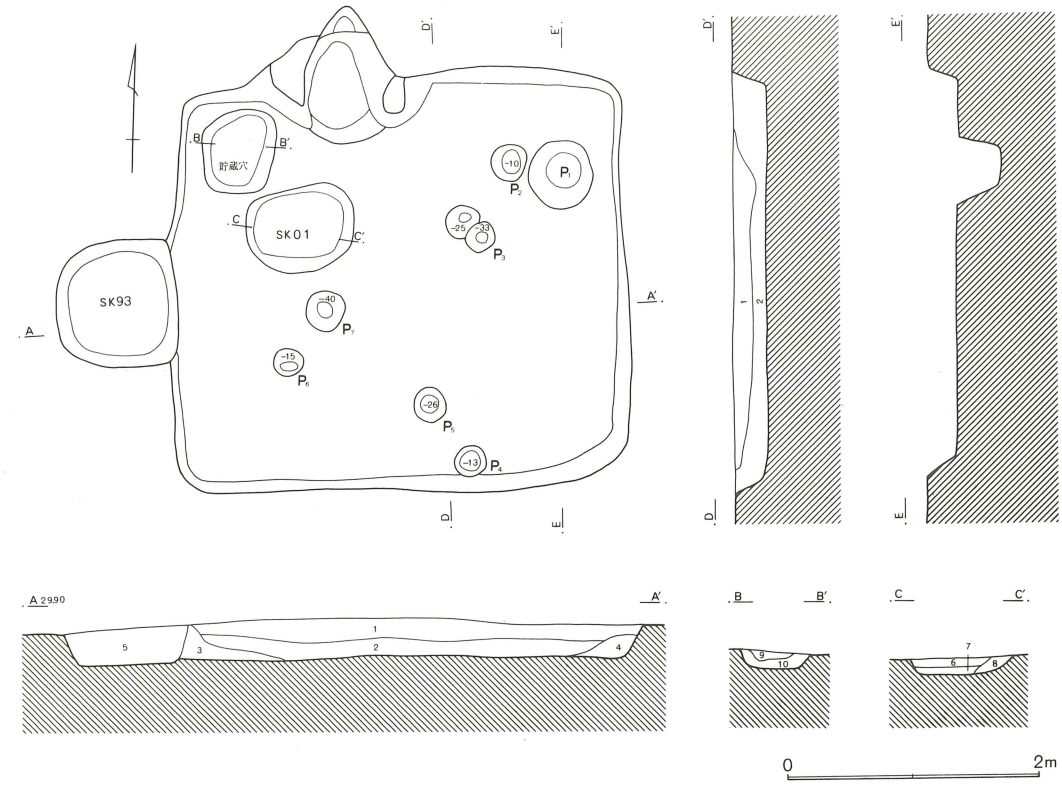
貯蔵穴はカマド脇の北西コーナー内側に設置されている。深さ10cm余りで上層には焼土が多量に含まれていた。

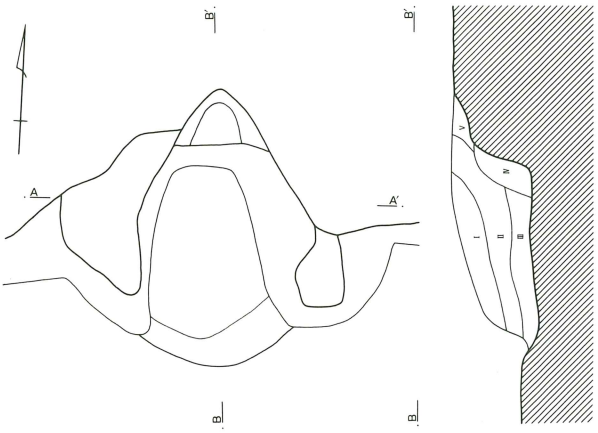
ピットは７本検出されたが、住居に伴う柱穴は明らかにできなかった。その他土壙が１基貯蔵穴南側から検出された(ＳＫ01)。上面に貼床が認められず住居に伴う可能性があるものの性格は不明である。

出土遺物は比較的多い。その大半は床面から浮いた状態で出土しており、埋没過程の流入または投棄品と考えられる。種類としては土師器と須恵器がある。土師器は坏が９点、甕11点、小形甕２点、須恵器は坏が34点、以下蓋５点、甕２点、磨鉢１点、鉢１点、壺・瓶類が４点検出された。

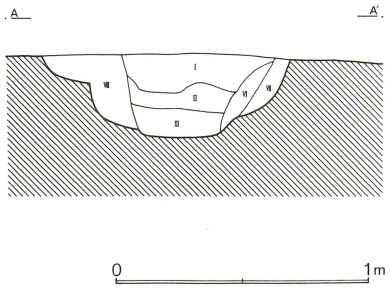
第471図５・６は土師器坏。前者は北武蔵型坏に形態は類似するが在地産。後者は形態上、典型的とはいえないが北武蔵型坏と思われる。

７～21は須恵器坏類である。一見して判るようにかなり法量差のある土器群で構成され、口径15cmを測る18を最大に、14cm代の16・17、13cm前後の９～15、12cm～11cm代まで縮小した７・８まで含んでいる。底部は糸切り後再調整されるものがほとんどであるが、小振りの７・８は底部回転糸切り後無調整である。高台坏は口径15.8cmと大振りで高台の作りもしっかりしている(19)。



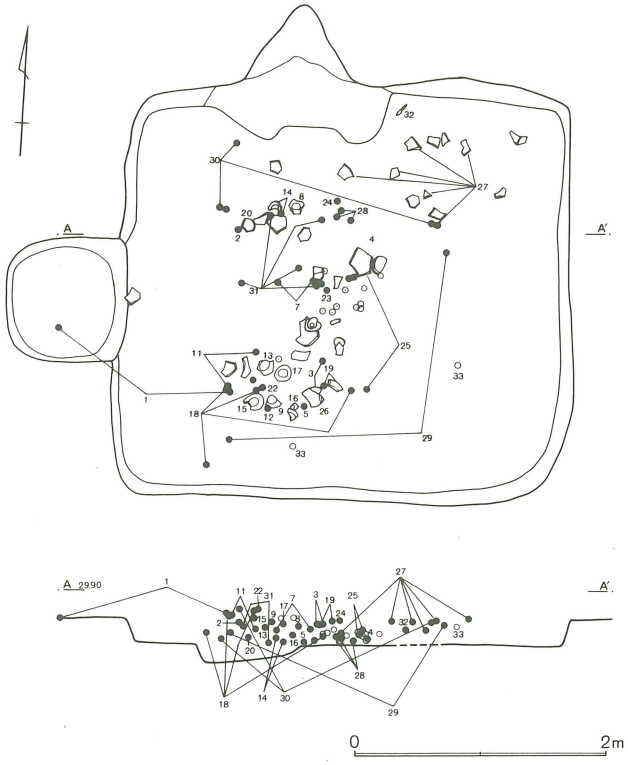




1　黒褐色土　シルト質。小粒ローム少量混入。
2　黒褐色土　シルト質。大粒ローム少量混入。
3　黒褐色土　シルト質。焼土・ローム混入。
4　黒褐色土　シルト質。ロームブロック多量混入。
5　黒褐色土　シルト質。
6　暗褐色土　焼土多量混入。
7　暗褐色土　砂質。
8　暗黄褐色土　シルト質。
9　暗褐色土　焼土多量混入。
10　暗褐色土　ロームブロック多量混入。




カマド
Ⅰ　黄灰褐色土　砂質粘土主体。焼土少量混入。
Ⅱ　黄灰褐色土　砂質粘土主体。焼土・炭化物を多量混入。
Ⅲ　黄灰褐色土　砂質粘土主体。焼土・炭化物を混入。
Ⅳ　暗黄褐色土　砂質粘土主にローム多量混入。
Ⅴ　暗黄褐色土　砂質粘土主に焼土粒子少量混入。
Ⅵ　黄灰褐色土　砂質粘土。焼土少量、ローム多量混入。
Ⅶ　黄灰褐色土　砂質粘土主に焼土を多量に混入。
Ⅷ　黄灰褐色土　砂質粘土とロームブロック混在。

**第469図　C区第72号住居跡・カマド**




第470図　C区第72号住居跡遺物分布図

蓋には器形の判明する資料はない(1～4)。1は釘頭状の鈕が付される。23は磨鉢底部。端部の突出は比較的高いがややだれ気味で、底部は回転糸切りのままである。

第472図27は古墳時代からの系譜を引く丸底甕。10数点の同一個体と思われる破片があるが接合率は低く、図上復元したが器形は本来と異なるかもしれない。口縁部は短く外反し、頸部に5本組の櫛描波状文が巡る。胴部外面は格子叩きで、一部の破片には横走沈線が施されている。内面は同心円状の当具痕の上から軽いナデが加えられる。

32は刀子。平棟で刃関が付くと思われるが銹に覆われ不鮮明である。残長9.1cm。

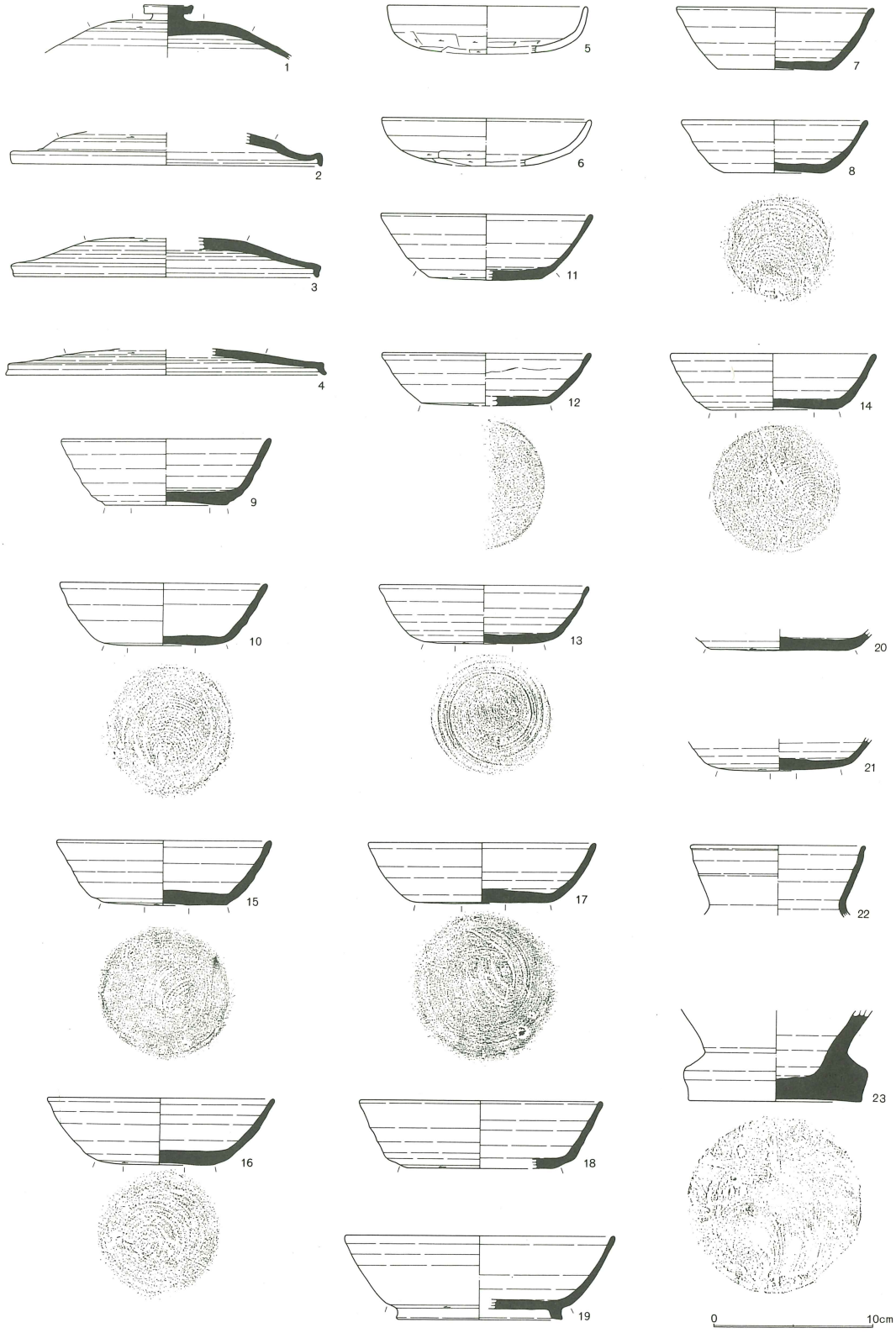
須恵器坏類の法量差に現れているように全体に時期差のある土器群で構成されている。おそらく住居廃絶後一定期間にわたって土器捨て場的に機能したものかもしれない。

時期決定は難しい。カマド内から出土したものを取り上げると18と21の坏がある。前者はカマド内とかなり離れた覆土の破片が接合しており、確実に伴うとは言い切れない。21は底部破片であり、良好な資料とはいえない。

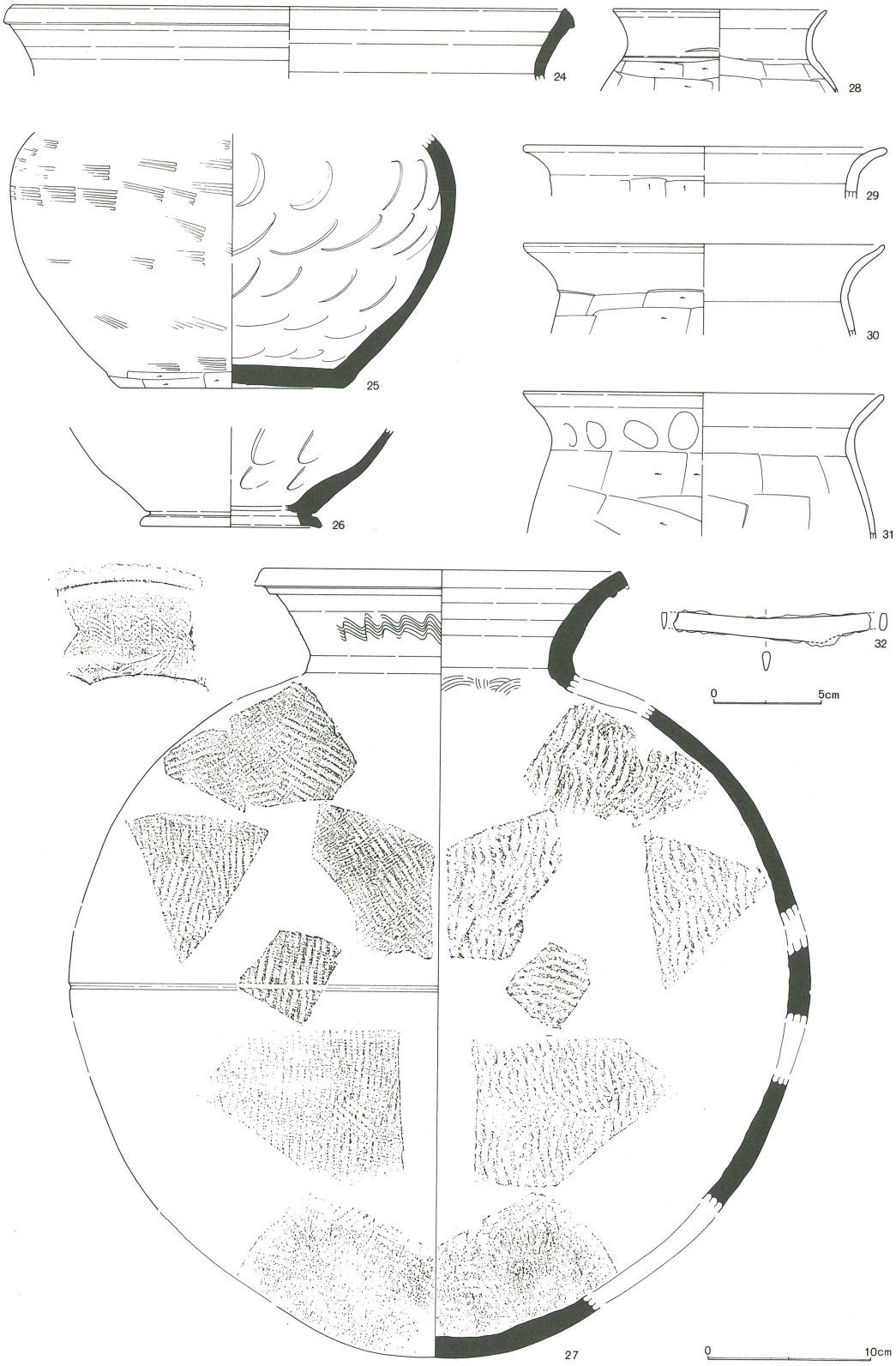
土器群は稲荷前Ⅶ期～Ⅷ期のものが主体を占めると思われるが、7・8はⅩ期またはそれ以降に降

**C区第72号住居跡出土遺物観察表**(第471～473図)

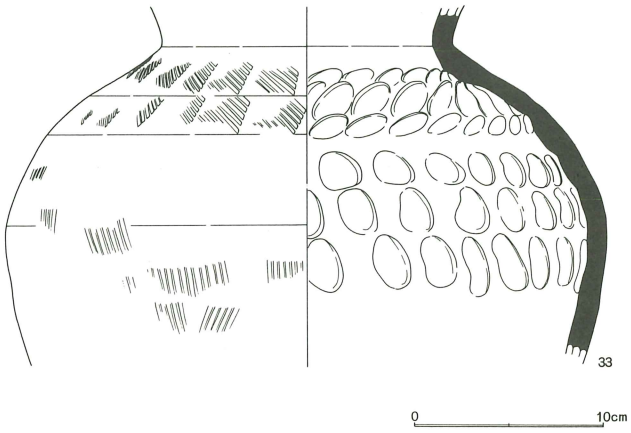
| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 蓋 | | 3.3 | | ABC | A | 灰 | 60% | No.29,176　覆土(+17～24cm) |
| 2 | 蓋 | (19.4) | 2.0 | | ABC | A | 灰 | 10% | No.2　覆土(+17cm) |
| 3 | 蓋 | 19.0 | 2.4 | | ABC | A | 灰 | 40% | No.112,222,223　覆土(+15～23cm) |
| 4 | 蓋 | (20.0) | 1.6 | | ABC | B | 灰黄 | 15% | No.76　覆土(+9cm) |




第471図　C区第72号住居跡出土遺物(1)




第472図　C区第72号住居跡出土遺物(2)




るものと思われる。逆に27の甕は鳩山窯跡群で生産される甕には類例は見いだせず、生産年代はそれ以前に遡る可能性があろう。ここではおおまかに稲荷前Ⅶ期～Ⅷ期にかけて使用から埋没したものと捉えておきたい。

**第473図　C区第72号住居跡出土遺物(3)**

| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器高 | 底　径 | 胎　　土 | 焼成 | 色　調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 5 | 坏 | 12.4 | 2.9 | | ABC | A | にぶい橙 | 15% | No.246　床面　無彩 |
| 6 | 坏 | (13.0) | 2.9 | | ABE | A | にぶい褐 | 25% | カマド内覆土　北武蔵系 |
| 7 | 坏 | (12.2) | 3.9 | 7.1 | ABC | C | 灰黄 | 30% | No.16,18　覆土(+13cm) |
| 8 | 坏 | (11.5) | 3.3 | 6.4 | ABC | A | 緑灰 | 70% | No.217　覆土(+15cm) |
| 9 | 坏 | (13.0) | 4.1 | 7.6 | ABC | A | 青灰 | 40% | No.52　覆土(+18cm) |
| 10 | 坏 | 12.8 | 3.9 | 7.5 | ABC | A | 灰 | 60% | No.229,236他　覆土(+7～10cm) |
| 11 | 坏 | (13.1) | 3.9 | 7.1 | ABC | A | 灰白 | 25% | No.26,228　覆土(+12～26cm) |
| 12 | 坏 | (12.8) | 3.3 | (8.1) | ABC | A | 緑灰 | 45% | No.51　覆土(+28cm) |
| 13 | 坏 | (13.0) | 3.6 | 7.5 | ABC | A | 灰 | 40% | No.41　覆土(+14cm) |
| 14 | 坏 | 12.7 | 3.5 | 8.0 | ABC | A | 緑灰 | 95% | No.216,258　覆土(+5～6cm) |
| 15 | 坏 | 13.2 | 4.0 | 7.9 | ABC | A | 灰 | 55% | No.53　覆土(+21cm) |
| 16 | 坏 | 14.0 | 4.2 | 7.5 | ABC | B | 灰 | 25% | No.245　覆土(+6cm) |
| 17 | 坏 | 14.1 | 3.8 | 8.4 | ABC | C | 灰白 | 80% | No.219　覆土(+19cm) |
| 18 | 坏 | 15.0 | 4.2 | 10.0 | ABC | B | 灰 | 40% | No.24,70他　覆土(+7～27cm)+カマド内 |
| 19 | 高台坏 | (15.8) | 5.2 | (10.3) | ABC | A | 灰 | 30% | No.187,234　覆土(+18cm) |
| 20 | 坏 | | 1.4 | 8.5 | ABC | A | 灰 | 10% | No.7　覆土(+9cm) |
| 21 | 坏 | | 2.0 | 7.6 | ABC | A | 灰オリーブ | 80% | カマド覆土 |
| 22 | 壺 | (10.7) | 4.4 | | A | A | 青灰 | 20% | No.24　覆土上層 |
| 23 | 磨　鉢 | | 5.7 | 10.8 | ABC | A | 灰 | 80% | No.279　覆土(+6cm) |
| 24 | 短頸壺 | (34.0) | 4.4 | | AB | B | 灰白 | 5% | No.152　覆土(+17cm) |
| 25 | 壺 | | 17.5 | 13.8 | ABC | A | 緑灰 | 45% | No.243,251,253　覆土(+1～7cm) |
| 26 | 壺 | | 6.1 | (11.0) | ABC | A | 灰 | 20% | No.230　床面 |
| 27 | 甕 | 22.0 | 48.0 | | ABC | A | 灰 | 10% | No.254,267他　覆土(+2～19cm) |
| 28 | 小形甕 | 13.0 | 5.0 | | ABE | A | にぶい橙 | 75% | No.149,151,199　覆土(+5～7cm) |
| 29 | 甕 | (22.0) | 3.1 | | ABFJ | A | にぶい橙 | 10% | No.69,130　覆土(+8～15cm) |
| 30 | 甕 | (22.0) | 5.6 | | AB | C | にぶい橙 | 15% | No.108,143,150　覆土(+4～30cm) |
| 31 | 甕 | (22.0) | 8.8 | | ABEJ | A | にぶい橙 | 15% | No.14,250,259　覆土(+2～25cm) |
| 32 | 刀　子 | | | | | | | | No.206　覆土(+11cm)　残長9.1cm |
| 33 | 甕 | | 18.7 | | ABC | A | 灰 | 40% | No.62,210他　覆土(+4～23cm) |

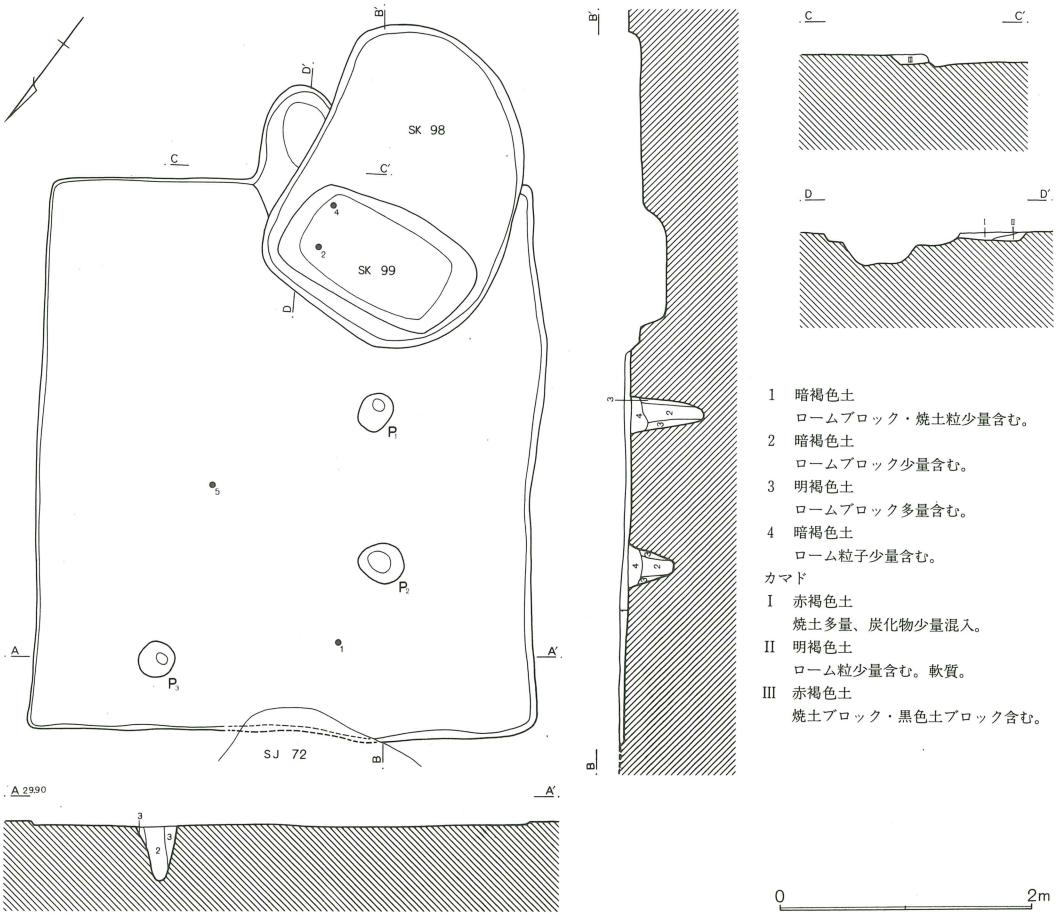
**C区第73号住居跡**（第474図）

F-26・27区に位置し、第72号住居跡に北壁部を切られ、第98・99号土壙によってカマドを破壊されていることが判明した。形態は長方形を呈し、規模は長軸4.30m、短軸3.90m、深さは5cm程と非常に浅い。主軸方位はS－36°－Eを示す。

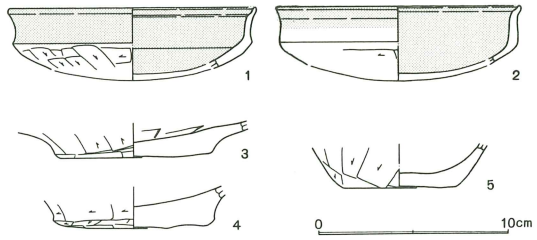
床面はほぼ平坦である。覆土はロームブロックと焼土を含む暗褐色土を基調としていたが、覆土が薄く堆積状態は明らかにできなかった。カマドは南壁に位置するが、西半は土壙によって大きく破壊されていた。覆土には焼土が多量に含まれているが詳細は不明である。袖部は検出されなかった。

ピットは3本検出され、埋土の状態から住居に伴う柱穴と判断されたが、配置は不規則である。

壁溝及び貯蔵穴は検出されなかった。




**第474図　C区第73号住居跡**




**第475図　C区第73号住居跡出土遺物**

出土遺物は少ない。土師器と須恵器があるが後者は土壙に伴う遺物であることが判明した。土師器は坏が７点、甕が３点、壺が４点検出された。第475図１・２は比企型坏で、口径は13cm前後になるものと思われる。ある程度の幅を見ても稲荷前Ⅰ期～Ⅱ期に比定されよう。

**C区第73号住居跡出土遺物観察表**（第475図）

| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器高 | 底　径 | 胎　　土 | 焼成 | 色　調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | (13.0) | 3.2 | | ＡＢＣ | Ａ | にぶい橙 | 20% | No.3　床面　赤彩 |
| 2 | 坏 | 12.8 | 3.1 | | ＡＢ | Ａ | にぶい橙 | 10% | No.31　カマド内　赤彩 |
| 3 | 壺 | | 1.8 | 7.8 | ＡＢＣＥ | Ｂ | 浅黄橙 | 80% | 覆土　底部木葉痕 |
| 4 | 壺 | | 2.2 | 8.5 | ＡＢＣＥ | Ｂ | 浅黄橙 | 100% | No.37　カマド内 |
| 5 | 甕 | | 2.3 | 5.9 | ＡＢＣ | Ａ | 褐灰 | 50% | No.10　床面 |

**C区第74号住居跡**（第476図）

Ｆ-25･26区に位置する。第75号住居跡に切られ、第76号住居跡をカマド煙道部が切っていた。形態は方形を呈し、規模は長軸3.86ｍ、短軸3.46ｍを測る。遺構確認段階で床面が露出していた。主軸方位はＮ－７°－Ｗを示す。

床面は部分的に残存する程度で、大半は既に削平されていた。覆土の状況も不明である。

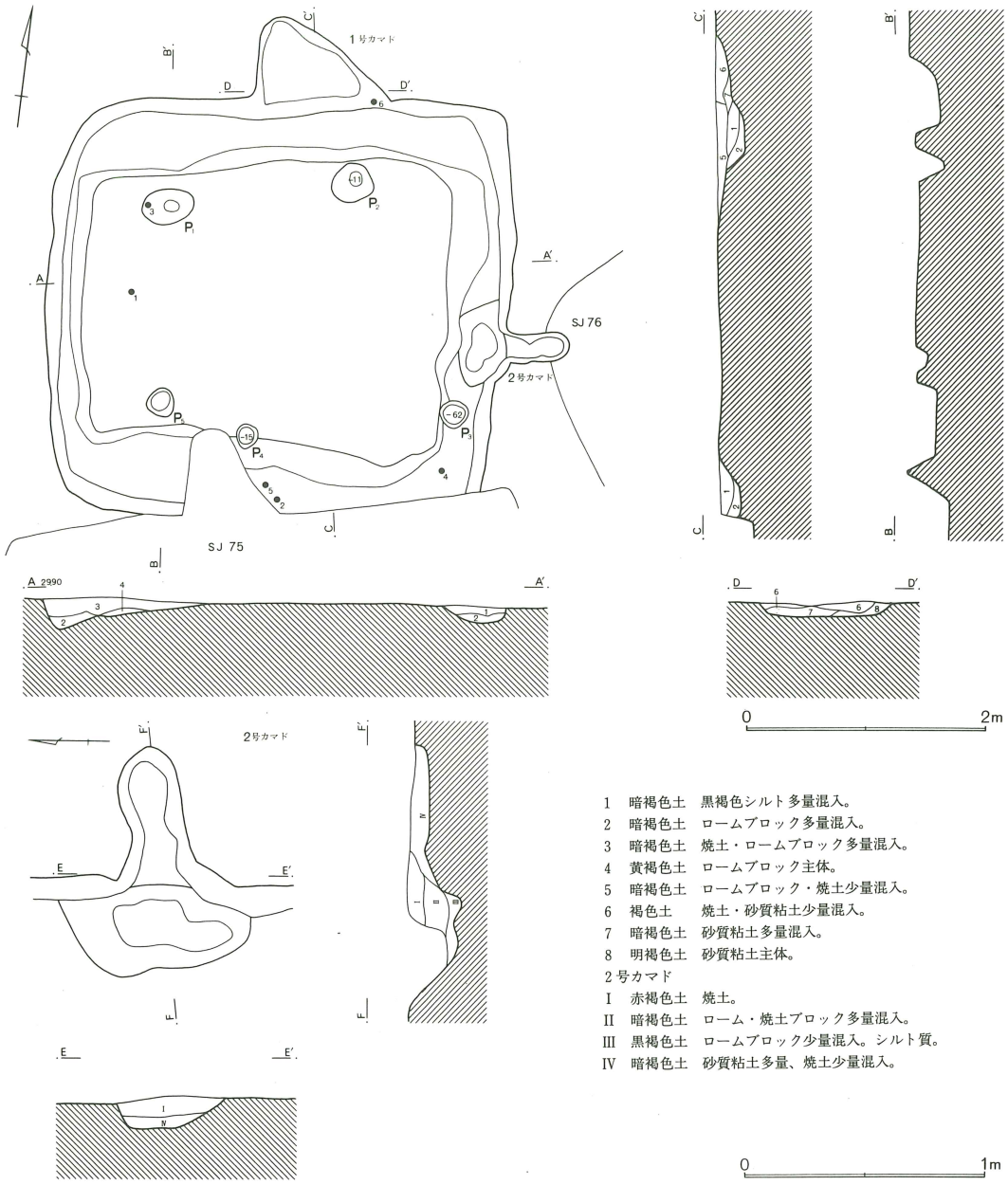
カマドは北壁と東壁に各１基検出された。１号カマドは北壁に設置される。壁外に約60cm掘り込まれ、最大幅は1.18ｍを測る。覆土には砂質粘土と少量の焼土が含まれていた。袖は検出されなかった。

第２号カマドは東壁に設置される。煙道部は壁を約55cm切り込んでほぼ水平に延び、先端は第76号住居跡の覆土を切っている。燃焼部はほぼ壁内にあるものと思われ、煙道部よりも一段深く掘り込まれている。覆土は４層に分かれる。第Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ層は天井部崩落土、第Ⅲ層は掘り方かもしれない。袖は検出されなかった。２基のカマドの新旧関係は住居内に堆積したカマド埋土の遺存状態から、第１号カマドから第２号カマドに付け替えられたものと推定される。

貯蔵穴は検出されなかった。ピットは５本検出されたが、柱穴配置は不明である。

住居壁に沿って、幅30～80cm、深さ20～30cmの掘り方が全周する。覆土はロームブロックを多量に含む黄褐色、または暗褐色土で形成されていた。

出土遺物は少ない。土師器は甕１点、須恵器は坏６点、高台坏１点、椀１点、片口鉢？１点と瓶類胴部片が検出された。第477図１～３は須恵器坏で、器形は不明であるが、底部は再調整されている。４は高台坏で底部を欠く。５は椀で、口縁部内面は沈線状に凹む。６は本来坏であるが、口縁の１か所に内外面から粘土を貼付している。口唇部が欠けているために断定はできないが、片口鉢とした可能性がある。７は土師器の武蔵型甕である。須恵器の様相から稲荷前Ⅷ期を中心とする時期と思われる。

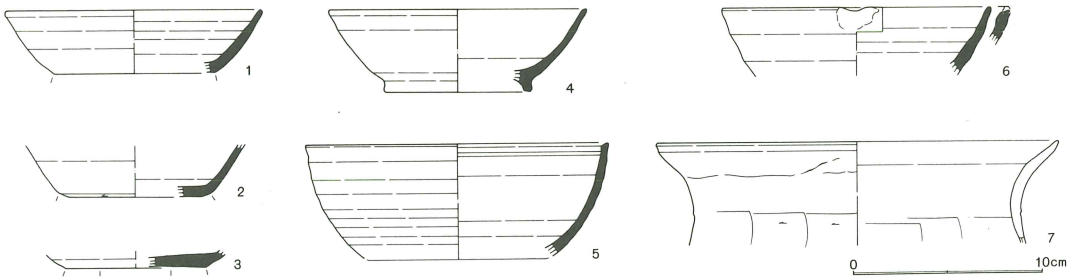



1　暗褐色土　黒褐色シルト多量混入。
2　暗褐色土　ロームブロック多量混入。
3　暗褐色土　焼土・ロームブロック多量混入。
4　黄褐色土　ロームブロック主体。
5　暗褐色土　ロームブロック・焼土少量混入。
6　褐色土　焼土・砂質粘土少量混入。
7　暗褐色土　砂質粘土多量混入。
8　明褐色土　砂質粘土主体。
2号カマド
Ⅰ　赤褐色土　焼土。
Ⅱ　暗褐色土　ローム・焼土ブロック多量混入。
Ⅲ　黒褐色土　ロームブロック少量混入。シルト質。
Ⅳ　暗褐色土　砂質粘土多量、焼土少量混入。

**第476図　C区第74号住居跡・カマド**

**C区第74号住居跡出土遺物観察表**(第477図)

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | (13.4) | 3.3 | (8.5) | ABC | A | 灰白 | 25% | No.8　床面 |
| 2 | 坏 | | 2.7 | (7.0) | ABC | A | 灰白 | 20% | No.13　掘り方内 |
| 3 | 坏 | | 0.9 | (7.4) | ABC | A | 明緑灰 | 40% | No.24　$P_1$上面　底部内面磨滅 |
| 4 | 高台坏 | (13.5) | 4.3 | (7.6) | ABC | D | 浅黄橙 | 15% | No.15　掘り方内　風化著しい |
| 5 | 椀 | (15.9) | 5.9 | | ABC | A | 灰白 | 25% | No.12　床面　口唇内面沈線あり |
| 6 | 片口鉢 | (14.0) | 3.6 | | ABC | B | 灰 | 15% | No.32　床面 |
| 7 | 甕 | (21.0) | 5.4 | | ABEJ | B | にぶい橙 | 15% | カマド内 |




**第477図　C区第74号住居跡出土遺物**

**C区第75号住居跡**(第478図)

F・G-25.26区に位置する。第66・74号住居跡を切って構築されていた。形態は長方形を呈し、規模は長軸4.42m、短軸3.46m、深さ30cmを測る。主軸方位はN－9°－Wを示す。

床面は概ね平坦である。覆土は5層に分かれる。基本的にはロームブロックと焼土を含む黒褐色土で構成され、覆土中層には焼土がレンズ状に堆積していた(第3層)。

カマドは北壁に設けられる。焚口から先端までの長さは1.65m、幅90cmである。燃焼部底面はほぼ平坦で、先端部は直角近い角度で立上がる。覆土は6層に分かれる。第Ⅰ～Ⅲ層が天井部崩落土、第Ⅳ・Ⅴ層が灰層に相当しようか。第Ⅵ層は流入土と思われる。袖は検出されなかった。

ピットは住居中央部から1本検出されたのみである。埋土の状態と深さからみて、柱穴にはならないものと考えられる。

壁溝は深さ10cm程で部分的に検出された。

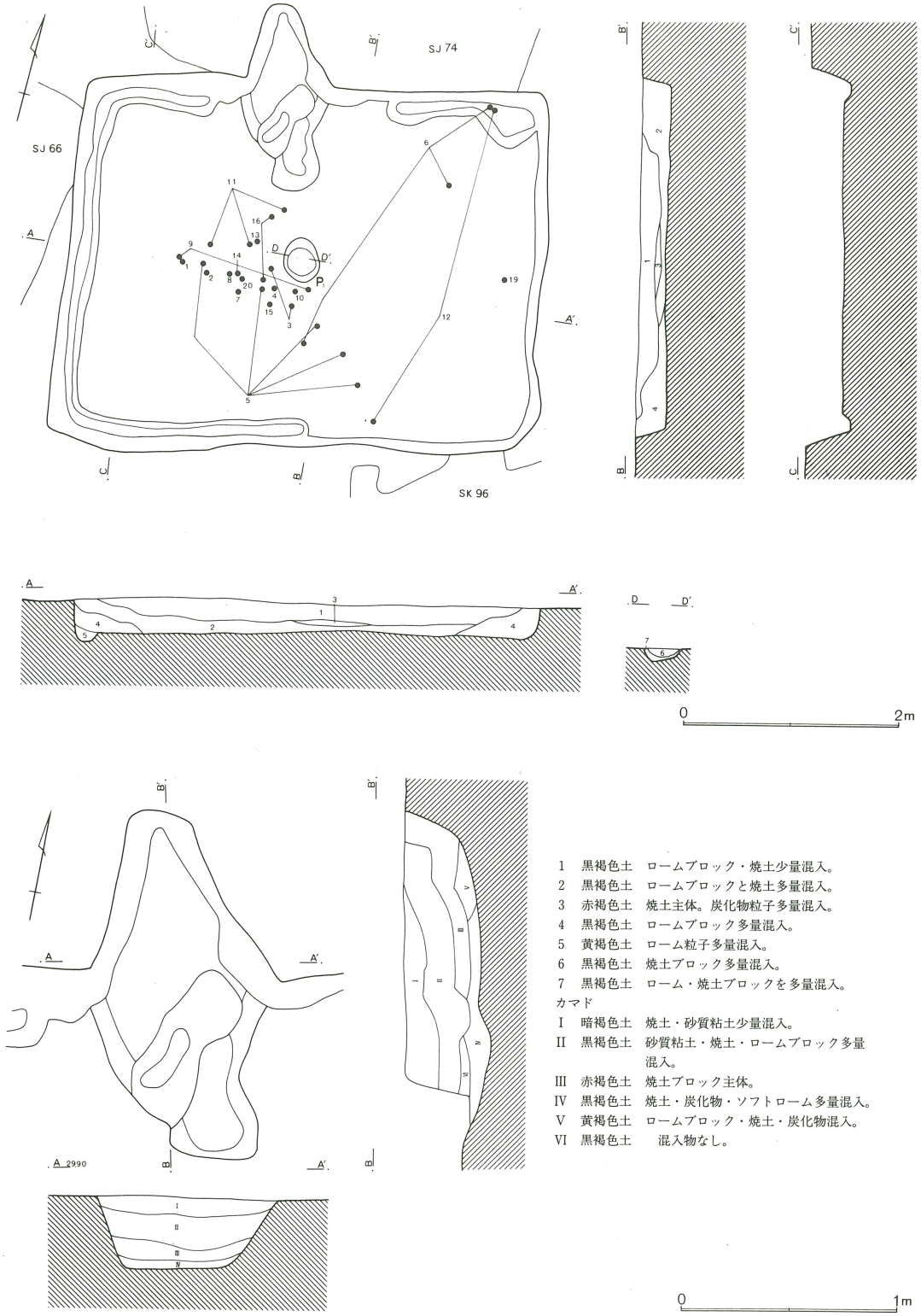
遺物は住居中央部の覆土中からまとまって出土している。おそらく、埋没時の流入、或いは投棄品が多かったものと推定される。土師器、須恵器、鉄器と土製支脚が出土した。土師器は甕が7点、小形甕1点、台付甕1点、鉢1点、須恵器は坏が70点、椀7点、蓋8点、甕1点、壺・瓶類2点(いずれも破片数)が検出された。

第479図1～7は須恵器坏である。4が最も大振りで推定口径13.4cm、6が最小で口径11.6cm。その他は口径12cm大で構成される。底部調整は2が回転糸切りのままで、その他は回転糸切り後周辺部へラケズリ調整が施されている。椀は口唇部に内傾する面をもつもの(11・12)と、内傾面を失っているもの(10・13)がある。

蓋は全形の判明するものが無い。8は小形で高台坏の蓋か。9は椀蓋で擬宝珠鈕が付される。14は壺、15は長頸瓶と思われる。

19は土製支脚である。残長10.9cm、重量380g。方柱状をなす。20は不明鉄器。銹化が著しい。両端は断面円形で口金を嵌めたようにも見える。中央部は断面方形か。工具の柄部の可能性があるが、遺存状態が悪く断定できない。

須恵器坏・椀類は稲荷前Ⅸ期、器壁の薄さや小振りの製品が含まれることから見ると一部はⅩ期に降るかもしれない。但し4は口径が大きく厚手であることからⅧ期に遡ると見てよかろう。出土状況を考慮すると、本住居跡は稲荷前Ⅸ期頃に廃絶したものと考えられる。

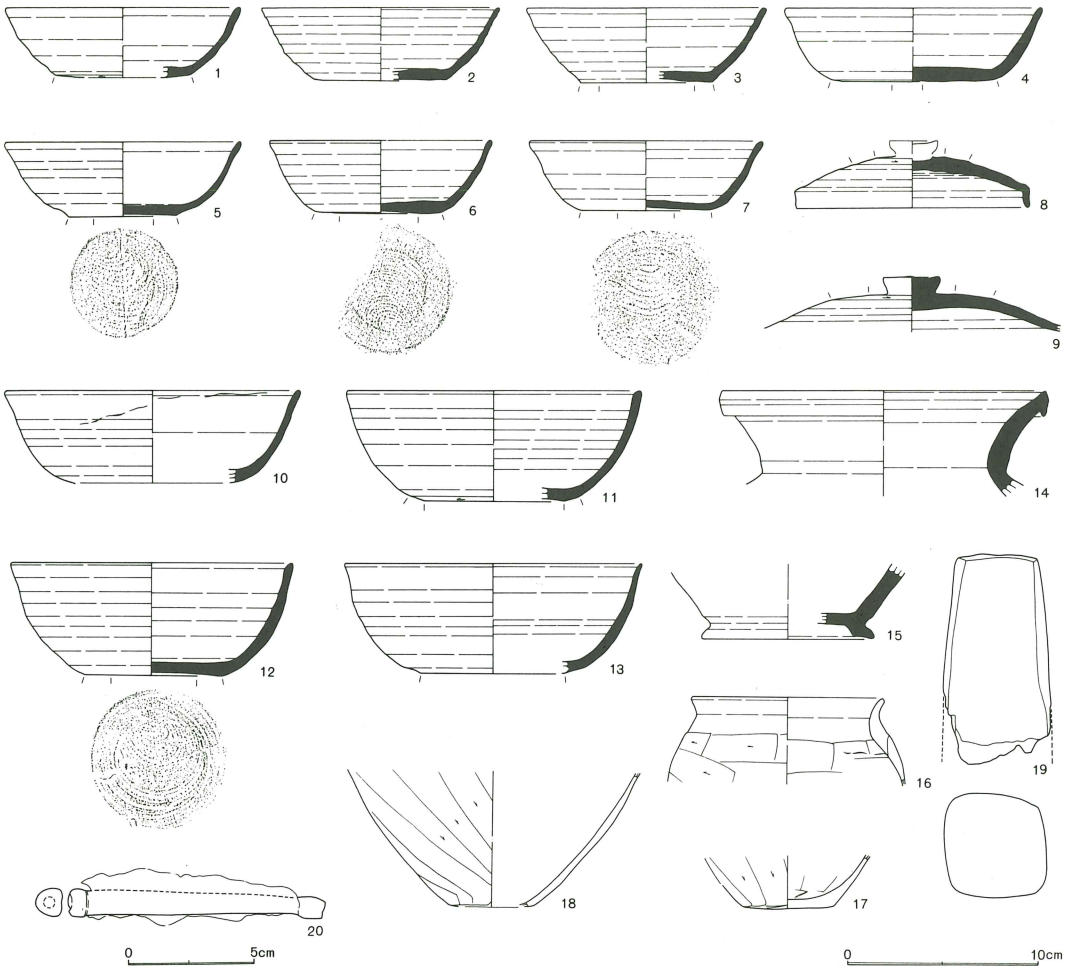



1　黒褐色土　ロームブロック・焼土少量混入。
2　黒褐色土　ロームブロックと焼土多量混入。
3　赤褐色土　焼土主体。炭化物粒子多量混入。
4　黒褐色土　ロームブロック多量混入。
5　黄褐色土　ローム粒子多量混入。
6　黒褐色土　焼土ブロック多量混入。
7　黒褐色土　ローム・焼土ブロックを多量混入。

カマド

I　暗褐色土　焼土・砂質粘土少量混入。
II　黒褐色土　砂質粘土・焼土・ロームブロック多量混入。
III　赤褐色土　焼土ブロック主体。
IV　黒褐色土　焼土・炭化物・ソフトローム多量混入。
V　黄褐色土　ロームブロック・焼土・炭化物混入。
VI　黒褐色土　混入物なし。

**第478図　C区第75号住居跡・カマド**




**第479図　C区第75号住居跡出土遺物**

**C区第75号住居跡出土遺物観察表**(第479図)

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | (12.2) | 3.7 | (7.1) | ABC | A | 緑灰 | 15% | No.19　覆土(+22cm) |
| 2 | 坏 | (12.6) | 3.8 | (7.0) | ABC | A | 灰白 | 20% | No.152　覆土(+16cm) |
| 3 | 坏 | (12.5) | 3.9 | (7.0) | ABC | A | 灰 | 45% | No.147,188　覆土(+11～19cm) |
| 4 | 坏 | (13.4) | 3.8 | 8.6 | ABC | A | 灰白 | 25% | No.30　覆土(+8cm)　全体にやや磨滅 |
| 5 | 坏 | 12.3 | 3.9 | 5.6 | ABC | B | 灰白 | 80% | No.64,153　覆土(+2～20cm) |
| 6 | 坏 | 11.6 | 3.8 | 6.7 | ABC | B | 灰 | 60% | No.107,159　覆土(0～+29cm) |
| 7 | 坏 | (12.2) | 3.6 | 6.9 | ABC | A | 灰 | 60% | No.145　覆土(+7cm) |
| 8 | 蓋 | 12.1 | 2.7 | | ABC | A | オリーブ灰 | 80% | No.168　床面　鈕欠失 |
| 9 | 蓋 | | 3.0 | | ABC | A | 灰褐 | 25% | No.18,207,220　覆土(+11～24cm) |
| 10 | 椀 | (15.4) | 4.8 | | ABC | A | 灰 | 30% | No.187　覆土(+16cm)　底部欠失 |
| 11 | 椀 | (15.5) | 5.7 | (7.4) | ABC | A | 灰 | 15% | No.10,179,185　覆土(+9～28cm) |
| 12 | 椀 | 14.7 | 5.9 | 7.2 | ABC | B | 灰白 | 70% | No.82,159　覆土(0～+10cm) |
| 13 | 椀 | (15.6) | 5.7 | (7.6) | ABC | A | 灰白 | 10% | No.180　覆土(+17cm) |
| 14 | 壺 | (17.0) | 5.5 | | ABC | A | 灰 | 30% | No.26　覆土(+28cm) |
| 15 | 壺 | | 3.9 | (9.0) | ABC | A | 灰 | 20% | No.32　覆土(+15cm) |

| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器高 | 底　径 | 胎　　土 | 焼成 | 色　調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 16 | 小形甕 | 10.0 | 4.5 | | ＡＢＥ | Ｂ | にぶい橙 | 45% | No.8,177　覆土(＋24～28cm) |
| 17 | 甕 | | 2.7 | 4.7 | ＡＢＣ | Ａ | にぶい橙 | 80% | No.223　覆土(＋20cm) |
| 18 | 甕 | | 7.0 | (4.6) | ＡＢＥ | Ｂ | にぶい橙 | 15% | 覆土　内面風化 |
| 19 | 支　脚 | | | | ＡＢＣ | Ａ | 橙 | | 覆土　残長10.9cm　重量380g |
| 20 | 鉄製品 | | | | | | | | No.27　覆土(＋21cm)　残長10.1cm |

**Ｃ区第76号住居跡**(第480図)

Ｆ・Ｇ-26区に位置する。第77号住居跡を切り、第74号住居跡と第10号溝跡に切られていた。形態は方形を呈し、規模は長軸5.80ｍ、短軸5.64ｍ、深さ10～20cmを測る。主軸方位はＮ－53°－Ｅを示す。

床面は壁際がやや高く、中央部が低い傾向にある。覆土はロームブロックと焼土を多量に混在する暗褐色土を基調としており、人為的な埋め戻しの可能性がある。

カマドは北東壁中央に設置される。壁を60cm切り込んで構築され、幅90cmを測る。底面は床面と同一レベルで続き、掘り込みはない。また、先端部にはピットが掘り込まれるが、伴うものではない。覆土は５層に分かれ、第Ⅱ・Ⅲ層が天井部崩落土と推定される。袖は検出されなかった。

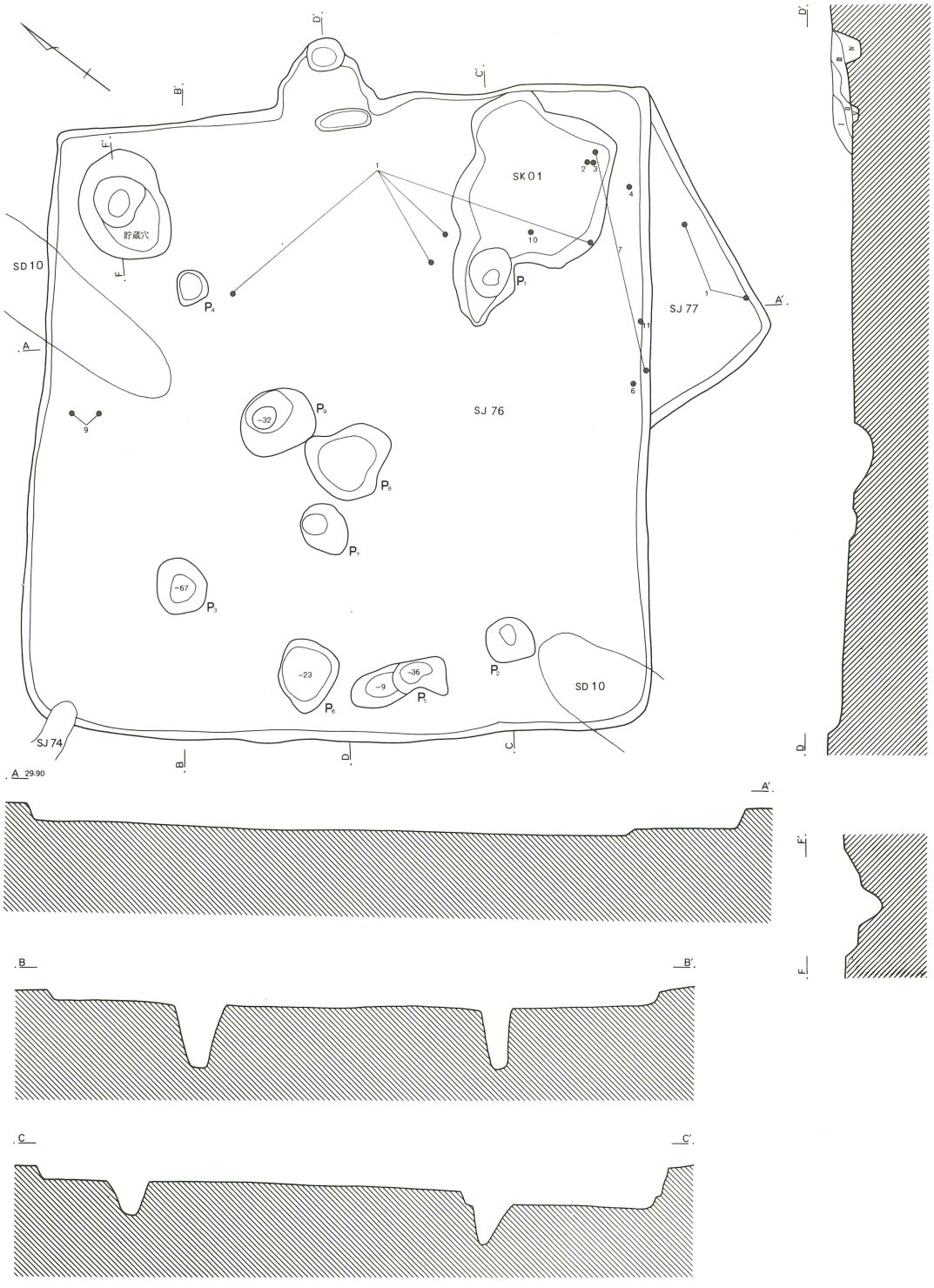
貯蔵穴と思われる掘り込みはカマド左脇のコーナーに設けられていた。底面は２段に掘り凹められ深さは33cm。

ピットは９本検出された。$P_1$～$P_4$が主柱穴に相当するものと考えられる。しかし、$P_2$については配置がややずれ、深度も浅いことから若干疑念は残る。土壙は１基カマド南側から検出された。不定形をなしロームブロックと黒色土の混土層で構成されていたことから住居掘り方と考えるのが妥当であろう。

壁溝は検出されなかった。

出土遺物は土師器、須恵器の他に、灰釉陶器瓶胴部片と中世陶器片が混入していた。土師器は坏が12点、椀１点、甕６点、台付甕１点、須恵器は坏底部片、甕胴部片、水瓶胴部片が計10片検出された。須恵器は８世紀以降の混入である。

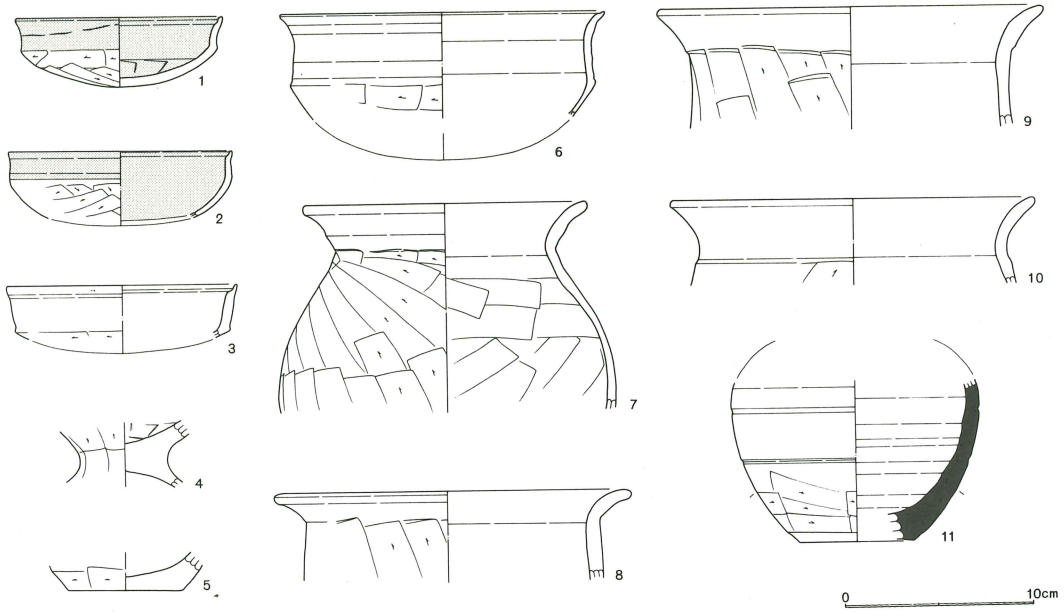
第481図１～３は比企型坏で、１・３は模倣坏系比企型坏に分類される。小型化が顕著に認められる。６は比企型坏系の椀と思われる。７は小形甕。８～10の甕は長胴甕となろう。11は須恵器水瓶と思われる。胴部に平行沈線が２条巡り、底部は無台。床面から出土したが混入の可能性が高い。小片が多く判断しがたい面があるが、幅を見て稲荷前Ⅲ期後半～Ⅳ期に位置付けられよう。




カマド
I　暗褐色土　黒色土を多量に混入。
II　褐色土　焼土ブロック・ローム多量混入。
III　灰褐色土　砂質粘土と焼土ブロック混在。
IV　黒褐色土　ソフトローム混入。
V　褐色土　ローム粒子多量混入。

0　2m

**第480図　C区第76・77号住居跡**




**第481図　C区第76号住居跡出土遺物**

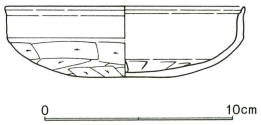
**C区第76号住居跡出土遺物観察表**(第481図)

| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器高 | 底　径 | 胎　土 | 焼成 | 色　調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | 10.8 | 3.7 | | ＡＢＣ | A | 橙 | 70% | No.42,72他　覆土(＋4～10cm)　赤彩 |
| 2 | 坏 | (11.6) | 3.5 | | ＡＢＣ | B | にぶい橙 | 20% | No.9　覆土(＋7cm)　赤彩 |
| 3 | 坏 | (12.0) | 2.8 | | ＡＢＣ | A | にぶい橙 | 20% | No.8　覆土(＋10cm)　無彩 |
| 4 | 台付甕 | | 3.5 | | ＡＢＣ | B | にぶい橙 | 80% | No.5　覆土(＋10cm) |
| 5 | 甕 | | 2.0 | (6.0) | ＡＢＣ | A | にぶい橙 | 30% | Pit 内　底部木葉痕残る |
| 6 | 椀 | (17.1) | 5.6 | | ＡＢＣ | B | 浅黄橙 | 10% | No.31　覆土(＋12cm) |
| 7 | 小形甕 | (14.6) | 10.9 | | ＡＢＣＥ | A | にぶい褐 | 25% | No.30,128　覆土(＋5～13cm) |
| 8 | 甕 | (18.6) | 4.8 | | ＡＢＣＥ | A | 橙 | 10% | Pit 内 |
| 9 | 甕 | (20.0) | 6.4 | | ＡＢＣ | B | 浅黄橙 | 20% | No.79,82　覆土(＋1～7cm) |
| 10 | 甕 | (19.0) | 4.5 | | ＡＢＥＦ | B | 浅黄 | 10% | No.15　覆土(＋8cm)　全体に風化 |
| 11 | 水　瓶 | | 8.4 | (6.0) | ＡＢＣ | A | 灰 | 15% | No.26　床面 |

**C区第77号住居跡**(第480図)

F・G-26区に位置し、第76号住居跡に大半を切られていた。形態は方形を呈するものと推定される。残存規模は長軸2.60ｍ、短軸1.38ｍで、何れにしても小規模の住居跡となろう。深さは10cm。主軸方位はＮ－25°－Ｅを示す。

床面は平坦である。覆土は暗褐色土で構成される。




**第482図　C区第77号住居跡出土遺物**

カマド、貯蔵穴、ピットは検出されなかった。

出土遺物は土師器坏と甕が各１点出土したのみである。第482図１は模倣坏系の比企型坏で口径12.6cmを測る。時期を限定するには資料不足であるが、坏の様相から稲荷前Ⅱ期頃と思われる。

**C区第78号住居跡**（第483図）

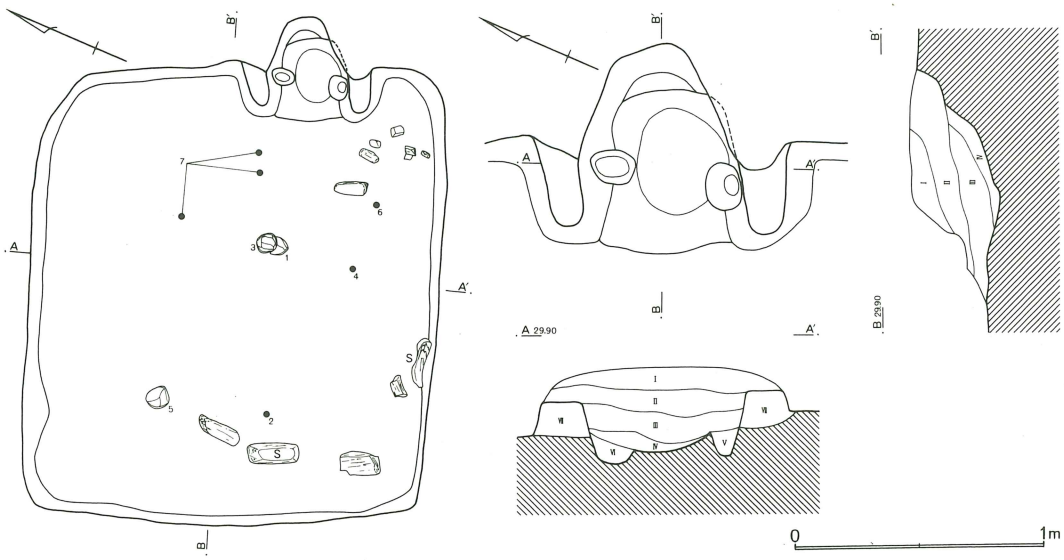
G-26・27区に位置する。形態は方形を呈し、規模は長軸3.52m、短軸3.26m、深さ30cmを測る。主軸方位はN－69°－Eを示す。

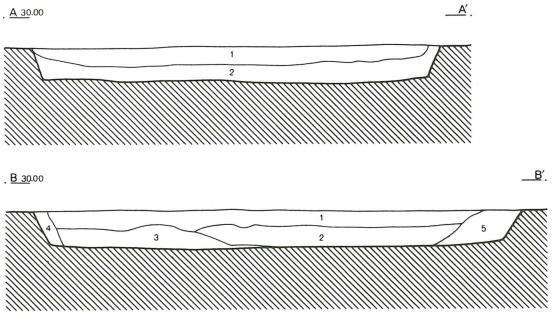
床面は概ね平坦であるが中央部が僅かに深い。覆土は5層に分かれる。暗褐色土を基調に砂礫の混入が目立つ。

カマドは東壁に設けられる。全長82cm、燃焼部幅60cmで燃焼部先端、及び煙道部は壁を40cm程切り込んで構築されていた。燃焼部底面には両側壁に沿って2基の小ピットが掘り込まれていた。覆土は6層に分かれ、第Ⅰ～Ⅳ層は天井部崩落土に相当しよう。袖は砂礫混じりの灰黄褐色粘土で構成されていた。

貯蔵穴及びピットは検出されなかった。

出土遺物は土師器と大型の礫がある。礫と土器の大半は覆土から出土しており直接伴うものは少



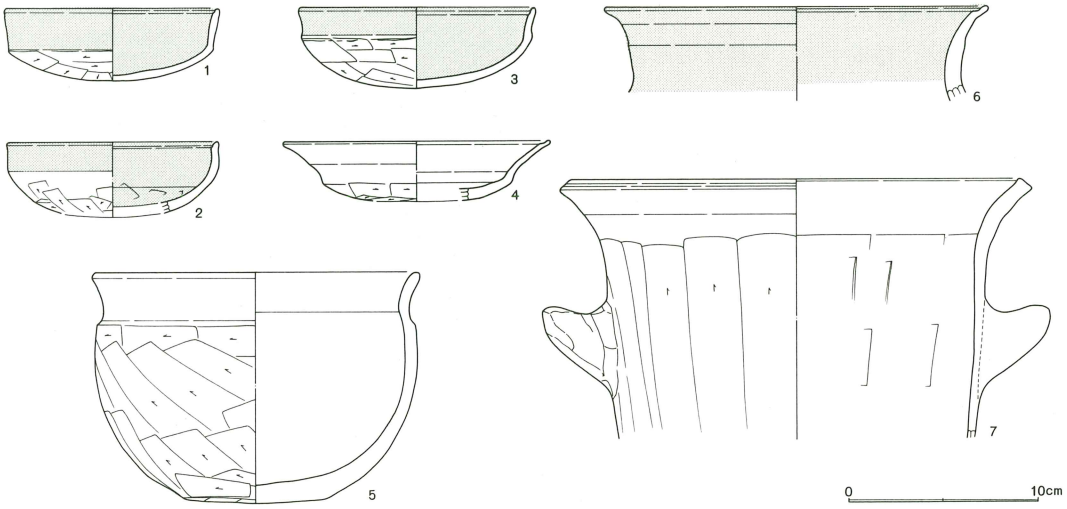

1　暗褐色土　大粒の砂粒を多量に混入。
2　暗褐色土　1層に比して、やや黒みが強い。
3　暗褐色土　砂礫を多量に含む。
4　暗褐色土　ロームブロック少量混入。しまり有り。
5　暗褐色土　焼土・ロームブロック少量混入。

カマド

Ⅰ　暗褐色土　　砂礫・砂質粘土・焼土多量に混入。
Ⅱ　暗褐色土　　砂質粘土・焼土を多量に混入。しまり有り。
Ⅲ　灰黄褐色土　砂質粘土・焼土の混在土。
Ⅳ　灰黄褐色土　砂質粘土を主体とし、焼土を少量混入。
Ⅴ　灰黄褐色土　砂質粘土主体。
Ⅵ　灰黄褐色土　砂礫を多量に混入。
Ⅶ　灰黄褐色土　砂礫・砂質粘土の混合土。

0　2m

**第483図　C区第78号住居跡・カマド**




**第484図　C区第78号住居跡出土遺物**

ない。土師器は坏が5点、皿1点、壺1点、甑1点、鉢1点が検出された。第484図1～3は比企型坏で、1・3は模倣坏系と思われる。1と3は中央部の覆土中層から坏が3枚重なった状態で出土した内の2点である。もう1点は残念ながら紛失した。4は比企型坏系の皿である。5は鉢または小形甕で二次被熱を受けている。6は壺口縁で赤彩される。7は把手付きの甑である。土師器坏類の様相から稲荷前Ⅲ期に比定しておきたい。

**C区第78号住居跡出土遺物観察表**(第484図)

| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器高 | 底　径 | 胎　土 | 焼成 | 色　調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | 11.1 | 3.8 | | ABC | A | にぶい橙 | 95% | No.29　覆土(+8cm)　赤彩 |
| 2 | 坏 | (11.0) | 3.8 | | ABC | A | 橙 | 25% | No.8　覆土(+24cm)　赤彩 |
| 3 | 坏 | (12.4) | 4.3 | | ABC | B | にぶい橙 | 70% | No.28　覆土(+12cm)　赤彩 |
| 4 | 皿 | 14.0 | 3.1 | | ABC | B | にぶい褐 | 25% | No.12　覆土(+7cm)　無彩 |
| 5 | 鉢 | (16.8) | 12.1 | 7.6 | ABCJ | B | 浅黄橙 | 35% | No.24　覆土(+14cm) |
| 6 | 壺 | (20.0) | 4.9 | | ABC | A | にぶい橙 | 15% | No.15　覆土(+5cm)　赤彩 |
| 7 | 甑 | (23.7) | 13.5 | | ABCE | B | 橙 | 20% | No.11,20,21　床面 |

**C区第79号住居跡**(第485図)

G-26区に位置する。南壁部を第6号溝跡に破壊され、遺存状態は良くない。また、北西コーナーは第95号土壙と重複しているが新旧関係は明確に捉えられなかった。形態は長方形を呈するものと推定されるが、東壁南端部が大きく張り出していた。規模は長軸をSK02南壁部までとすると4.40m、短軸3.40m、深さ10cmを測る。主軸方位はN－6°－Wを示す。

床面は南側に向かって傾斜しており一定しない。覆土は砂礫を多量に含む黒褐色土で形成されていた。

カマドは北壁に設けられている。規模は長さ1.02m、幅66cmで、燃焼部底面は床面から15cm掘り凹められている。覆土は3層に分かれ、ローム粒子と焼土が多量に含まれていた。火床面は掘り方底面になるのか、第Ⅲ層上面がそれに相当するのか判然としない。袖は明確に検出することはでき

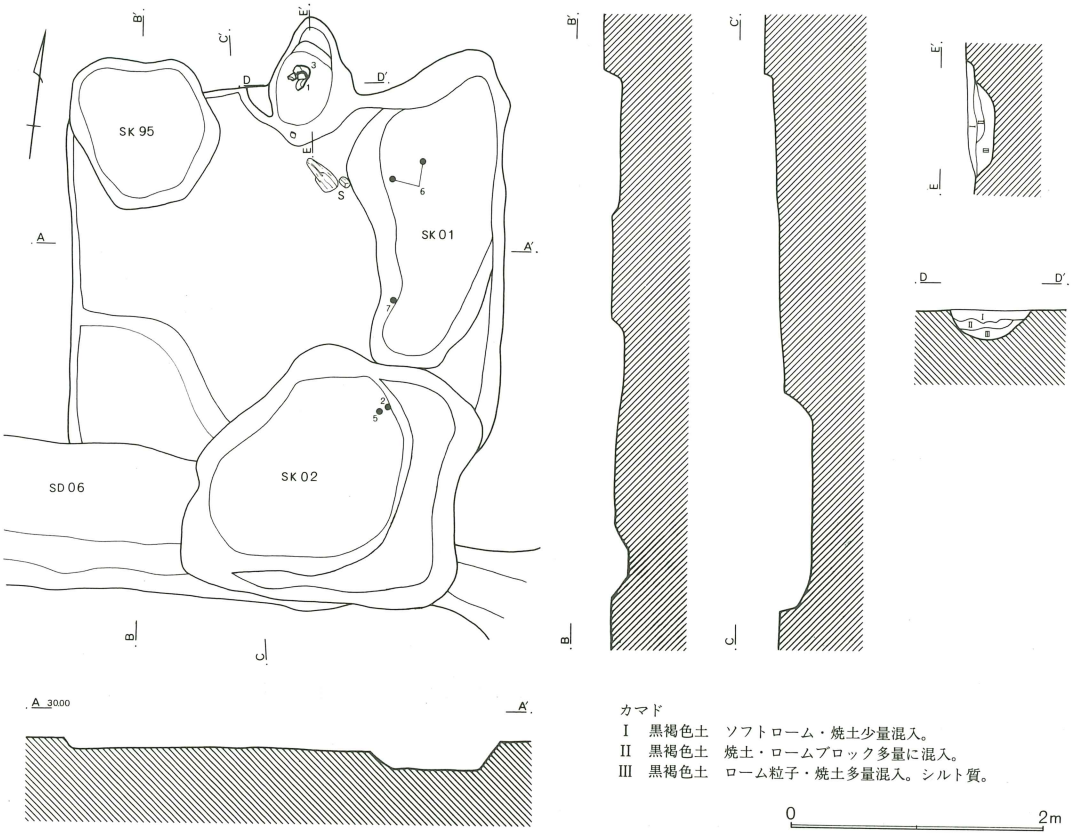
なかった。

土壙状の落ち込みは２か所検出された（ＳＫ01･02）。何れも不定形な形状で、住居内に納まることから掘り方と推定される。ＳＫ01の底面からは青銅製巡方が出土した。ピット、貯蔵穴等の施設は検出されなかった。

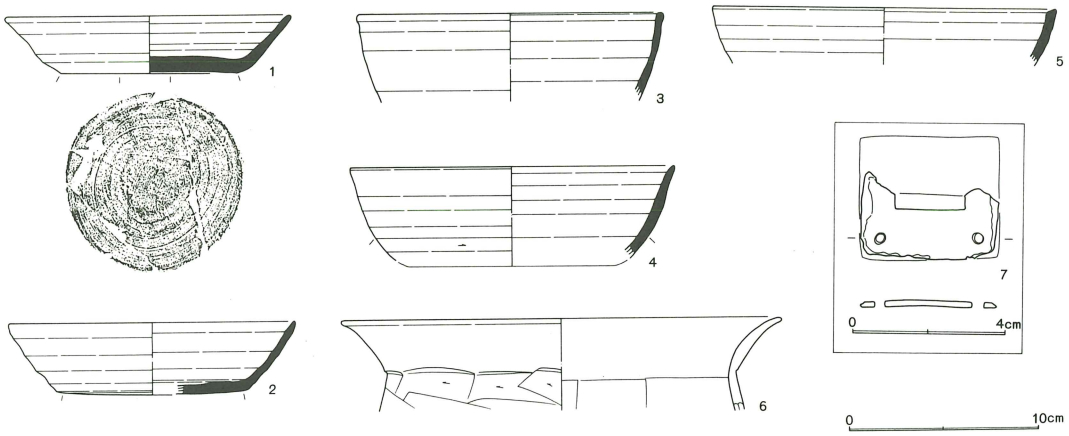
出土遺物は土師器と須恵器、、青銅製巡方、灰釉陶器椀がある。土師器は坏が３点、甕４点、壺２点、須恵器は坏が９点、椀３点、蓋１点、甕１点がそれぞれ検出された。灰釉椀は底部破片で混入である。

第486図１・２は須恵器坏。１はカマド内第Ⅲ層上面から出土した。２はＳＫ02内出土。いずれも口径15cmと大振りで、前者の底部には静止糸切り痕が残る。３～５は須恵器椀で、口縁部形態は全て異なっている。

７は青銅製巡方の裏金と思われる。残長2.1cm、幅3.5cm、厚さ0.15cm。垂孔は一端を欠くが、コーナーと思われる屈曲が破面に僅かに確認され、長さ0.4cm、幅1.9cmの細長の長方形を呈するものと考えられる。下端部左右の隅には径0.2～0.25cmの留孔が穿たれている。また、表面と垂孔長辺には僅かながら銀と思われる物質が残り、本来鍍銀されたものと推定される。土器様相、特にカマド内出土の１を基準に稲荷前Ⅶ期に比定して良かろう。４はやや不安があるが他の土器群とも矛盾しない。




**第485図　Ｃ区第79号住居跡**




**第486図　C区第79号住居跡出土遺物**

**C区第79号住居跡出土遺物観察表**(第486図)

| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器高 | 底　径 | 胎　　土 | 焼成 | 色　調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | 15.0 | 3.0 | 9.4 | ABC | A | オリーブ灰 | 90% | カマド覆土 |
| 2 | 坏 | (15.0) | 3.8 | (10.2) | ABC | A | 灰 | 25% | No.73　住居内SK02(掘方-7cm) |
| 3 | 椀 | (16.0) | 4.6 | | ABC | A | 灰 | 10% | カマド内 |
| 4 | 椀 | (17.0) | 4.8 | | ABC | A | 暗灰 | 10% | 覆土 |
| 5 | 椀 | (15.0) | 3.8 | (10.2) | ABC | A | 灰 | 5% | No.19　床面 |
| 6 | 甕 | (23.0) | 4.8 | | ABE | A | にぶい橙 | 20% | No.55,56　床面 |
| 7 | 巡　方 | | | | | | | | No.81　SK01内底面　銅製巡方 |

**C区第80号住居跡**(第487図)

F-27区に位置する。形態は方形を呈し、規模は長軸5.10m、短軸4.90m、深さ20cmを測る。主軸方位はN－2°－Wを示す。

床面は全体的に堅く締まっているが、凹凸が比較的顕著であった。覆土はロームを多量に含む暗褐色土を基調とする。

カマドは北壁に設けられる。規模は小さく、長さ64cm、幅74cmを測る。おそらく燃焼部のみ遺存し煙道部は削平されたものと推定される。覆土は3層に分かれる。第Ⅰ～Ⅲ層は点上部崩落土に相当しよう。袖は黒色土混じりの灰褐色粘質土を用いて構築されているが、遺存状態は悪く、左袖部は明確に捉えることはできなかった。

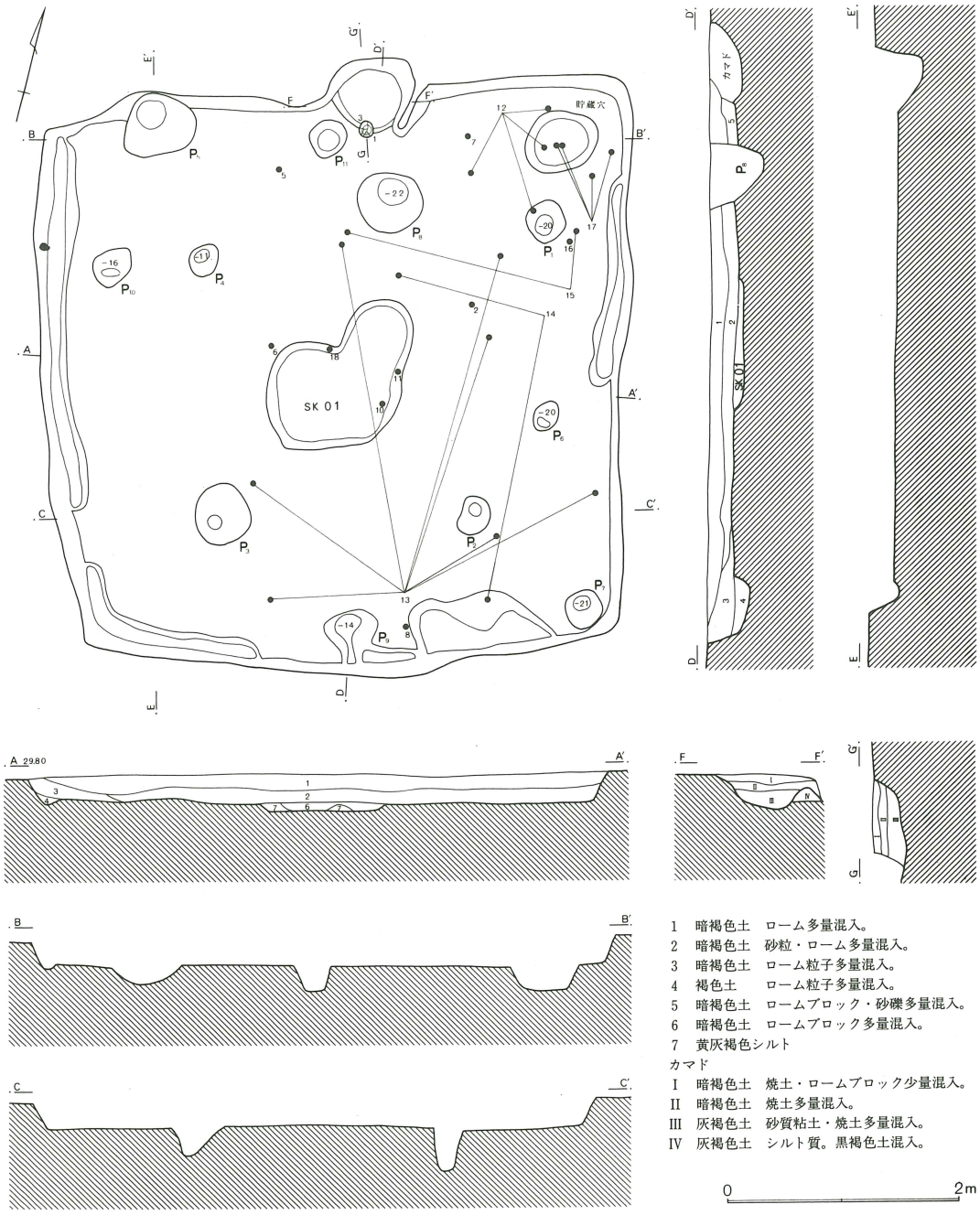
貯蔵穴は北東コーナー内側に設置される。径55cmの円形プランを呈し、深さは23cmを測る。覆土には焼土粒子が多量に含まれていた。

ピットは11本検出された。$P_1$～$P_4$は4本主柱穴を構成するものと考えられるが、$P_1$のみやや不規則な配置となる。他のピットは直接伴うものではなかろう。また、住居中央部に不整形の土壙(SK01)が検出された。上面に貼床が施され、住居に伴う床下土壙または掘り方と推定される。

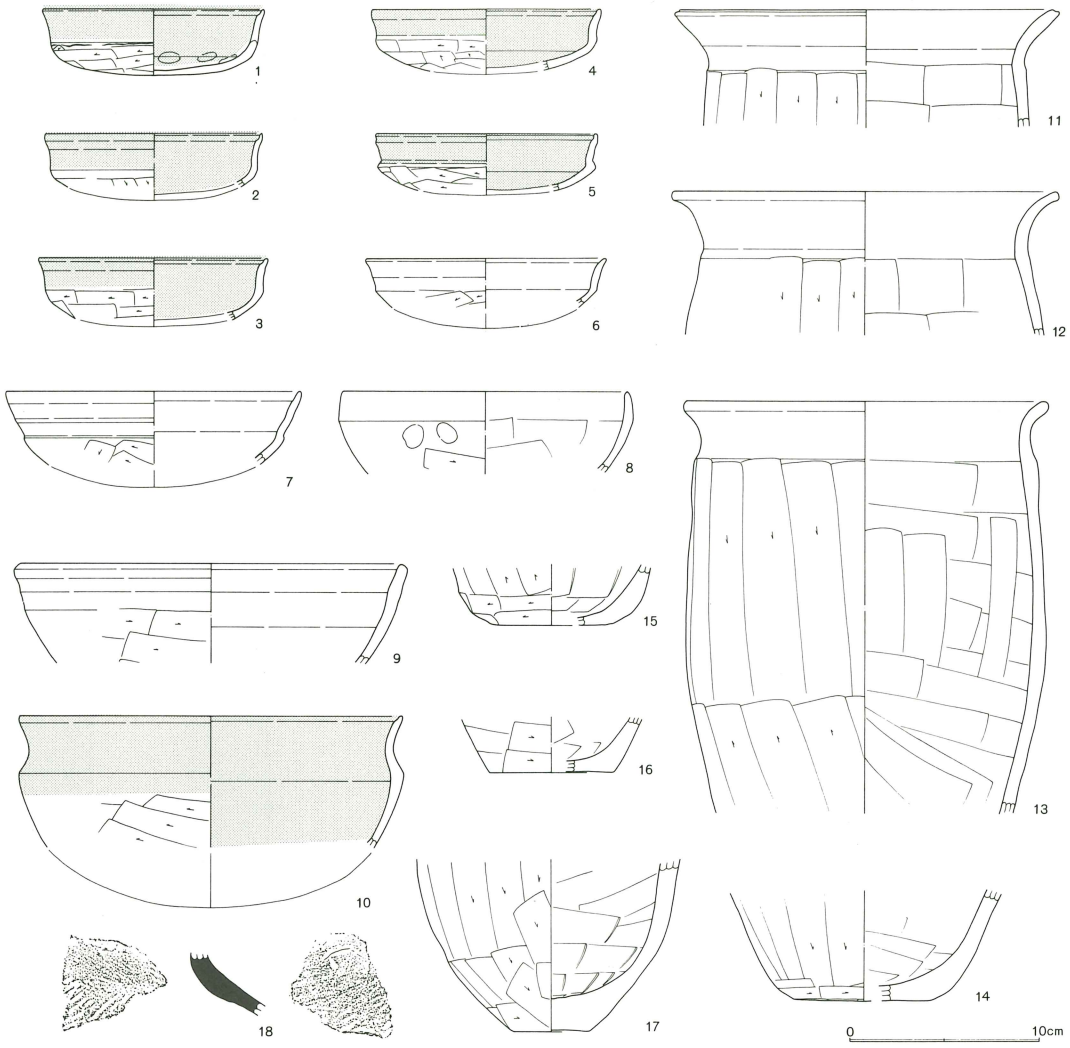
壁溝は北壁を除き断続的に巡る。特に南壁部では不規則となっていた。

出土遺物は土師器と須恵器が検出された。土師器は坏が27点、椀4点、甕11点、須恵器は坏、蓋、甕の破片が数点検出されている。須恵器はほとんどが混入である。土師器坏は比企型坏が14点、模

倣坏系のそれが6点、模倣坏が1点、暗文坏が1点(混入と思われる)、模倣坏系か比企型坏か不明なもの5点となる。第488図1～6は土師器坏。1～3は口縁下に腰を残す比企型坏、4・5は模倣坏系比企型坏、6は模倣坏である。1と3はカマド焚口部から2枚重なった状態で出土した。甕はいわゆる長胴甕で、12･13は胴部に膨らみを残す。18は須恵器甕の頸部片外面平行叩き、内面当て具をなで消す。混入か。土師器坏及び甕の様相から稲荷前III期に比定されよう。




**第487図 C区第80号住居跡**




**第488図　C区第80号住居跡出土遺物**

**C区第80号住居跡出土遺物観察表**(第488図)

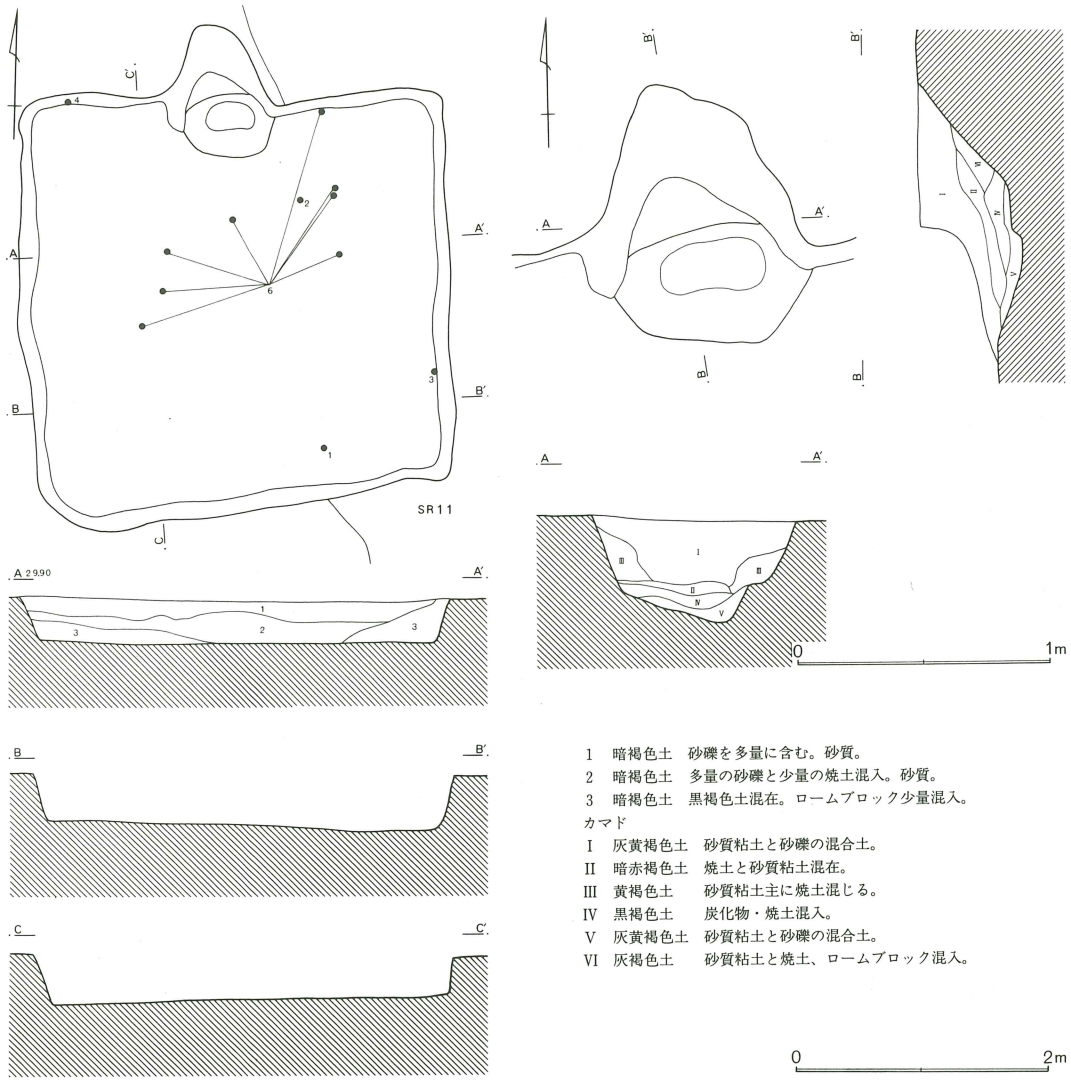
| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器高 | 底　径 | 胎　土 | 焼成 | 色　調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | 11.6 | 3.5 | | ABC | B | にぶい橙 | 90% | No.179　カマド内　赤彩 |
| 2 | 坏 | (11.4) | 2.9 | | ABC | B | にぶい橙 | 10% | No.152　覆土(+19cm)　赤彩 |
| 3 | 坏 | 12.0 | 3.2 | | ABC | B | にぶい橙 | 50% | No.180　カマド内　赤彩 |
| 4 | 坏 | (12.0) | 3.2 | | ABC | A | にぶい黄橙 | 20% | カマド内覆土　赤彩 |
| 5 | 坏 | (11.6) | 3.0 | | ABC | A | にぶい橙 | 20% | No.148　覆土(+8cm)　赤彩 |
| 6 | 坏 | (12.6) | 2.6 | | ABC | A | にぶい橙 | 10% | No.132　覆土(+17cm)　無彩 |
| 7 | 坏 | (15.4) | 3.9 | | ABCE | B | 橙 | 10% | No.87　覆土(+17cm)　無彩 |
| 8 | 椀 | (15.0) | 4.3 | | ABC | C | にぶい橙 | 15% | No.18　覆土(+20cm)　無彩 |
| 9 | 鉢 | (20.0) | 5.2 | | ABC | B | 灰褐 | 15% | カマド内覆土 |
| 10 | 鉢 | (20.0) | 7.0 | | ABC | A | 橙 | 10% | No.22,125　覆土(+14cm)　赤彩 |
| 11 | 甕 | (19.6) | 7.2 | | ABC | A | 灰黄褐 | 20% | No.178　床面 |
| 12 | 甕 | (20.0) | 7.5 | | ABCJ | A | にぶい橙 | 10% | No.83,84　覆土(0～+10cm) |
| 13 | 甕 | (18.7) | 21.5 | | ABCJ | A | にぶい橙 | 25% | No.7,49　覆土(0～+19cm) |

| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器高 | 底　径 | 胎　　土 | 焼成 | 色　調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 14 | 甕 | | 5.8 | (7.4) | ＡＢＣ | Ａ | にぶい褐 | 25% | No.11,102　覆土(＋18cm) |
| 15 | 甕 | | 3.2 | (6.5) | ＡＢＣ | Ａ | にぶい橙 | 45% | No.74,135　覆土(＋9～15cm) |
| 16 | 甕 | | 2.9 | (6.5) | ＡＢＣ | Ａ | にぶい黄橙 | 15% | No.73　覆土(＋17cm) |
| 17 | 甕 | | 9.0 | 4.0 | ＡＢＣ | Ａ | にぶい黄橙 | 60% | No.81他　覆土(＋8～20cm),貯穴内 |
| 18 | 甕 | | | | ＡＢＣ | Ｃ | 灰オリーブ | | No.117　覆土(＋12cm) |

**Ｃ区第81号住居跡**(第489図)

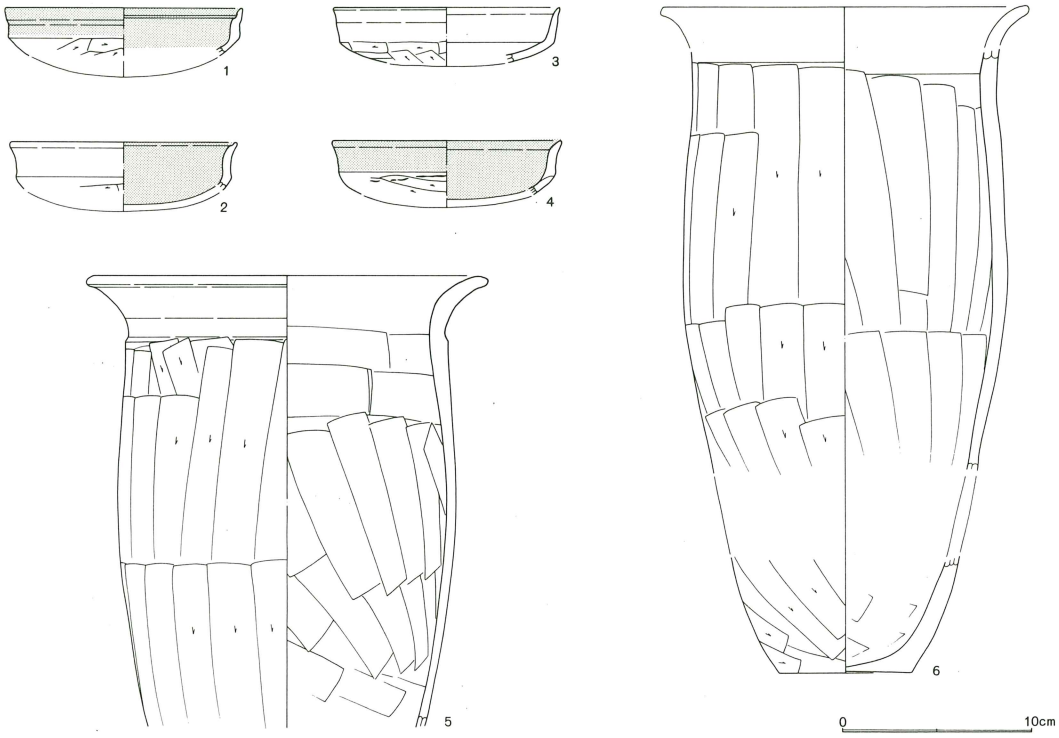
Ｆ-27区に位置する。住居東半は第11号方形周溝墓西溝上に位置する。形態は方形を呈し、規模は長軸3.40ｍ、短軸3.34ｍ、壁高は40cmと深い。主軸方位はＮ－２°－Ｗを示す。

床面は周溝墓覆土上に位置する東壁部に向かって深くなっている。覆土は４層に分かれる。１次堆積の第３層はロームブロックと黒褐色土が混じり軟質、２次堆積の１・２層は砂礫を多く含み堅く




1　暗褐色土　砂礫を多量に含む。砂質。
2　暗褐色土　多量の砂礫と少量の焼土混入。砂質。
3　暗褐色土　黒褐色土混在。ロームブロック少量混入。
カマド
Ⅰ　灰黄褐色土　砂質粘土と砂礫の混合土。
Ⅱ　暗赤褐色土　焼土と砂質粘土混在。
Ⅲ　黄褐色土　砂質粘土主に焼土混じる。
Ⅳ　黒褐色土　炭化物・焼土混入。
Ⅴ　灰黄褐色土　砂質粘土と砂礫の混合土。
Ⅵ　灰褐色土　砂質粘土と焼土、ロームブロック混入。

**第489図　Ｃ区第81号住居跡・カマド**




**第490図　C区第81号住居跡出土遺物**

締まっていた。

カマドは北壁に設置されていた。焚口から先端までの長さ100cm、焚口幅80cmを測り、底面は床面から12cm掘り凹められている。奥壁は壁を切り込んでかなり急角度で立上がる。覆土は砂質粘土を主体に構成され6層に分かれる。第Ⅰ～Ⅲ層は天井部崩落土、第Ⅳ層は灰層に相当しようか。第Ⅴ層は掘り方埋土と思われる。袖は既に崩壊しており、その痕跡を留めていなかった。また、貯蔵穴、ピット等の施設は検出されなかった。

出土遺物は土師器と須恵器が検出された。土師器は坏が8点、椀1点、甕3点、小形甕1点、須恵器は坏底部が1点と甕胴部が1点出土しているが、混入と思われる。土師器坏は比企型坏が5点、模倣坏系のそれが3点となる。第490図1～4は比企型坏である。全て小片であり、あまり良好な資料とはいえない。5・6は長胴甕で胴部中位に僅かに膨らみを残す。

**C区第81号住居跡出土遺物観察表**(第490図)

| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器高 | 底　径 | 胎　　土 | 焼成 | 色　調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | (12.4) | 2.5 | | ABC | A | にぶい黄橙 | 10% | No.8　覆土(+29cm)　赤彩 |
| 2 | 坏 | (11.8) | 2.5 | | AB | A | にぶい橙 | 5% | No.40　覆土(+9cm)　外面赤彩不明 |
| 3 | 坏 | (11.9) | 2.9 | | ABC | B | 灰黄褐 | 20% | No.20　覆土(+32cm)　無彩 |
| 4 | 坏 | (11.8) | 2.8 | | ABC | A | にぶい橙 | 10% | No.57　覆土(+6cm)　赤彩 |
| 5 | 甕 | (20.0) | 23.7 | | ABCE | A | にぶい黄橙 | 35% | カマド内覆土 |
| 6 | 甕 | | 35.0 | 7.0 | ABCE | A | にぶい黄橙 | 40% | No.26,30他　覆土(+16～31cm) |

**C区第82号住居跡**（第491図）

調査区北東部のE-29区に位置する。住居北隅は水田構築の際に削平されていた。形態は方形を呈するものと推定され、規模は長軸2.40m、短軸2.36m、深さは南壁部で30cmを測る。主軸方位はN－43°－Eを示す。

床面はほぼ平坦で全体に軟弱であった。覆土は5層に分かれ、ローム粒子と砂礫の混入が目立つ。

カマドは北東壁に位置する。先端部は削平され遺存状態は悪いが、辛うじて右袖部は残存していた。燃焼部底面は床面から10cm程掘り込まれ、埋土の状況から第Ⅰ層下面が火床面に、第Ⅱ・Ⅲ層は掘り方に相当するものと思われる。右袖部は褐色粘土を用いて構築されていた。

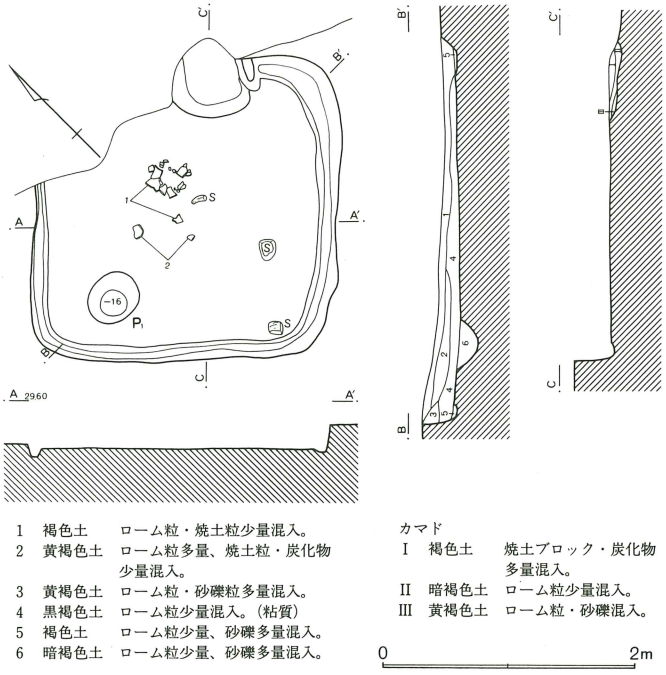
ピットは1本検出され、断面観察から住居に伴うものと判断された。

壁溝は深さ5cm以下と浅く、残存部は全周する。

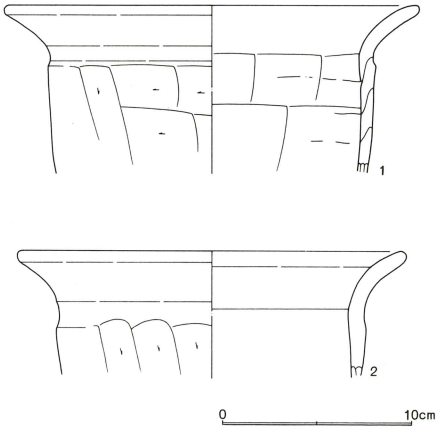
出土遺物は土師器甕が2点あるのみで極めて少ない。

第492図1・2は住居中央部の床面より浮いた状態で出土した長胴甕である。最大径は口縁部にあり、胴部に膨らみは見られないようである。

時期の限定は難しいが、7世紀中葉～後半頃に位置付けられようか。




**第491図　C区第82号住居跡**




**第492図　C区第82号住居跡出土遺物**

**遺物出土状況**

**C区第82号住居跡出土遺物観察表**(第492図)

| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器高 | 底　径 | 胎　　土 | 焼成 | 色　調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕 | (21.4) | 8.7 | | ABC | A | にぶい橙 | 25% | No.1,2　覆土(+4～9cm) |
| 2 | 甕 | (20.0) | 6.6 | | ABC | A | にぶい黄橙 | 15% | No.3,4　覆土(+9～13cm) |

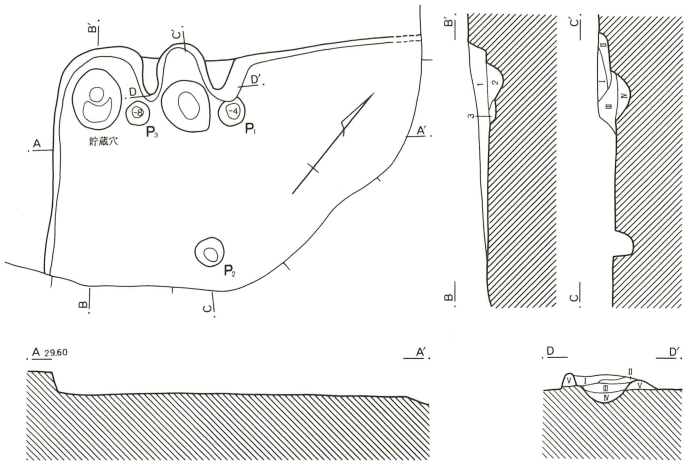
**C区第83号住居跡**(第493図)

F-29・30区に位置する。住居の大半は削平され詳細は不明。残存規模は長軸2.82m、短軸1.80m、深さは西壁部で15cmを測る。主軸方位はN－37°－Wを示す。

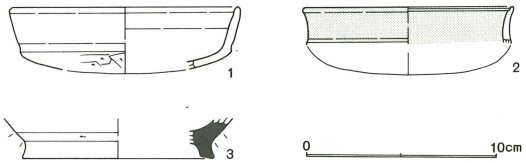
床面は凹凸がある。覆土はローム粒子を多量に含む黒褐色土を基調としていた。

カマドは北西壁に位置する。焚口にはピット状の掘り込みがあり、先端は僅かに壁を切り込んでいる。覆土は4層に分かれ、第Ⅲ層下面が火床面に相当しよう。袖は灰褐色粘質土で構築され基底部が僅かに残存する。

貯蔵穴はカマド脇の西隅に設けられている。長径44cmの楕円形プランを呈し、深さは12cmを測る。埋土には炭化物粒子が少量含まれていた。




**第493図　C区第83号住居跡**




**第494図　C区第83号住居跡出土遺物**

ピットは3本検出されたが柱穴とはならないであろう。

出土遺物は少なく、土師器坏が3点、甕胴部1点、須恵器瓶類の底部片1点が検出されたに留まる。第494図1は比企型坏、2は模倣坏か。3は長頸瓶底部である。7世紀代と思われるが時期の限定は困難である。

**C区第83号住居跡出土遺物観察表**(第494図)

| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器高 | 底　径 | 胎　　土 | 焼成 | 色　調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | (12.0) | 3.3 | | ABE | A | 橙 | 10% | 覆土　無彩 |
| 2 | 坏 | (11.0) | 1.9 | | BJ | A | 橙 | 5% | 覆土　赤彩 |
| 3 | 瓶 | | 2.1 | (10.0) | ABC | A | 灰 | 5% | 覆土　胴部下端ヘラケズリ |

**C区第84号住居跡**(第495図)

G-28区に位置する。形態は長方形を呈し、規模は長軸3.64m、短軸2.98m、深さ10cmを測る。主軸方位はN－88°－Eを示す。

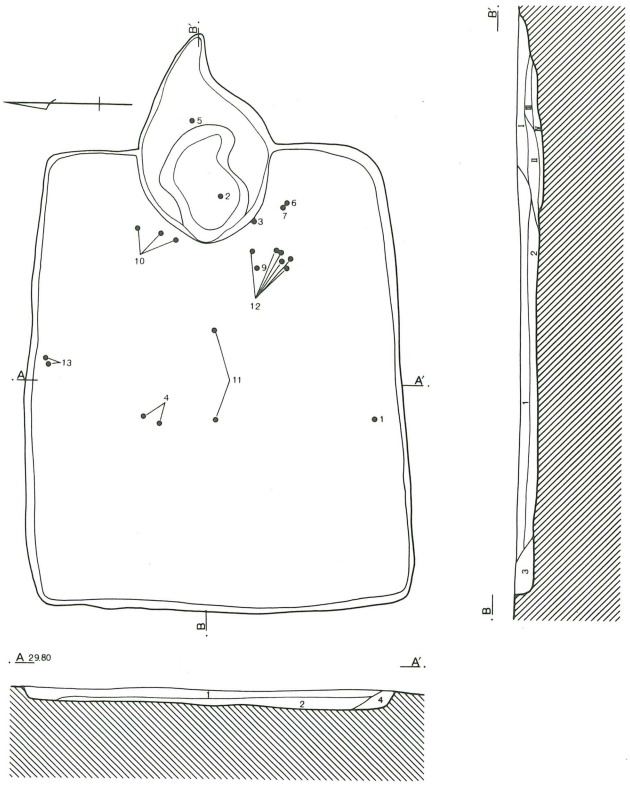
床面は礫が浮き出た状態で凹凸をもつ。覆土は暗褐色土を基調とし、上層には砂粒が、下層には黒色土ブロックが多量に含まれていた。

カマドは東壁に位置する。焚口から先端までの長さは1.62m、最大幅1.02mを測る。覆土は4層に分かれ、第Ⅰ～Ⅲ層が天井部崩落土、第Ⅳ層は掘り方か。袖は検出されなかった。

貯蔵穴、ピット等の付属施設は存在しない。

出土遺物は土師器と須恵器、勾玉がある。土師器は甕が5点、小形甕2点、台付甕2点、須恵器は坏が34点、椀3点、甕1点、甑1点、瓶類1点が検出された。

第496図1～5は須恵器坏で、底部は回転糸切り後無調整である。底径は口径の1/2を切るもの(1・3)と上回るもの(2)がある。椀は2タイプあり、何れも深椀形態である(6・7)。10は須恵器甑で、底部は楕円形に穿孔され、橋状を呈する。

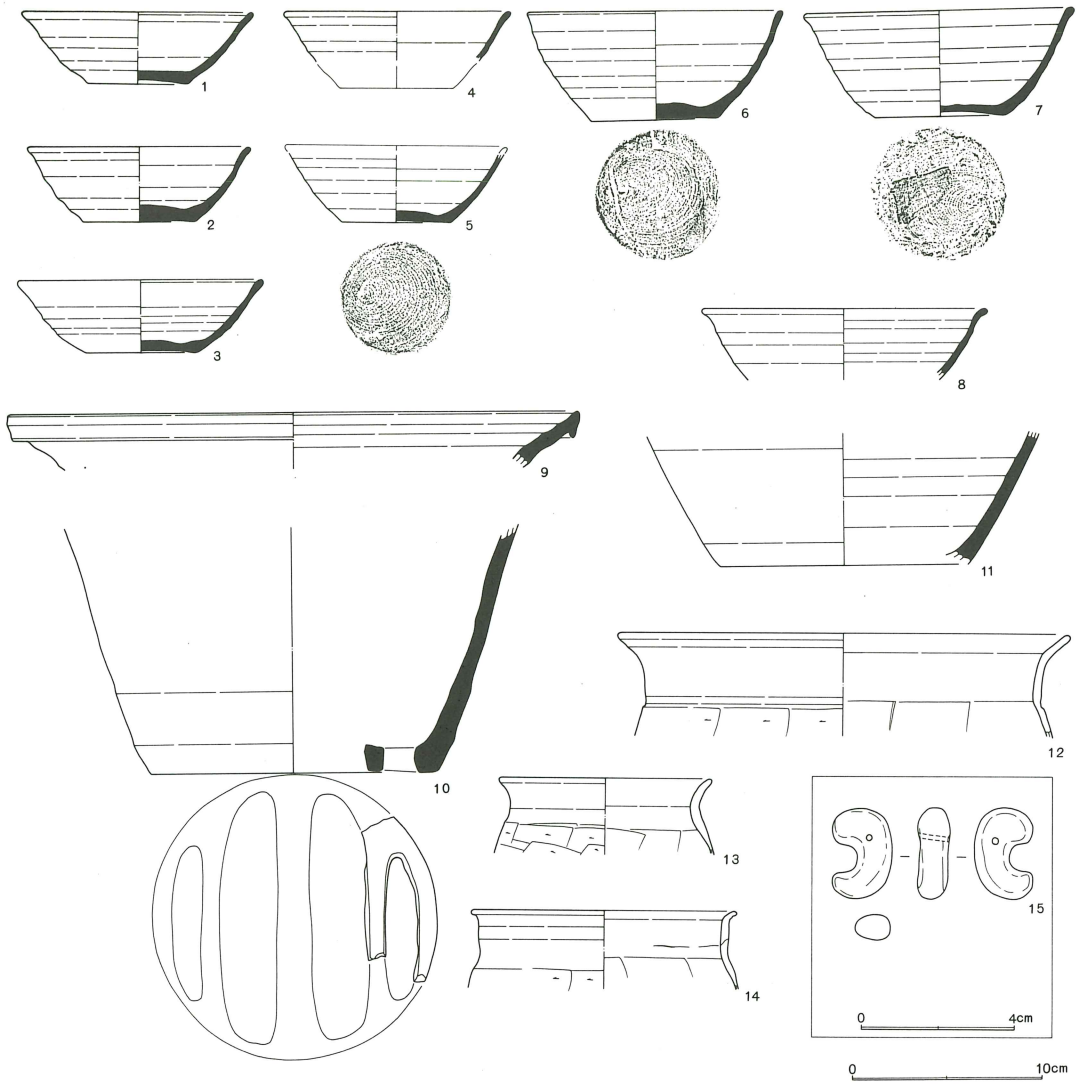



**第495図 C区第84号住居跡**

土師器甕(12～14)はいわゆる「コ」の字状口縁甕である。13・14は小形で台付甕かもしれない。15は滑石製勾玉である。全長2.4cm、厚さ0.9cm、孔径0.15cmで両面から穿孔される。混入と考えられる。須恵器坏類と土師器甕の様相から稲荷前XII期～XIII期に位置付けられるが、主体はXIII期にあると思われる。

**C区第84号住居跡出土遺物観察表**(第496図)

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | (12.0) | 3.8 | 5.1 | AB | C | 浅黄橙 | 60% | No.99 覆土(+5cm) |
| 2 | 坏 | (11.5) | 3.9 | 6.0 | ABC | A | 青灰 | 20% | No.96 床面 |
| 3 | 坏 | (12.7) | 3.8 | 5.7 | ABC | D | 灰褐 | 70% | No.27 覆土(+7cm) |
| 4 | 坏 | (11.7) | 2.6 | | ABC | A | 暗青灰 | 25% | No.68,92 覆土(0～+4cm) |




**第496図　C区第84号住居跡出土遺物**

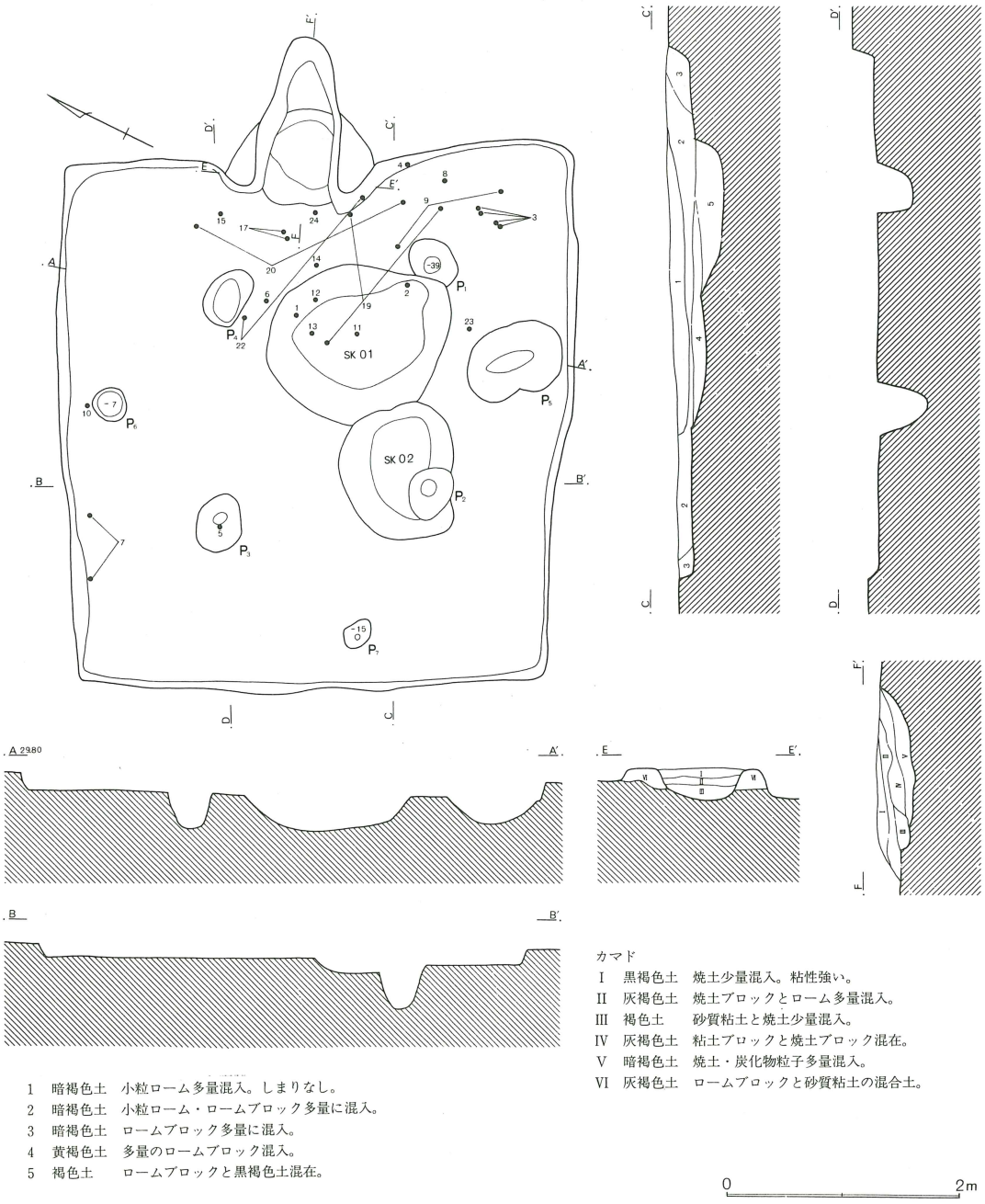
| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器高 | 底　径 | 胎　土 | 焼成 | 色　調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 5 | 坏 | | 3.6 | 5.7 | ABC | B | 浅黄橙 | 70% | No.107　覆土(+6cm),カマド内 |
| 6 | 椀 | 13.4 | 5.7 | 6.7 | ABC | B | にぶい黄橙 | 70% | 覆土 |
| 7 | 椀 | (14.0) | 6.8 | | ABC | A | 灰 | 60% | 覆土 |
| 8 | 坏 | (14.7) | 3.7 | | ABC | B | 暗灰黄 | 15% | カマド内覆土 |
| 9 | 甕 | (30.0) | 2.9 | | ABC | B | 灰 | 5% | No.11　床面 |
| 10 | 甑 | | 12.9 | (15.0) | ABC | B | 淡黄 | 15% | No.1,2,88　覆土(+6～12cm) |
| 11 | 坏 | | 6.9 | (13.0) | ABC | A | 灰 | 15% | No.6,65　覆土(+4～6cm)　底部剝落 |
| 12 | 甕 | (23.5) | 5.4 | | ABC | A | 橙 | 15% | No.14,19他　覆土(+2～10cm) |
| 13 | 小形甕 | 11.0 | 4.0 | | ABE | A | にぶい橙 | 60% | No.80,81,102　覆土(+4～8cm) |
| 14 | 小形甕 | 13.6 | 4.1 | | ABE | A | 橙 | 10% | カマド内 |
| 15 | 勾　玉 | | | | | | | | 全長2.4,最大厚0.9,孔径1.5cm　滑石製 |

## C区第85号住居跡（第497図）

H-28・29区に位置する。形態は方形を呈し、規模は長軸4.52m、短軸4.44m、深さ10～20cmを測る。主軸方位はN－64°－Eを示す。

床面は全体に堅いが起伏がある。覆土はロームブロックを多量に含む暗褐色土を基調としていた。

カマドは東壁に設けられていた。長さは1.46m、燃焼部上幅70cmを測り、底面は床面から10cm掘り凹められている。覆土は5層に分かれる。第Ⅰ～Ⅳ層は天井部崩落土、第Ⅴ層は灰層として良い




第497図　C区第85号住居跡

か良く判らない。袖は基底部のみ残存し、ロームブロックと焼土を含む粘質土で構築されていた。

ピットは7本検出され、$P_1$～$P_4$が主柱穴に相当しよう。他のピットは直接伴うものではない。住居中央部から土壙が2基検出された。埋土は黒色土とロームブロックの混土層で構成され、床下土壙と推定される。

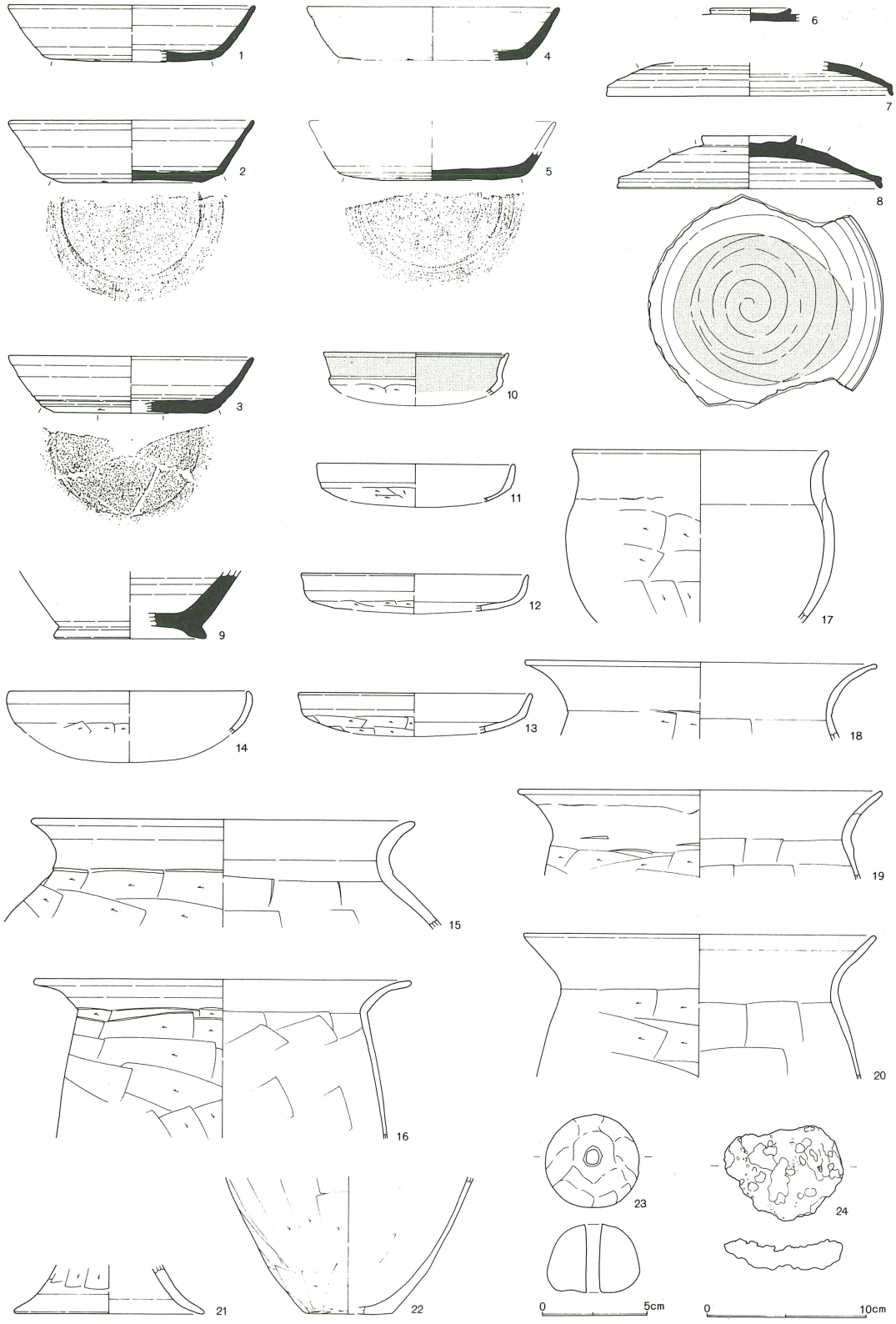
出土遺物は土師器と須恵器、紡錘車、鉄滓がある。土師器は坏が10点、甕11点、台付甕1点、小形甕1点、須恵器は坏が11点、蓋3点、長頸瓶1点、甕胴部片2点が検出された。土師器坏は模倣坏系比企型坏3点、北武蔵型坏4点、硬質な焼き上がりの坏2点、暗文坏1点に分かれる。

第498図1～5は須恵器坏で、何れも口径15cm代の大振りな一群で構成される。全て底部は回転ヘラケズリ調整されるが、3は体部下端まで削られ、底部中心には静止糸切り痕が残る。6～8は蓋で、6・8は環状鈕が付される。8の内面は磨滅し、破面も古いことから転用硯の可能性もある。

10～14は土師器坏。10は混入の可能性が高い。11はおそらく在地産と思われる坏で、硬質な焼き上がりである。12～14は北武蔵型坏で、12・13は皿状を為す。16・18～20は土師器甕。口縁部の屈曲が強いものと、「く」の字状に折れるものがある。23は土製紡錘車。直径4.5cm、厚さ3.2cm、重量65g。軸孔は径0.7cmで中心を外れる。指撫でにより整形されている。24は椀形滓。長径7.5cm、短径5.7cm、最大厚1.8cm、重量90g。上面は平坦で下面は湾曲する。黒褐色を呈する重量感のある滓である。出土遺物は稲荷前Ⅵ～Ⅶ期の土器群を中心に構成されているものと考えられる。

**C区第85号住居跡出土遺物観察表**(第498図)

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | (15.4) | 3.6 | (11.3) | ABC | A | 灰 | 20% | No.52　覆土(+18cm) |
| 2 | 坏 | (15.3) | 3.9 | (11.5) | ABC | A | 灰白 | 45% | No.184　覆土(+4cm) |
| 3 | 坏 | (15.4) | 3.6 | 9.6 | ABC | A | 灰 | 40% | No.88,131他　覆土(+18～25cm) |
| 4 | 坏 | (15.8) | 3.4 | (11.7) | ABC | A | 灰白 | 10% | No.167　覆土(+15cm)　口唇部内面磨滅 |
| 5 | 坏 | | 1.8 | 11.2 | ABC | A | 灰白 | 50% | No.182　$P_3$内(-6cm) |
| 6 | 蓋 | | 0.8 | | ABC | B | 灰 | 80% | No.25　覆土(+18cm)　鈕径5.0cm |
| 7 | 蓋 | (17.8) | 2.1 | | ABC | A | 灰白 | 20% | No.113,115　覆土(+11～13cm) |
| 8 | 蓋 | (16.5) | 3.3 | | ABC | A | 灰白 | 80% | No.185　覆土(+15cm) |
| 9 | 瓶 | | 4.3 | 9.3 | ABC | A | 灰 | 30% | No.73,86　覆土(+17cm) |
| 10 | 坏 | (11.6) | 2.6 | | ABC | A | 浅黄橙 | 10% | No.112　覆土(+10cm)　赤彩 |
| 11 | 坏 | (12.4) | 2.4 | | AB | A | 橙 | 10% | No.69　覆土(+14cm)　硬質 |
| 12 | 坏 | (14.2) | 2.3 | | BE | A | にぶい橙 | 10% | No.57　覆土(+19cm)　北武蔵型 |
| 13 | 坏 | (14.6) | 2.5 | | BE | A | にぶい橙 | 10% | No.53　覆土(+15cm)　北武蔵型 |
| 14 | 坏 | (15.0) | 2.7 | | BE | A | 浅黄橙 | 10% | No.55　覆土(+7cm)　北武蔵型 |
| 15 | 壺 | 23.8 | 6.8 | | ABCJ | B | にぶい黄橙 | 35% | No.148,175　覆土(+2～24cm) |
| 16 | 甕 | 23.6 | 9.9 | | ABE | A | にぶい橙 | 35% | カマド内 |
| 17 | 小形甕 | (16.0) | 10.8 | | ABCE | B | にぶい黄橙 | 15% | No.43,44　覆土(+18cm)+カマド内 |
| 18 | 甕 | (22.0) | 4.8 | | ABE | A | にぶい橙 | 10% | カマド内 |
| 19 | 甕 | 22.6 | 5.5 | | ABE | A | にぶい橙 | 90% | No.64他　覆土(+2～23cm)+カマド内 |
| 20 | 甕 | (22.0) | 9.0 | | ABE | A | にぶい橙 | 15% | No.6,79　覆土(+11～21cm) |
| 21 | 台付甕 | | 3.0 | (11.8) | ABE | B | にぶい赤褐 | 20% | カマド内 |
| 22 | 甕 | | 8.6 | 5.5 | ABE | A | にぶい褐 | 50% | No.22,138　覆土(+12～14cm) |
| 23 | 紡錘車 | | | | ABC | A | 暗灰 | 100% | No.132　覆土(+12cm) |
| 24 | 椀型滓 | | | | | | | | No.183　カマド前 |



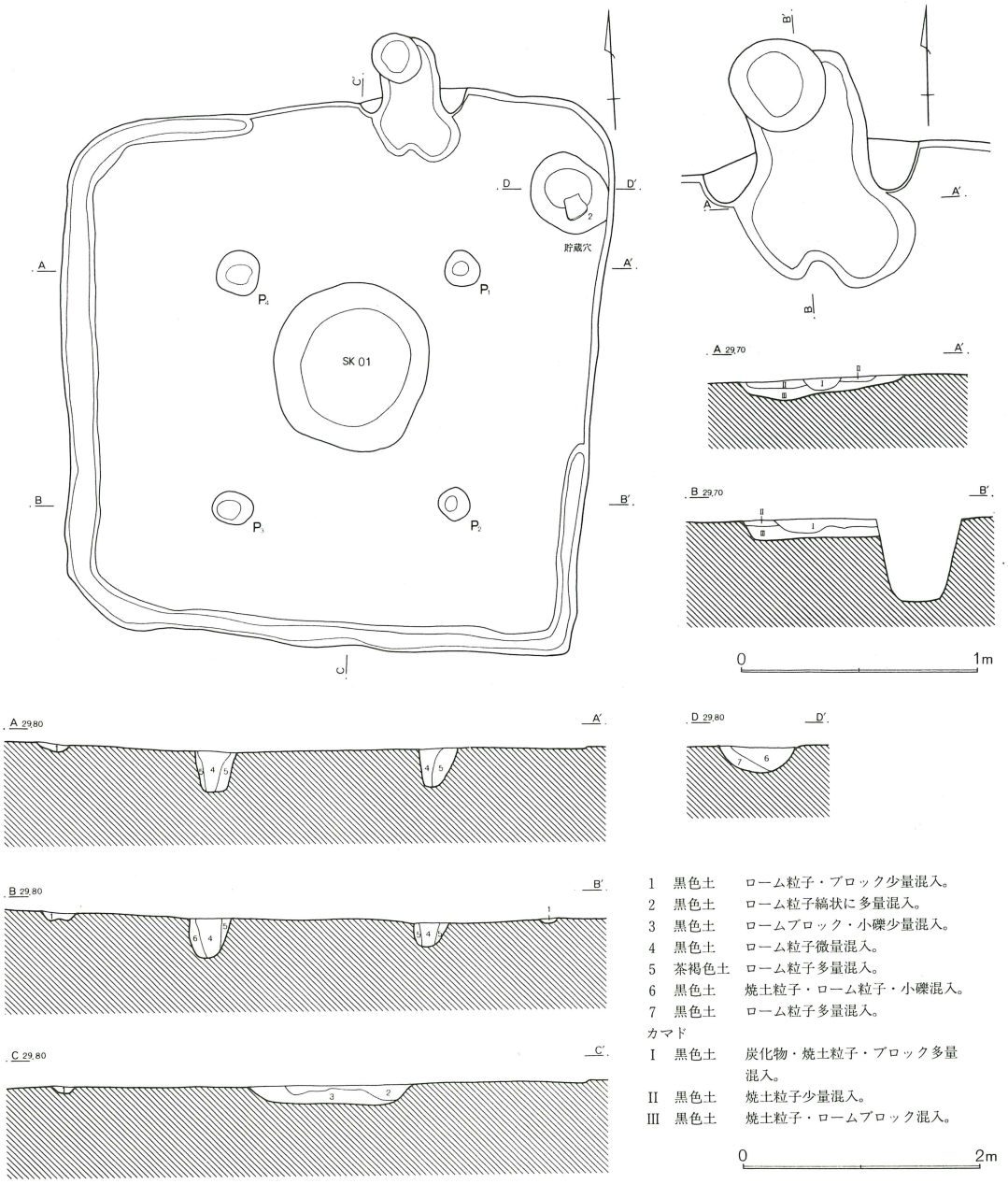

第498図　C区第85号住居跡出土遺物

**C区第86号住居跡**（第499図）

調査区南東部のK・L-29区に単独で位置する。形態は方形を呈し、規模は長軸4.60m、短軸4.56mを測る。深度は浅く遺構確認段階でほぼ床面まで達していた。主軸方位はN－3°－Wを示す。

床面は平坦である。覆土は残存しない。

カマドは北壁に位置する。先端部はピットの攪乱を受ける等遺存状態は悪い。長さは1.00m、燃焼部幅50cmで、底面は床面を10cm掘り込んでいた。覆土は焼土混じりの黒色土で構成されるが詳細は不明である。袖部には褐色粘質土が僅かに残存していた。




1　黒色土　ローム粒子・ブロック少量混入。
2　黒色土　ローム粒子縞状に多量混入。
3　黒色土　ロームブロック・小礫少量混入。
4　黒色土　ローム粒子微量混入。
5　茶褐色土　ローム粒子多量混入。
6　黒色土　焼土粒子・ローム粒子・小礫混入。
7　黒色土　ローム粒子多量混入。

カマド

I　黒色土　炭化物・焼土粒子・ブロック多量混入。
II　黒色土　焼土粒子少量混入。
III　黒色土　焼土粒子・ロームブロック混入。

**第499図　C区第86号住居跡・カマド**

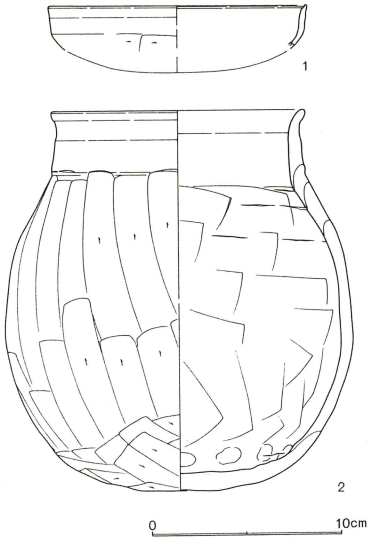
貯蔵穴はカマド脇の北東コーナーに設置される。長径70cmの楕円形プランを呈し、深さは20cm。

ピットは５本検出された。$P_1$～$P_4$は規則的に配置され主柱穴を構成するものと考えられる。土壙は住居中央部から検出された（ＳＫ01）。埋土はロームブロックが縞状に堆積し床下土壙と推定される。

壁溝は深さ５cmで北東側を除き巡っていた。

出土遺物は土師器坏が１点と甕１点が検出されたに留まる。

第500図１は比企型坏小片で口径は不安定である。２は小形甕で貯蔵穴内から出土した。時期は明確にできないが６世紀末葉～７世紀前半代には納まるであろう。




**第500図　Ｃ区第86号住居跡出土遺物**

**Ｃ区第86号住居跡出土遺物観察表**（第500図）

| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器高 | 底　径 | 胎　　土 | 焼成 | 色　調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | (13.5) | 2.3 | | ＡＢＣ | Ａ | 橙 | 5% | 覆土　風化により赤彩不明 |
| 2 | 小形甕 | (13.2) | 19.9 | | ＡＢＣ | Ａ | 浅黄橙 | 55% | 貯穴内 |

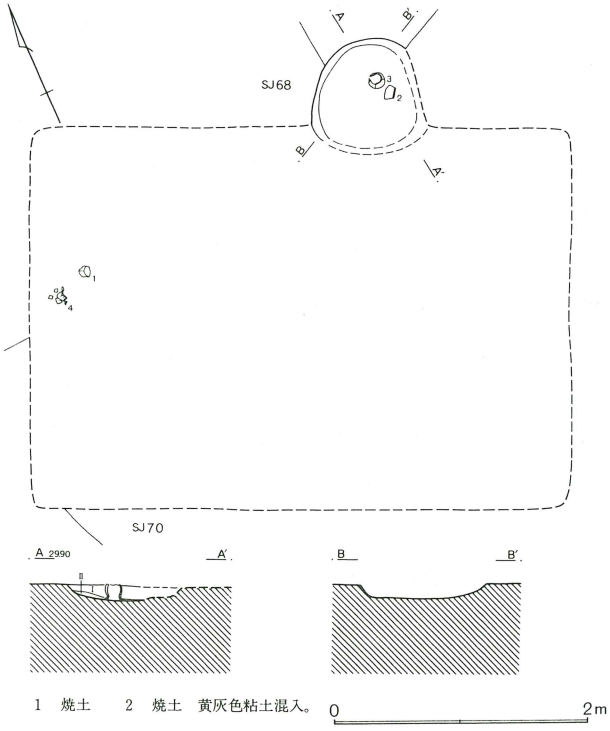
**Ｃ区第87号住居跡**（第501図）

Ｇ・Ｈ-25区に位置する。第68～70号住居跡の上面に構築され、カマドの一部が検出されたのみである。形態及び規模は不明。

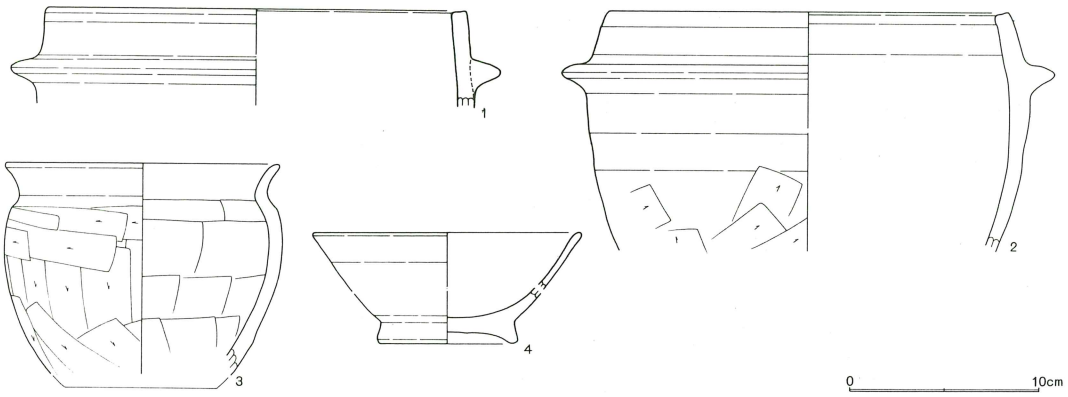
カマドは深さ10cm程で埋土は黄灰色粘土混じりの焼土が堆積していた。底面からは小形甕が倒立した状態で出土した。出土遺物は４点ある。

第502図１・４は第68号住居跡中に、２は第70号住居跡覆土上面から出土したもので本住居跡に帰属するものと考えた。

第502図１・２は羽釜。焼成は土師質、胎土に白色針状物質を含む。３は小形甕。４は土師質高台坏。稲荷前ＸＶ期に比定される。




**第501図　Ｃ区第87号住居跡**




**第502図　C区第87号住居跡出土遺物**

**C区第87号住居跡出土遺物観察表**(第502図)

| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器高 | 底　径 | 胎　土 | 焼成 | 色　調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 羽　釜 | (22.0) | 5.0 | | ABC | B | 浅黄橙 | 5% | No.149　覆土 |
| 2 | 羽　釜 | (21.0) | 12.5 | | ABCJ | B | にぶい黄橙 | 15% | No.157　カマド内　土師質 |
| 3 | 小形甕 | 14.2 | 11.0 | | ABI | A | にぶい橙 | 80% | No.215　カマド底面 |
| 4 | 高台坏 | (14.0) | 5.8 | (7.0) | AB | D | 橙 | 40% | No.189,192　覆土 |

## (2)　掘立柱建物跡

**C区第1号掘立柱建物跡**(第503図)

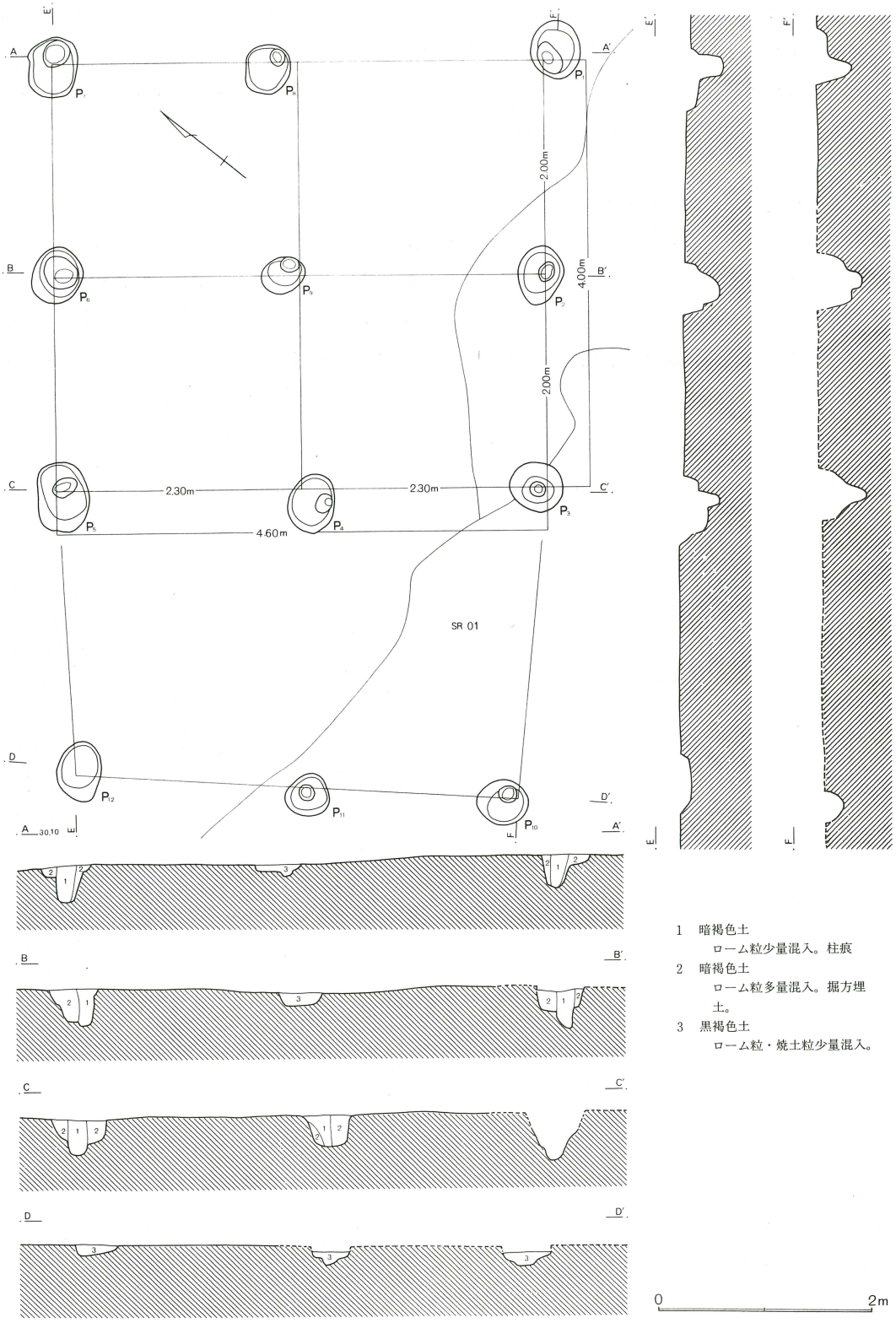
調査区西北部のD・E-19・20区に位置し、第1号周溝墓の北周溝を切って掘り込まれていた。2×2間の総柱建物と考えられるが、建物南西側には3本のピット($P_{10}$～$P_{12}$)が検出された。建物と一体のものとするには柱筋が揃わない。また庇とするには距離が離れ過ぎ、或いは建物に付随する柵列の可能性もある。建物の規模は桁行4.60m、梁行4.00mを測る。主軸方位はN－38°－Wを示す。

柱穴は円形プランを呈し、直径は50cm前後である。深さは30～50cmほどのものが主体を占め、$P_5$と束柱に相当する$P_9$は浅い。覆土は3層に分かれ、第1層は柱痕、第2層は掘り方埋土である。建物構造としては高床を想起させるが、北東側の中間柱は中軸線からやや外れ、束柱がやや貧弱であること、柱間寸法がやや広いこと等から必ずしも倉庫的な機能に限定することはできないかもしれない。

出土遺物は須恵器椀が$P_6$の覆土から出土した(第508図1)。遺構に伴うとは断定できないが一応古代の建物と考えておきたい。

**C区第2号掘立柱建物跡**(第504図)

D・E-22・23区に位置し、第9・33・34号住居跡、第9号溝跡と重複していた。新旧関係は住居跡よりも新しく、溝跡よりも古い。柱穴のうち3本は検出漏れで不明な点を残しているが、一応3×2間の東西棟の建物と考えて良かろう。規模は桁行6.00m、梁行4.40m、柱間寸法はそれぞれ2.00m、2.20m等間となる。主軸方位はN－79°－Eを示す。



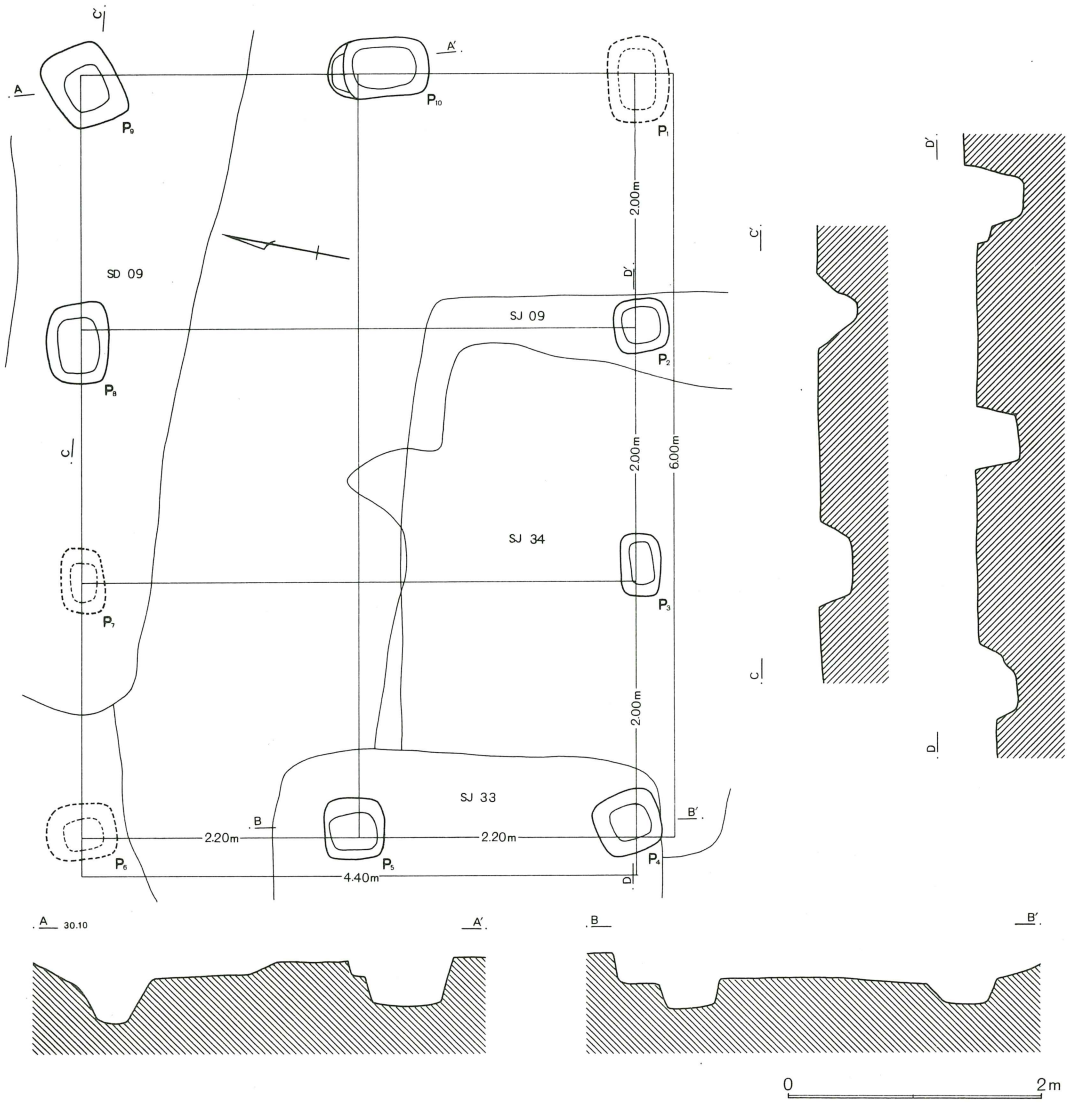

**第503図　C区第1号掘立柱建物跡**

柱穴は方形または隅丸方形プランで、長径は40～60cm前後と比較的規模は小さい。確認面からの深さは50cm前後と比較的深い。埋土の詳細は不明である。

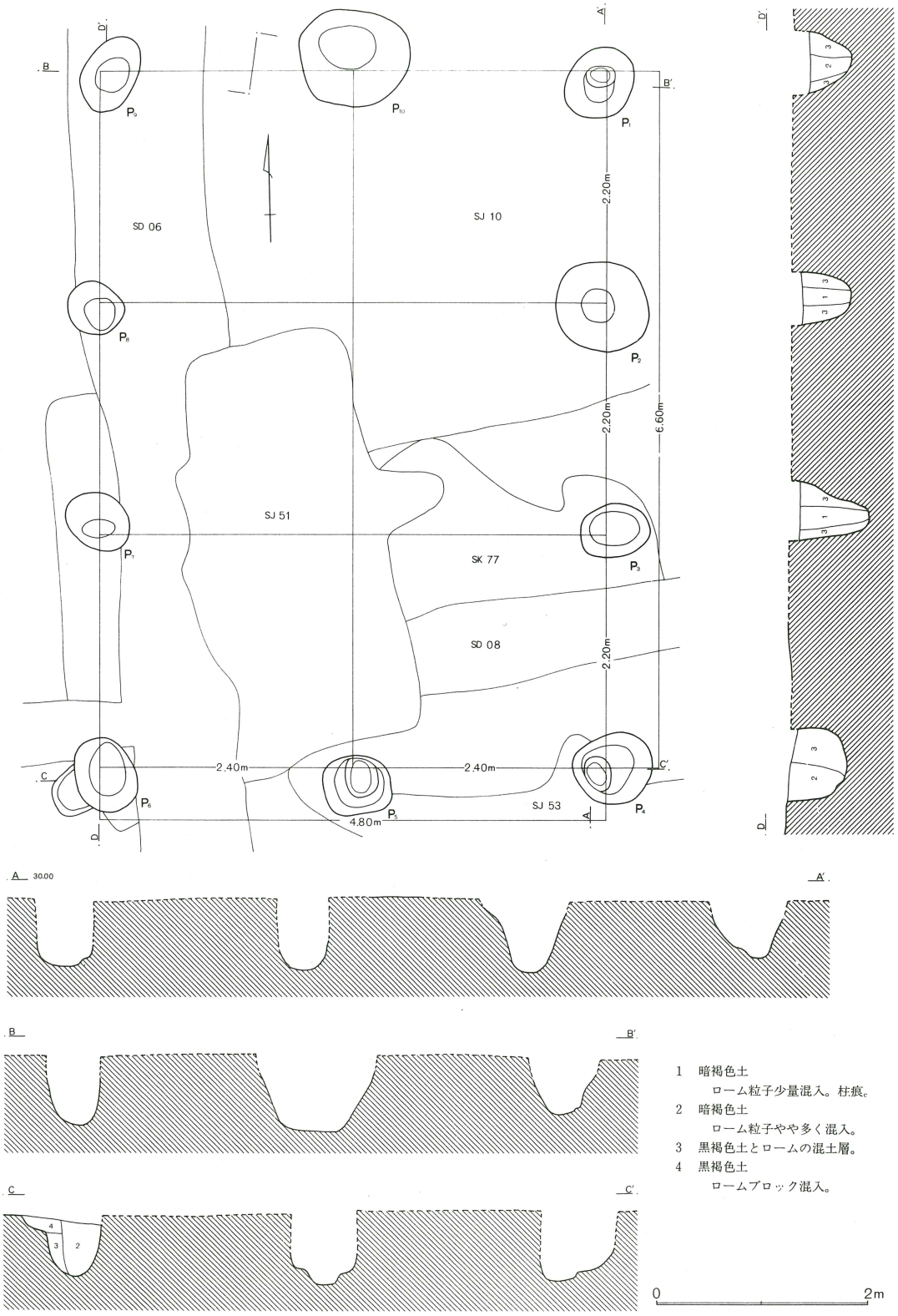
出土遺物は検出されず正確な時期比定はできないが、重複住居の年代から８世紀後半以降である。下限は明確ではないがおそらく10世紀初頭以前と推定される。

**Ｃ区第３号掘立柱建物跡**（第505図）

調査区中央部北寄りのＥ・Ｆ-24区に位置し、第10・51・53号住居跡、第６・８号溝跡、第77号土壙など多数の遺構と重複していた。新旧関係は第10号住居跡、第77号土壙よりも新しく、第51・53号住居跡や溝跡（中世）よりも古いものと考えられる。３×２間の南北棟の建物で、規模は桁行6.60ｍ、梁行4.80ｍを測る。柱間寸法は桁行2.20ｍ、梁行2.40ｍ等間となり柱穴配置は整っている。主軸方位




**第504図　Ｃ区第２号掘立柱建物跡**




第505図　C区第3号掘立柱建物跡

はN－2°－Eを示す。

梁行の中間柱である$P_5$と$P_{10}$は隅柱を結んだラインから外に外れ気味となり、棟持柱的な構造をとる。柱穴は上面を削平されているものが多い関係で規模は一定しないが、遺存状態の良い柱穴で観察すると、形態は円形、または楕円形で直径70cm～100cm前後、深さは60～80cmと全体的に規模は大きく掘り込みも深くしっかりしている。

柱穴埋土は4層に分かれ、第1・2層が柱痕、または柱抜き取り痕と思われる。第3・4層は黒色土とロームの混土層で掘り方埋土と考えられる。

出土遺物は$P_7$から須恵器坏底部が検出された(第508図2)。形態と調整技法からみて8世紀後半段階のものと推定される。重複遺構の年代から見て8世紀初頭前後～9世紀後半以前に位置付けられることは間違いなく、建物の構築年代を示す資料としても矛盾しないであろう。

**C区第4号掘立柱建物跡**(第506図)

E・F-24・25区に位置し、第3号掘立柱建物跡の東側約3mに隣接して構築されていた。第52号住居跡及び第8号溝跡と重複し、前者よりも新しく後者よりも古いことが判明した。3×2間の東西棟の建物で、規模は桁行5.70m、梁行4.50m、柱間寸法は桁行1.90m、梁行2.25m等間となる。主軸方位はN－85°－Wを示す。

柱穴は均等に配置されるが、桁行の$P_2$・$P_3$と$P_7$・$P_8$は隅柱を結んだラインよりも外側に外れ気味となっていた。柱穴は円形から隅丸方形を呈し、径は小さいものでも60cm、大きいものでは1mを超える。深さは50～60cmと全体に深く掘り込まれていた。

覆土は基本的に3層に分かれ、第2層が柱痕、または柱抜き取り痕、第3層が掘り方埋土である。第1層は上層を被覆しており建物解体後の埋土か。

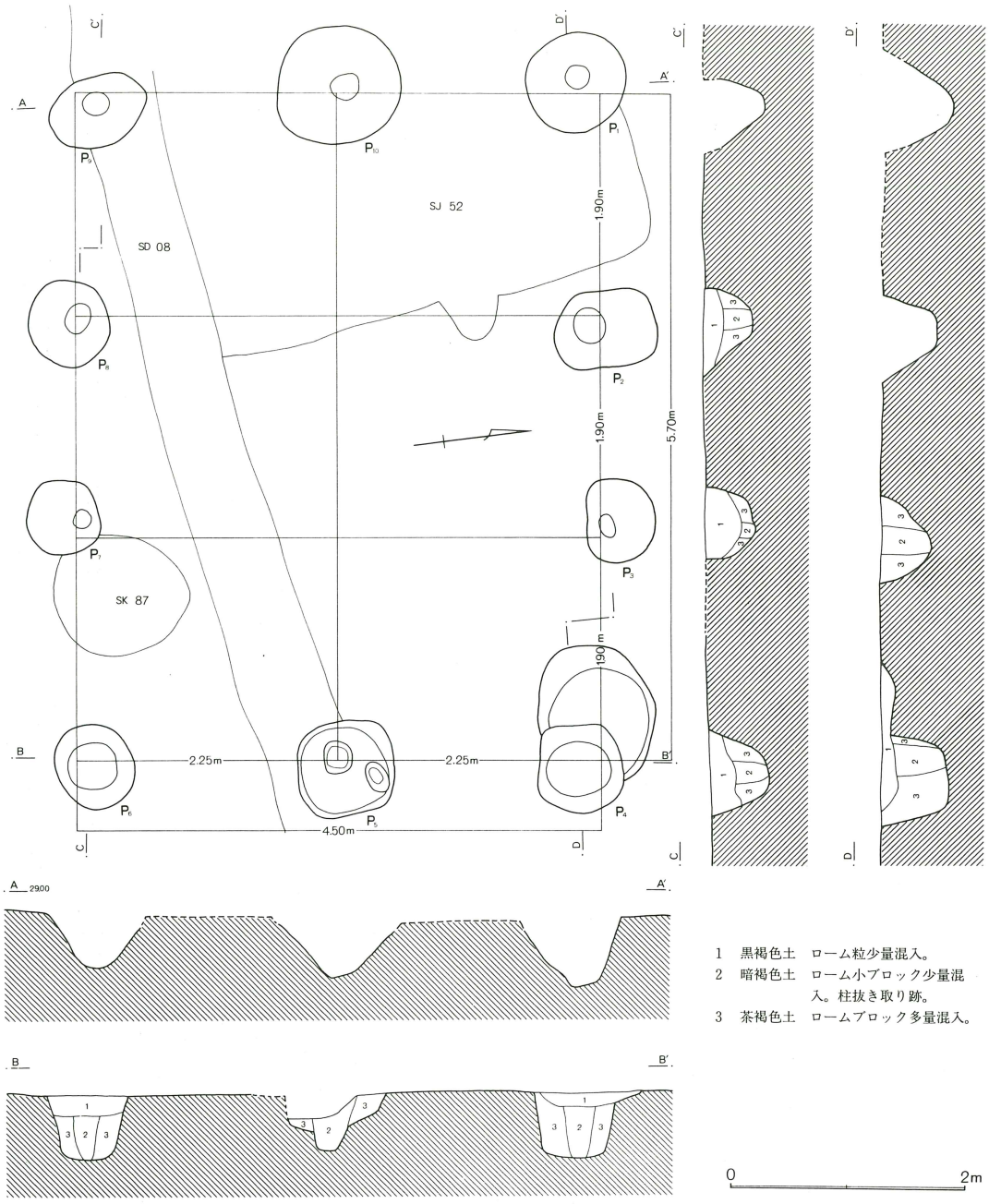
出土遺物は須恵器の椀かと思われる破片が$P_7$覆土から出土した(第508図3)。典型的なタイプと異なるため年代は確定できないが、作りはしっかりしており焼きも良い。9世紀までは降らないであろう。重複住居の年代観からは7世紀中葉以降、中世以前という限定しかできない。隣接する第3号掘立柱建物跡とは東西棟、南北棟という違いはあるにせよほぼ軸が揃い、両者は近接時期、或いは併存した可能性を考慮すべきかもしれない。一応8世紀後半を前後する年代としておきたい。

**C区第5号掘立柱建物跡**(第507図)

調査区中央部南寄りのG・H-21・22区に位置する。第41号住居跡、円形周溝状遺構(SX06)、第17号周溝墓を切って構築されていた。また、建物内部には中世の第22号井戸跡が位置する。3×2間の側柱建物で、規模は桁行7.20m、梁行5.40m、柱間寸法は桁行2.40m、梁行2.70mを測る。主軸方位はN－11°－Eを示す。

3間×2間の建物としては大型で、その分、柱間の間隔は長い。柱穴は均等に配置され形態は整っている。柱穴は隅丸長方形を呈し、北西隅柱のみ「L」字状に掘り込まれていた。柱穴の長径は70～80cm、深さは40～60cmと比較的大きく掘り込みもしっかりしている。

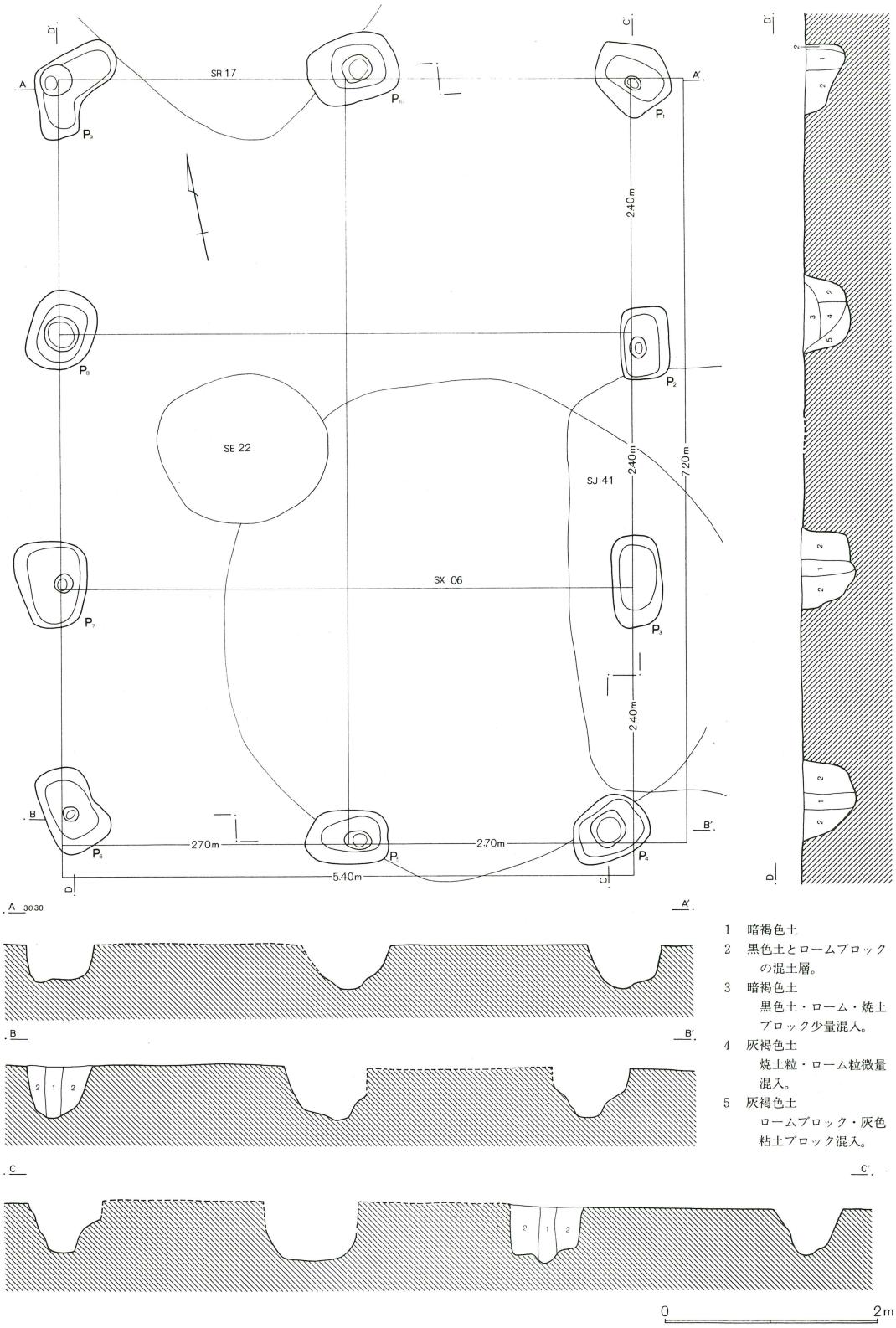
柱穴埋土は5層に分かれ、第1層は柱痕、第2層は掘り方埋土である。$P_8$はおそらく柱が抜き取




**第506図　C区第4号掘立柱建物跡**

られたものと思われ、土層は乱れていた。

出土遺物は$P_2$・$P_4$・$P_5$・$P_9$から須恵器坏・椀・鉢と土師器甕が検出された(第508図5～9)。須恵器坏、椀は8世紀前半代の特徴を具備している。重複住居の年代観からみても矛盾なく8世紀前半、稲荷前Ⅶ期頃に構築されたものと推定しておく。




**第507図　C区第5号掘立柱建物跡**

**C区第6号掘立柱建物跡**(第509図)

調査区中央からやや南東寄りのH-24・25区に位置し、南に第7号井戸跡が接する。3×2間の南北棟の建物で、規模は桁行570m、梁行5.00mを測る。柱間寸法は桁行1.90m、梁行2.50mとなる。主軸方位はN－8°－Eを示す。

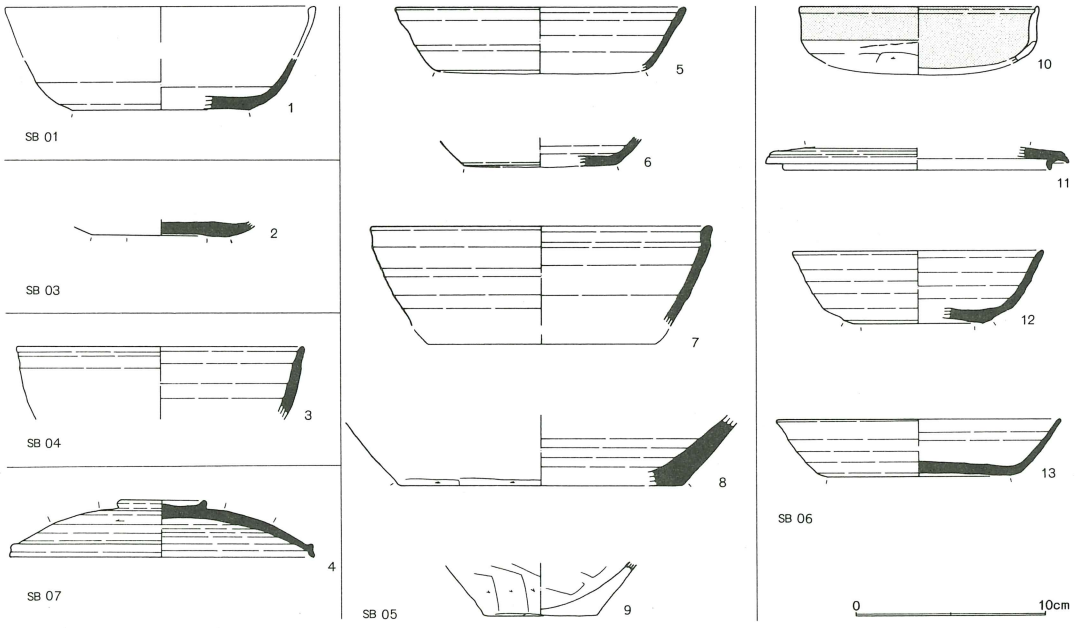
柱間はほぼ均等に揃うが、$P_2$が若干$P_3$寄りにずれていた。また、内部中軸線上には$P_{11}$が位置する。柱痕は観察されなかったが建物に伴う可能性もあり、建物構造としては一部低床式となるかもしれない。柱穴は円形または楕円形を呈し、長径は50～80cm程である。深さは30～60cmとやや差があり、束柱に相当する$P_{11}$は深さ20cmと浅い。

柱穴埋土は4層に分かれる。第1層及び第1′層は柱痕、または柱抜き取り痕、第2層は掘り方埋土に相当しよう。

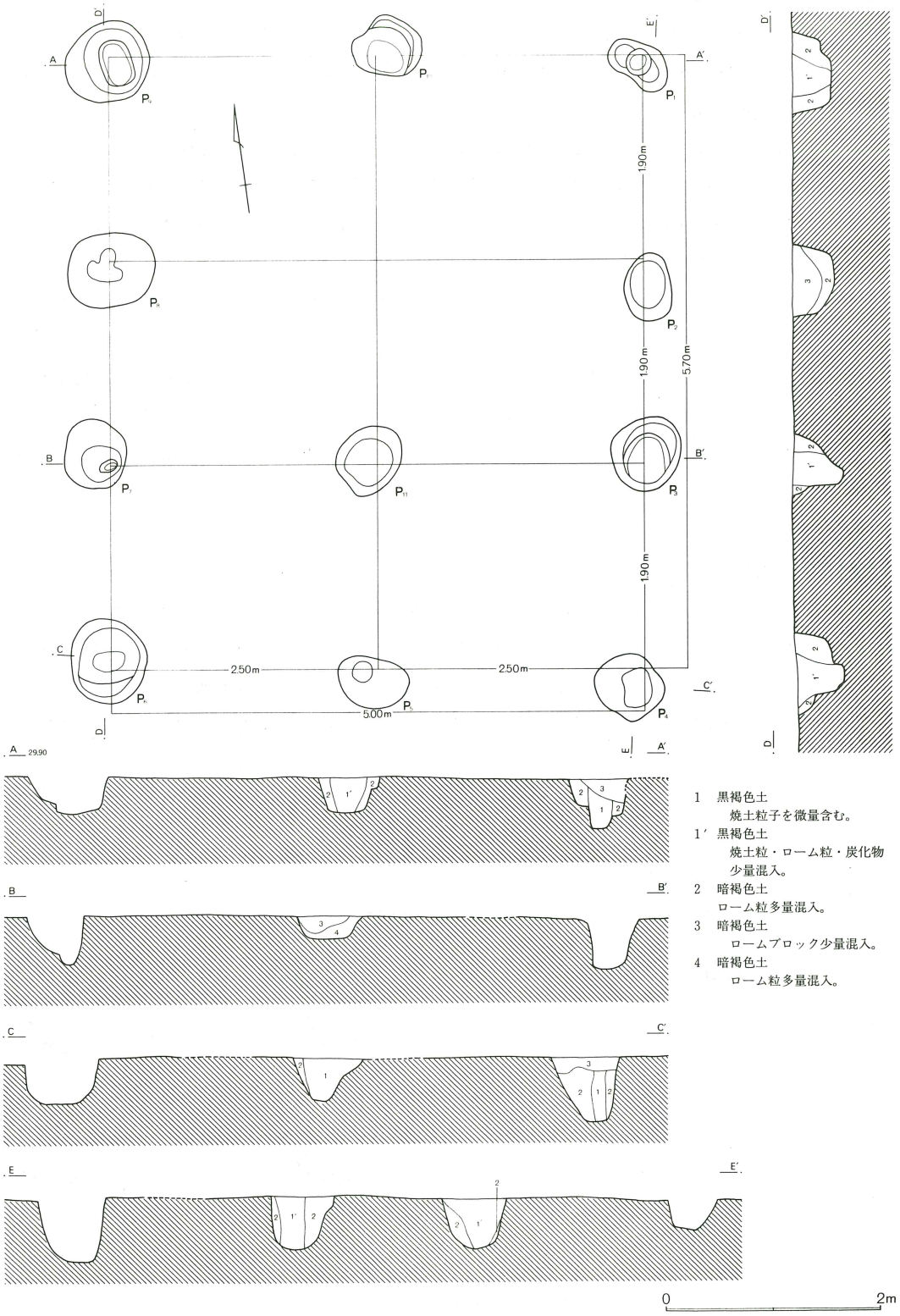
出土遺物は須恵器坏、蓋、土師器坏が柱穴覆土中から検出された(第508図10～13)。土師器坏は7世紀前半、盤状の須恵器坏(13)と特殊かえり蓋(11)は8世紀前半、12の坏は8世紀中葉～後半か。出土状態が明らかでないため特定できないが、一応新しい遺物を基準に稲荷前Ⅷ期頃の建物と考えておきたい。

**C区第7号掘立柱建物跡**(第510図)

調査区北東部のE-26・27区に位置し、第71号住居跡の内部に納まるように構築されていた。調査段階では建物と認識されず、残念ながら不明な点を多く残してしまった。柱穴は5本検出され、住居の周囲には類似したピットは検出されていないため、一応2×2間の建物と推定される。規模は桁行、梁行ともに3.60m、柱間寸法は1.80m等間となり、正方形の建物に復元できる。主軸方位は




**第508図　C区第1～7号掘立柱建物跡出土遺物**

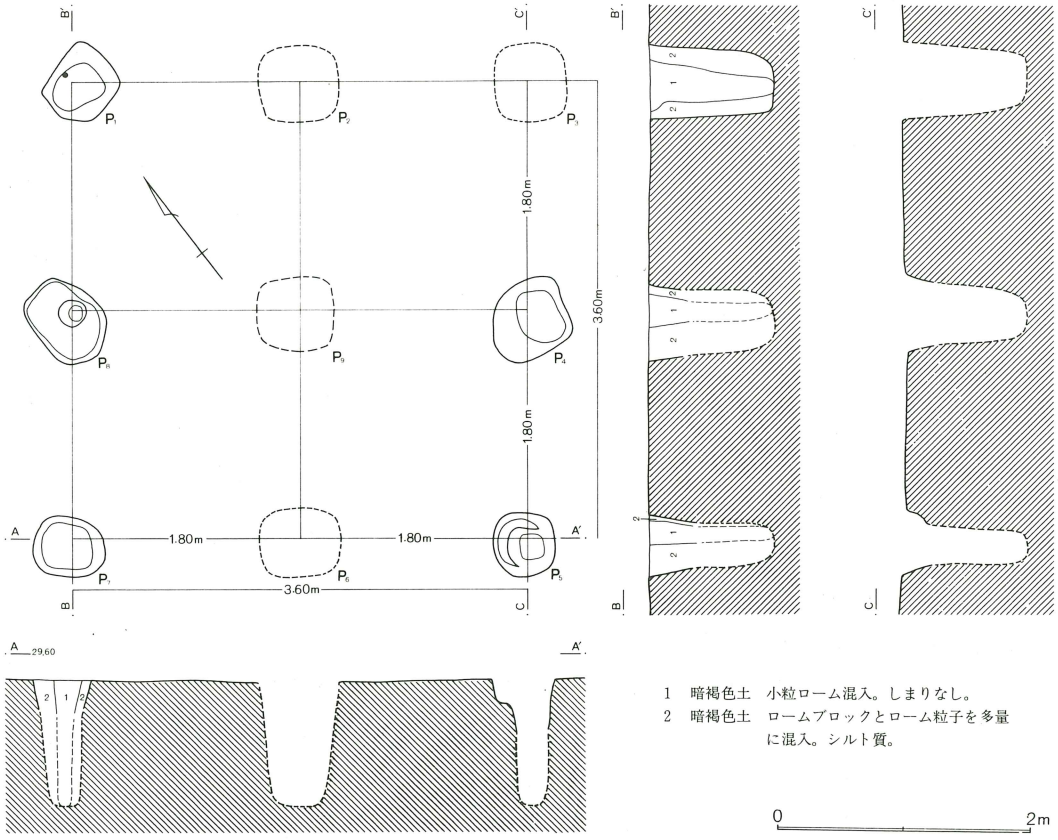



**第509図　C区第6号掘立柱建物跡**

N－38°－Eを示す。

柱穴は隅丸方形を基本とし、長径50～70cm程である。$P_1$の深さは1mにも達する。検出された他の柱穴は30～40cm程の深さで止まっているが、$P_1$の様相から見れば更に深くなるであろう。覆土は2層に分かれ第1層は柱痕、第2層は掘り方埋土である。$P_1$では柱痕が明瞭に観察された。柱間が1.80mと狭く、正方形の形態を採ること、柱穴が非常に深いことから堅牢な建物の下部構造と推定される。おそらく高床の倉庫と考えるのが最も妥当であろう。若し、そうであるとすれば束柱も本来存在した可能性もある。

出土遺物としては、高台状(リング状)鈕を有する須恵器蓋(第508図4)が$P_8$の掘り方から検出された。形態から見ておそらく8世紀中葉を前後する段階のものと思われる。重複住居は7世紀代であり、この須恵器蓋によって建物の構築年代を推定しても矛盾はしないであろう。稲荷前Ⅷ期を前後する頃の建物と考えておきたい。




**第510図　C区第7号掘立柱建物跡**

**C区第1～7号掘立柱建物跡出土遺物観察表**(第508図)

| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 椀 | | 2.6 | (9.2) | ABC | A | 灰 | 10% | SB01-$P_6$ No.1 覆土 |
| 2 | 坏 | | 0.8 | 7.3 | ABC | B | 灰白 | 95% | SB03-$P_7$ 覆土 |
| 3 | 椀 | (15.0) | 3.8 | | ABC | A | 暗青灰 | 10% | SB04-$P_7$ 覆土 |
| 4 | 蓋 | (16.0) | 3.0 | | ABC | A | 灰白 | 25% | SB07-$P_1$ No.183 覆土(＋4cm) 混入 |

| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器高 | 底　径 | 胎　　土 | 焼成 | 色　調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 5 | 坏 | (15.1) | 3.4 | | ＡＢＣ | Ａ | 暗灰 | 5% | ＳＢ05-$P_9$　覆土 |
| 6 | 坏 | | 1.5 | (8.0) | ＡＢＣ | Ａ | 灰 | 20% | ＳＢ05-$P_5$　覆土 |
| 7 | 椀 | (17.8) | 5.2 | | ＡＢＣ | Ａ | 灰 | 10% | ＳＢ05-$P_4$　No.28　覆土 |
| 8 | 鉢 | | 3.7 | (15.0) | ＡＢＣ | Ａ | 灰白 | 10% | ＳＢ05-$P_2$　覆土 |
| 9 | 甕 | | 2.8 | 5.0 | ＡＢＥ | Ａ | にぶい黄橙 | 15% | ＳＢ05-$P_1$　覆土 |
| 10 | 坏 | (12.4) | 3.0 | | ＡＢＣ | Ａ | にぶい橙 | 10% | ＳＢ06-$P_3$　覆土　赤彩 |
| 11 | 蓋 | (15.8) | 1.2 | | ＡＢＣ | Ｂ | 灰 | 5% | ＳＢ06-$P_9$　覆土 |
| 12 | 坏 | (13.1) | 3.8 | (6.8) | ＡＢＣ | Ａ | 灰白 | 15% | ＳＢ06-$P_9$　覆土 |
| 13 | 坏 | (14.8) | 3.0 | 9.6 | ＡＢＣ | Ｂ | 灰白 | 45% | ＳＢ06-$P_6$　SP78　覆土 |

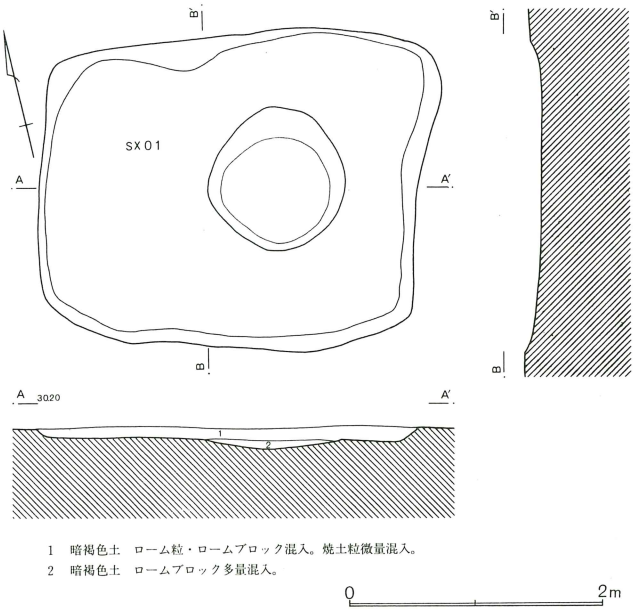
## （３）　竪穴状遺構

### Ｃ区第１号竪穴状遺構（第511図）

調査区西寄りのＧ-19区に位置する。形態は長方形で、規模は長軸3.10ｍ、短軸2.50ｍ、深さ0.10ｍを測る。主軸方位はＮ－75°－Ｗを示す。

底面は中央部に向かって徐々に深くなり、堅く踏み締められた様子は窺われなかった。壁の立上がりは緩やかである。

覆土は２層に分かれ、基本的にはローム混じりの暗褐色土で構成される。また、中央部やや東寄りの位置から直径1.10ｍほどの浅い土壙が検出され、埋土はロームブロックを主体とする黄褐色土で充塡されていた。カマドや炉跡、柱穴等の施設もなく、床面も通常の住居とは同一視はできないようである。一応竪穴状遺構として住居とは別の扱いにしておきたい。

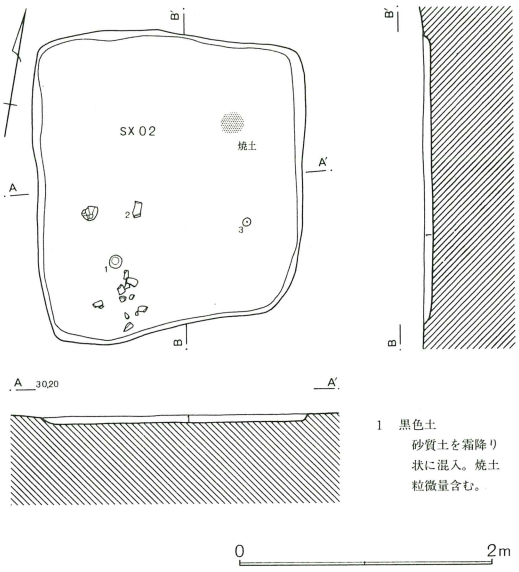



**第511図　Ｃ区第１号竪穴状遺構**

出土遺物は土師器甕と須恵器坏の口縁部小片が検出されたが、図化可能な遺物はない。遺物の時期は８世紀～９世紀代のものと思われるものの遺構に伴うとは断じ切れない。

### Ｃ区第２号竪穴状遺構（第512図）

Ｆ-23区に位置し、第14号方形周溝墓の南溝上面に構築されていた。形態は不整方形で、規模は長軸2.44ｍ、短軸2.10ｍ、深さは0.08ｍと非常に小規模で浅い。主軸方位は西壁に平行するものとするとＮ－12°－Ｗを示す。




第512図　C区第2号竪穴状遺構

床面はほぼ平坦である。

覆土は焼土粒子を僅かに含む黒色砂質土で、土層変化は特に観察されなかった。また、中央からやや北東に寄った底面には僅かに焼土が散布していたが、掘り込みは確認されず炉跡とは異なるものである。

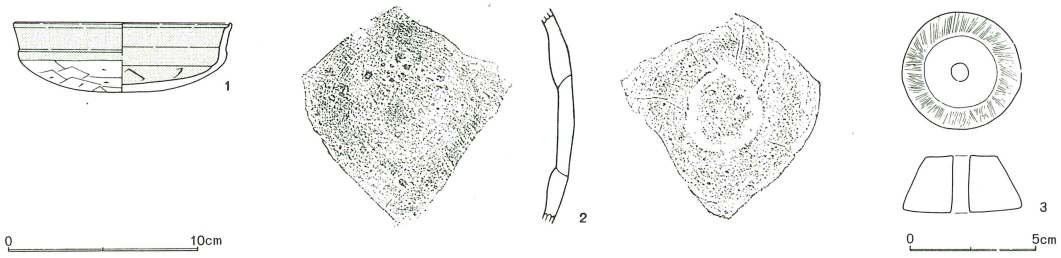
カマドや柱穴、貯蔵穴等の施設は検出されなかった。

出土遺物は土師器坏と甕、須恵器坏と提瓶、石製紡錘車が検出された(第513図)。土師器坏は模倣坏系の比企型坏で口唇部内面に沈線が巡る(1)。提瓶は伴う可能性もあるがよく判らない。一応土師器坏から7世紀後半を中心とした時期と考えておきたい。

第513図1は模倣坏系の比企型坏で赤彩が施されている。法量は口径11.3cm、器高3.6cm。胎土に石英・白色粒子・白色針状物質を含み、焼成は普通である。色調は橙で残存率は55%程である。註記No.1。覆土(+2cm)出土。

2は須恵器のフラスコ瓶胴部片か。外面には同心円状のカキ目が巡る。胎土に石英と白色粒子を含む。白色針状物質は認められないが在地産と思われる。色調はオリーブ黒。註記No.8。覆土(+2cm)出土。

3は滑石製紡錘車。直径4.7cm、厚さ2.3cm、重量70g。中心部に直径0.7cmの軸孔が貫通する。側面は櫛歯状の工具による擦痕が残る。註記No.6。床面出土。

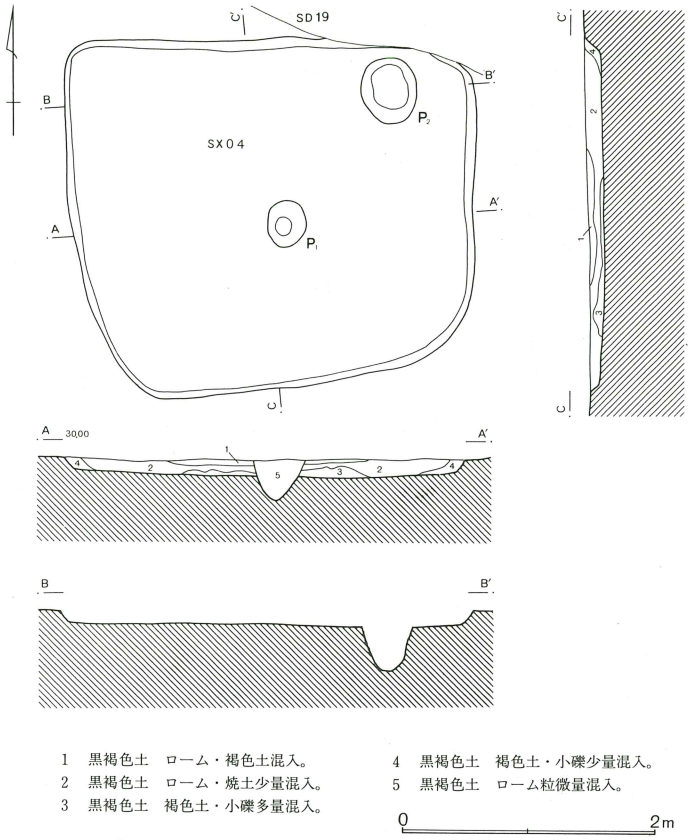



第513図　C区第2号竪穴状遺構出土遺物

**C区第3号竪穴状遺構**(第514図)

調査区南端のM-27区に位置し、第19号溝跡に北東コーナー部を一部攪乱されていた。形態は不整方形で、規模は長軸3.26m、短軸2.82m、深さ0.13mを測る。主軸方位は北壁を基準にするとほぼ座標北を指す。

床面はほぼ平坦である。覆土は5層に分かれ、黒褐色土を基調に構成される。




**第514図　C区第3号竪穴状遺構**

ピットは2本検出された。$P_1$は遺構に伴うものではなく、$P_2$の帰属は不明である。カマド等の附属施設は検出されず住居跡とは断定できなかった。

出土遺物は土師器甕と小形甕の胴部片が出土したのみで、図化可能な遺物はない。

出土遺物から見る限り7世紀～8世紀頃に位置付けられるものと推定されるが遺構の年代を直接表すかどうかは判らない。

## (4)　井戸跡

**C区第1号井戸跡**(第515図)

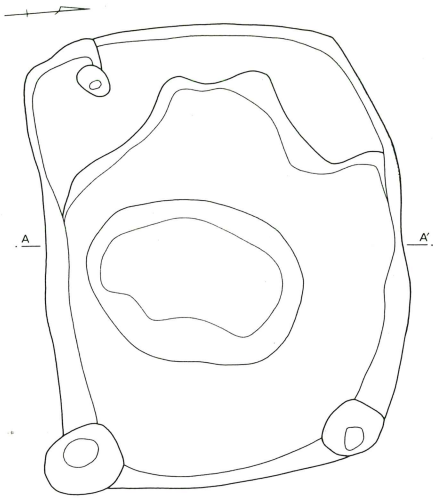
E-27区に位置し、第71号住居跡と壁同士が接していた。掘り込み上面の形態は方形で、中央部に楕円形の井戸が掘り込まれていた。断面観察からは明瞭に把握できなかったが、方形竪穴状の掘り込みは掘り方と見ることもでき、地上に何らかの施設(井戸側)が存在したことも予想される。

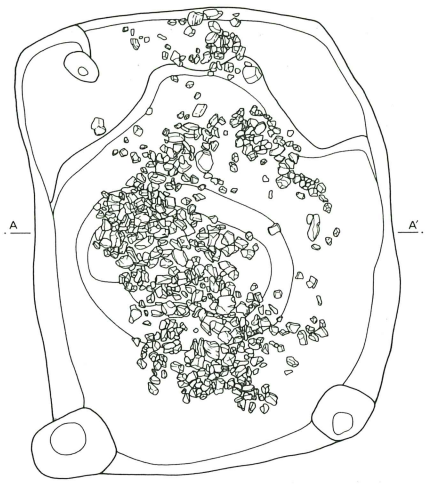
上面の規模は長軸3.60m、短軸2.88m、深さ40～50cmで、西壁側にテラスをもつ。井戸本体は長径1.74m、短径1.25m、深さは1.50m以上となるが、湧水が激しく完掘できなかった。

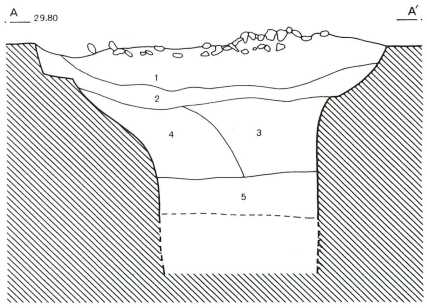
覆土は5層に分かれる。確認面付近(第1層)からは多量の小礫が検出された。井戸埋没後の窪みに投げ込まれたものと考えられる。下層は青灰色の粘質土に移行する(第5層)。

出土遺物は土師器坏、甕、須恵器坏、高台坏、壺類、甕がある(第515図)。1は比企型坏で混入と思われる。2は形態から武蔵型甕の系譜に乗る土器と思われ、胴部上位は横方向のケズリが施されている。3の須恵器坏底部には墨書があるが、判読できない。4は高台坏で、傾きに不安があるが、高台は底部外縁の屈曲点からやや内側に付され、外に踏ん張っている。7の短頸壺は肩部に丸みが見られる。

出土土器は8世紀前半～後半頃のものが含まれている

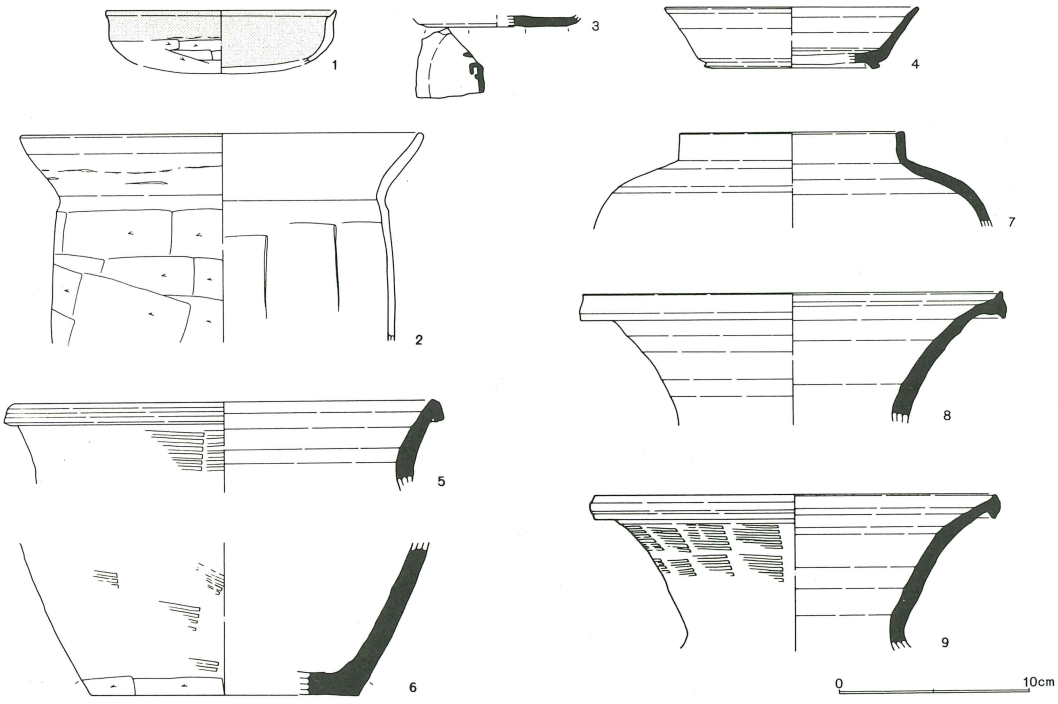



1　暗褐色土　ローム粒・礫多量混入。
2　黒褐色土　ローム粒・砂粒混入。
3　黒褐色土　混入物なし。
4　黒褐色土　混入物なし。粘質。
5　青灰色土　粘質土。

0　2m



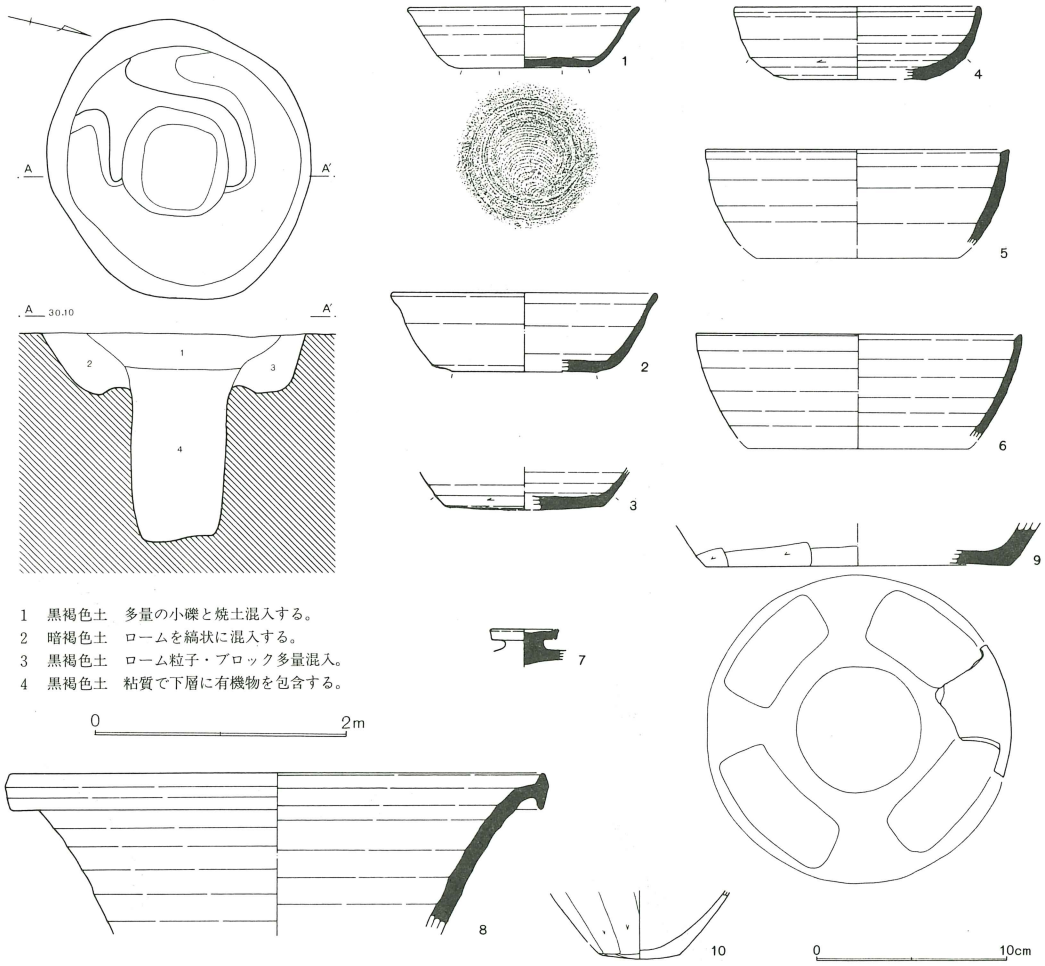

**第515図　C区第1号井戸跡・出土遺物**

**C区第1号井戸跡出土遺物観察表**(第515図)

| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器高 | 底　径 | 胎　　土 | 焼成 | 色　調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | (12.0) | 2.8 | | ABC | A | にぶい橙 | 10% | SX02-覆土　赤彩 |
| 2 | 甕 | (21.0) | 10.9 | | ABEJ | A | にぶい橙 | 25% | SX02-No.25　覆土 |
| 3 | 坏 | | 0.6 | (7.4) | ABC | A | 浅黄橙 | 15% | SX02覆土　底部墨書がある　判読不明 |
| 4 | 高台坏 | (13.2) | 3.2 | (8.4) | ABC | A | 灰 | 15% | SX02No.10　覆土　底部回転ヘラケズリ |
| 5 | 壺 | (22.0) | 4.7 | | ABC | A | 灰 | 10% | SX02覆土　頸部外面叩き後ロクロナデ |
| 6 | 甕 | | 8.0 | (14.0) | ABC | A | 灰 | 20% | SX02-No.38　覆土 |
| 7 | 短頸壺 | (11.6) | 5.0 | | ABC | A | 灰 | 15% | SX02-No.39　覆土 |
| 8 | 甕 | (22.0) | 6.9 | | ABC | A | 灰 | 15% | SX02-No.7　覆土 |
| 9 | 甕 | (21.0) | 8.2 | | ABC | A | 暗灰 | 45% | SX02　覆土 |

**C区第2号井戸跡**(第516図)

F-23区に位置する。井戸本体の周囲に40cmほどの深さのテラスをもつ。上面形態は円形で、規模は直径2.28mを測る。井筒部はやや隅丸気味の円形プランを持ち直径は0.54m、底面までの深さは




**第516図　C区第2号井戸跡・出土遺物**

1.62mである。

覆土は4層に分かれる。第2・3層はロームを多量に含み掘り方部分と考えられる。おそらく井戸側が存在したものと見て誤りないであろう。

出土遺物は須恵器坏、椀、蓋、甕、甑と土師器甕が検出された。かなり時期幅のある土器を含み、坏で見ても第516図1は稲荷前X期、2はⅧ期、4はⅤ期及至Ⅵ期頃と思われる。覆土中層から出土した1を埋没段階の遺物とすると稲荷前X期以前、Ⅷ期前後に機能したものであろうか。

**C区第2号井戸跡出土遺物観察表**(第516図)

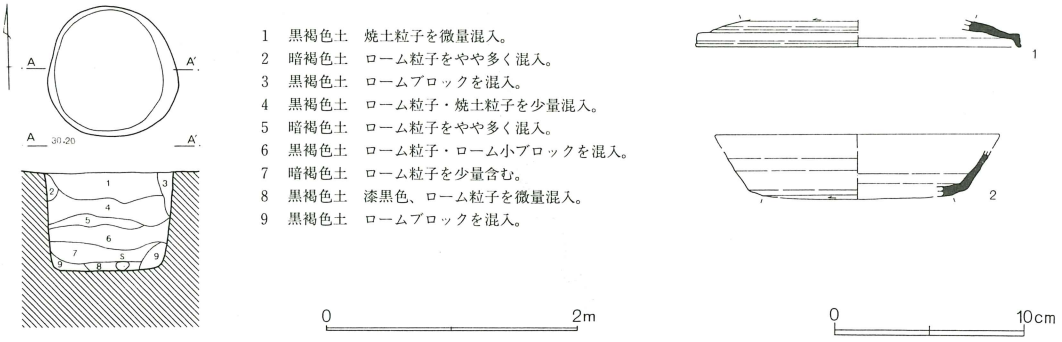
| 番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | 21.0 | 3.2 | 6.7 | ABC | A | 灰 | 90% | No.32,33,35 覆土中層 |
| 2 | 坏 | (13.8) | 4.1 | (7.6) | ABC | A | 灰 | 25% | No.17,19 覆土上層 |
| 3 | 坏 | | 2.2 | (8.4) | ABC | A | 灰 | 25% | No.12 覆土 |
| 4 | 坏 | (12.8) | 3.8 | | ABC | A | 灰 | 15% | 覆土 |
| 5 | 椀 | (15.8) | 5.0 | | ABC | A | 灰 | 10% | 覆土 |
| 6 | 椀 | (17.0) | 5.5 | | ABC | B | 灰白 | 10% | No.90 覆土 口唇部内面磨滅 |
| 7 | 蓋 | | 1.8 | | ABC | A | 灰白 | 90% | No.27 覆土 鈕ほぼ完存 |
| 8 | 甕 | (28.0) | 8.4 | | ABC | A | 灰 | 10% | No.64 覆土下層 |
| 9 | 甑 | | 2.2 | (16.0) | ABC | B | 灰 | 10% | No.59 覆土 底部孔数不明 |
| 10 | 甕 | | 3.6 | 4.3 | ABEJ | A | 橙 | 70% | No.24 覆土上層 |

**C区第3号井戸跡**(第517図)

調査区西部のH-18区に位置する。第19号住居跡と切り合い、新旧関係は本井戸跡の方が新しい。形態は円形で、規模は直径1.00m、深さは1.05mと井戸としては浅い。ほぼ円筒状に掘り込まれ、底面は平坦であった。

覆土は9層に分かれる。全体に暗褐色から黒褐色土で構成され、ロームが比較的多量に含まれていた。

出土遺物は須恵器坏、蓋がある(第517図)。何れも8世紀前半代に位置付けられるもので、或いは重複する第19号住居跡からの流入遺物かもしれない。時期は8世紀前半以降とするしかなさそうである。



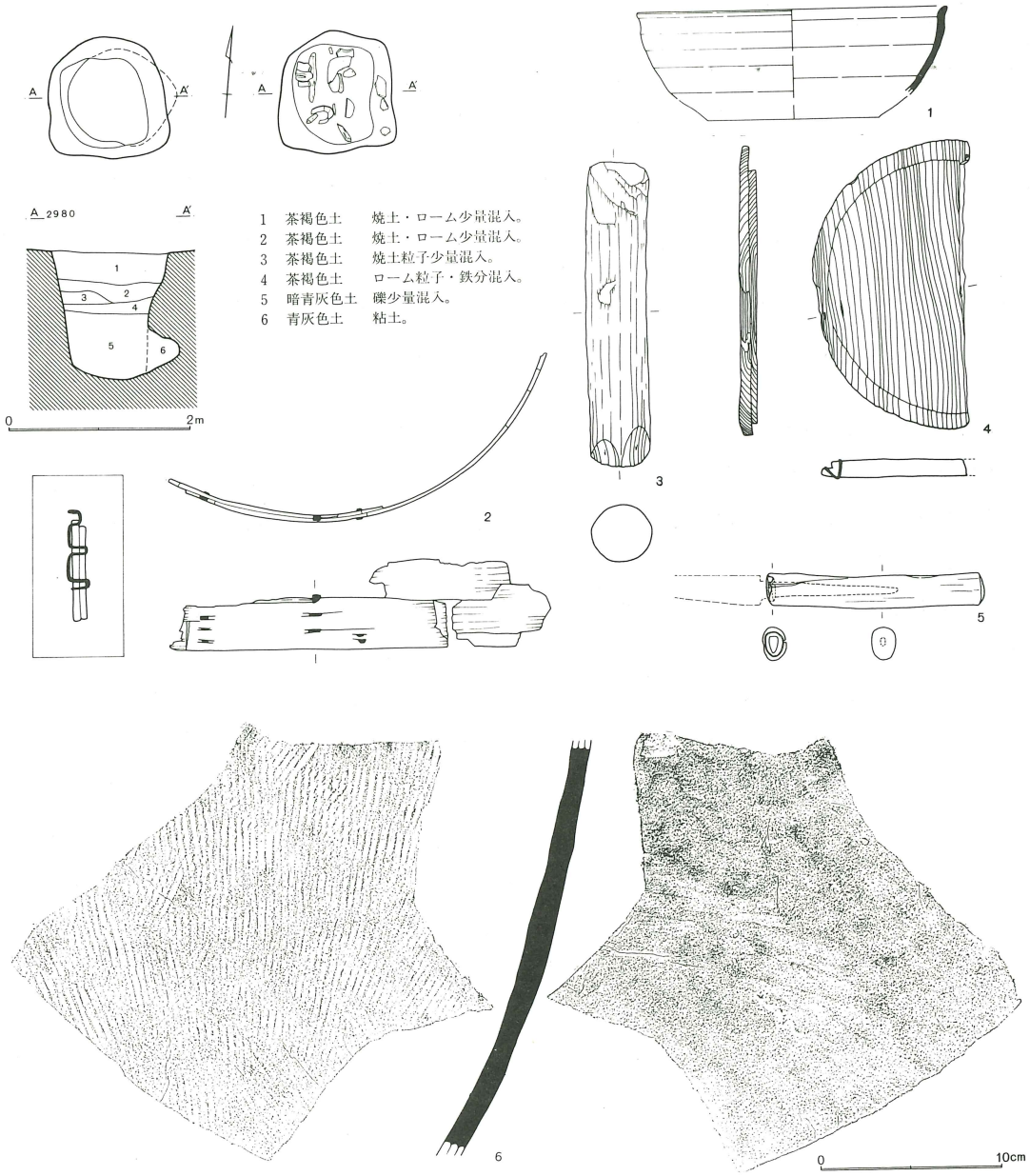

**第517図 C区第3号井戸跡・出土遺物**

**C区第3号井戸跡出土遺物観察表**(第517図)

| 番号 | 器　種 | 口　径 | 器高 | 底　径 | 胎　　土 | 焼成 | 色　調 | 残存 | 出土位置・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 蓋 | (17.0) | 1.4 | | ABC | A | 灰 | 10% | 覆土 |
| 2 | 坏 | | 2.4 | (10.0) | ABC | A | にぶい橙 | 15% | 覆土 |

**C区第4号井戸跡**(第518図)

H-24区に位置する。第4号溝跡に上面を削平されていた。形態は不整方形を呈し、規模は直径1.02




**第518図　C区第4号井戸跡・出土遺物**